

道與德爲虛位。故道有君子。有小人。而德有凶有吉。

【字義】 ○德 得の義で、道を行つて心に得たものの稱。○定名 一定の名目、即ち慈愛を及ぼすは仁、行つて宜しきになふは義であつて、是は一定不變の名である。○虚位 虚しき位、即ち誰れでも坐ることゝ出来る、小人でも君子でも、坐る人によつて君子の道となり小人の道となり、徳でも凶徳もあれば吉徳もある。

【釋義】 博く人を愛するは仁、行つて宜しきになふが義である。この仁と義とに由つて世に處するを道といひ、仁と義とが自身に備つて何不足なく、別に外部に向つて求める必要がないのを徳といふのである。仁と義とは一定の名目で變ずることが出来ないが、道と徳とは虚しき位で、誰れでも之を占領することが出来る。故に道に君子の道があり、小人の道があり、徳にも凶徳と吉徳とがあるのである。

老子之小仁義非毀之也。其見者小也。坐井而觀天。曰天小者非天小也。彼以煦煦爲仁。孑孑爲義。其小之也則宜。

【字義】 ○老子 名は聃、姓は李。周代楚の苦縣の人。其學説は、現在世界の萬有は一切變化を免れず、故に富貴名譽なども、均しく夢幻と化し去るものだから、毫も價値はない。それよりも畢竟此の汚穢極る俗界を棄てるに優つたことはいはないといつて、仁義などを盛んに攻撃した。○煦煦 些し許の恩惠。○孑孑 孤立

の貌。

【釋義】 老子が仁や義を些細の事として之を非難攻撃したのは、つまり眼孔が小さいからである。譬へば井戸の中に這入つて、下から天を見上げて、天は如何にも小さいといふ様なもので、是は天が小なのではなく見る場處が小さいからである。彼の老子は些し許の恩惠を仁と心得、孤立して居るのを義であると心得て居るのだから、之を指して小さいといつたも、決して無理はない。

其所謂道其所謂道非吾所謂道也。其所謂德其所謂德非吾所謂德也。凡吾所謂道德云者。合仁與義言之也。天下之公言也。老子所謂道德云者。去仁與義言之也。一人之私言也。

【釋義】 老子の謂ふ道とは、老子自身で極めた道であつて、自分の謂ふ所の道ではなく、老子の謂ふ徳とは老子自身で極めた徳であつて、自分の謂ふ所の徳ではない。自分が謂ふ道德とは、仁と義とを合せたもので天下一般の認めた道德であつて、老子の謂ふ道德とは、仁と義とを除いたもので、一家の私言に過ぎないのだ。

周道衰孔子沒。火于秦。黃老子漢。佛于晉。宋魏隋齊梁之間。其言仁義道德者。不入于楊。則入于墨。不入于墨。則入于老。不入于老。則入于佛。入于彼。必出于此。入者主之。出者奴之。入者附

之出者汗之。噫後之人。其欲聞仁義道德之說。孰從而聽之。

【字義】 ○火于秦 秦の始皇が書籍を焚き棄てたことをいふ。○黄老 黄帝老子の教、即ち道德をいふ。

○楊 楊朱は利己主義を唱へた人。○墨翟 兼愛説(博愛とは違ふ)を主張した。此二人は俱に周代の人。

【釋義】 周室が衰微して、先聖の遺された種種の制度も破壊され、其上、孔子は歿し、尋で秦の時代と見つては、始皇は一切の經書を燒棄して、漢となつては老子の教が流行し、降つて晉、宋、魏、隋、齊、梁の時代となつては、佛教が最も流行したといふ有様で、從來仁義道德を言つて儒教を奉じた輩も、環境の趨勢がこゝろなであるから、孰れも之に眩惑して、楊子に入らなければ墨子に趨り、墨子に入らなければ老子を信じ、將又、老子を信じなければ佛教に歸依するといふ始末で、彼方へ入れば必ず此方が出る。這入つた者はそれを主として仰ぎ、出た者は之を奴隸として卑しめ、這入つた者は異端に付き、出た者は儒教をば汚れた者とする次第である。さて、こんな工合では、後世の人で、仁義道德の說を聞きたいと思つても、誰れについて聽いたら好いであらうか。

老者曰。孔子吾師之弟子也。佛者曰。孔子吾師之弟子也。爲孔子者。習聞其說。樂其誕。而自小也。亦曰。吾師亦嘗師之云爾。不惟舉之於口。而又筆之於書。噫後之人。雖欲聞仁義道德之說。其孰從而求之。甚矣人之好怪。不求其端。不訊其末。惟怪之欲聞。

【字義】 ○老者 佛者 孔子が曾て禮を老子に問はれたことがあり、佛家で孔子を教化儒道菩薩と謂つたといふことを指す。

【釋義】 老子の徒は「孔子は自分の師の弟子である」といひ、佛家でも「孔子は自分の師の弟子である」と主張して居る。それを孔子の徒は、其說を聞き慣れ、其妄誕を喜んで、自ら卑しめ自ら小さくして、自分から矢張、「自分の師も從前は老子を師とし釋迦を師としたことだ」などといつて、之を口へ出していふばかりでなく、其上又、書物に迄書つたりする者もあるといふ次第である。こんな譯だから、後世の人が、仁義道德の說を聞かうと思つても、誰れに從つて聞かれやう。如何にも甚しいことである、一般人が奇奇怪怪の事を好むことは、其本を糺さず、其末を考へず、一概に唯、奇怪なこと許りを聞かうとして居るのは、洵に痛歎の至りに堪へない次第だ。

古之爲民者四。今之爲民者六。古之教者處其一。今之教者處其三。農之家一。而食粟之家六。工之家一。而用器之家六。賈之家一。而資焉之家六。奈之何民不窮且盜也。

【字義】 ○粟 米のこと。「あは」ではない。

【釋義】 古代の人民は四種、即ち士、農、工、商であつたが、現代では六種、即ち士、農、工、商に老、婦を加へて六となり、古代の教は聖人の教一つであつたが、現代では儒老佛の三となつて來た。故に現今では農家が一人で米を食ふ家は六となり、工藝家は一だが、器物を使用する家は六、商人の家も一だが、商品を買

買する家は六となつて来た。斯様に四民が六民となつて、(不生産的人が多くなつた)需用許りが多く供給は不足して居る。是ではどうして人民が貧窮したり、又は盜賊とならないものがあらうか。

古之時、人之害多矣。有聖人者立。然後教之以相生相養之道。爲之君、爲之師、驅其蟲蛇禽獸而處其中。土寒然後爲之衣。飢然後爲之食。木處而顛。土處而病也。然後爲之宮室。爲之工。以瞻其器用。爲之賈。以通其有無。爲之醫藥。以濟其天死。爲之葬埋祭祀。以長其恩愛。爲之禮。以次其先後。爲之樂。以宣其湮鬱。爲之政。以率其怠勸。爲之刑。以鋤其強梗。相欺也。爲之符璽斗斛權衡。以信之相奪也。爲之城郭甲兵。以守之。害至而爲之備。患生而爲之防。

【字義】 ○湮鬱 氣のむすばれること。○勸 倦に同じい。うむこと。○符璽 印形。○斗斛 枬。○權衡 はかり。

【釋義】 古代では人間に害を興へる者は非常に多かつたが、聖人といふ者が奮ひ立つて、人類に生産扶養の道を教へられ、或は君ともなり、或は師ともなつて、害蟲毒蛇禽獸等を驅除して、國の中央に住居させ、寒いからといつて衣服を工夫し、飢えるからといつて食物を供給し、木の枝に棲んでは顛覆し、土窟に棲息して病氣となつたりするのを見て、そこで宮室を爲つてそれに住居させ、工業を起して器物に不足のないやうにし、商賣の道を開いて有無を通じさせ、醫藥を設けて若死するのを助け、葬式又は祭祀をさせて恩愛の情

を繼續するやうにし、禮義で長幼先後の順序を定め、音樂で胸中のむすばれを發散させ、政治では怠惰の者をひきしめ、法律では「てこはい」者を鋤き取り、欺き合ふから印形、枬、「はかり」などを製作して信實にさせ、争奪があるから、城郭又は甲兵を設けて之を守らせ、其他害が來るとその防備を爲し、患が生ずるとその防衛をさせられたから、安穩に人類は生活することが出来る様になつたのだ。

今其言曰。聖人。不死。大盜。不止。剖斗。折衡。而民不爭。嗚呼。其亦不思而已矣。如古之無聖人。人之類。滅久矣。何也。無羽毛鱗介。以居寒熱也。無爪牙。以爭食也。是故。君者。出令者也。臣者。行君之令。而致之民者也。民者。出粟米麻絲。作器皿通貨財。以事其上者也。君不出令。則失其所。以爲君。臣不行君之令。而致之民。則失其所以爲臣。民不出粟米麻絲。作器皿通貨財。以事其上。則誅。

【字義】 ○聖人 不死云云 老子の語。

【釋義】 斯様に古代の聖人が我我人類に對して恩惠を施されたことは、非常なものであるのに、彼の老子の言を見ると「聖人などがあるから、大盜は絶えないのだ。枬を破り衡を折つてしまつたら、そこで人民の争はなくなる」といつて居る。さてさて考へないのも甚しいではないか。倘しも古に聖人がなかつたら、人類はとくの昔に滅絶して居るに相違ない。何故といふに、人間は鳥獸の様に、羽毛又は鱗介(貝から)などがあ

つて、寒暑を凌ぐことは出来ず、爪又は牙があつて、食物を争奪することも出来ないのたもの。それであるから、君主は命令を出し、臣下は君主の命令を奉じて人民に實行させ、人民は粟粟麻絲を製産し、器皿を作製し、貨財を通じて上に事へるもので、君が命令を出さなければ、君たる資格はなく、臣が君の命令を奉じて人民に實行させなければ、臣たる資格がなく、民が粟米絲麻を製産し、器皿を作製し、貨財を通じて上に事へなければ誅罰されるのである。

今其法曰。必棄而君臣去。而父子禁。而相生相養之道。以求其所謂清淨寂滅者。嗚呼其亦幸而出於三代之後。而不見黜於禹湯文武周公孔子也。其亦不幸而不出於三代之前。不見正於禹湯文武周公孔子也。帝之與王。其號各殊。其所以爲聖一也。夏葛而冬裘。渴飲而飢食。其事雖殊。其所以爲智一也。今其言曰。曷不爲太古之無事。是亦責冬之裘者曰。曷不爲葛之易也。責飢之食者曰。曷不爲飲之易也。

【字義】 ○而 汝に同じ。○清淨寂滅 清淨無爲の教と寂滅爲樂の教と、即ち老子や佛法の道。○三代 夏殷周。○夏葛而冬裘 葛は「くす」で織つたもの、裘は「かは」ころも。

【釋義】 然るに老子又は佛教で説く所を見ると、「君臣の關係を棄て、父子の間柄を絶つてしまへ。其上お互に生養する方法をやめて、清淨寂滅を求めればならぬ」といつて居る。さて、此輩は幸福にも夏殷周三代

の後に生れ来て、禹湯文武周公孔子の大聖人達に排斥されなかつたのは、何といふ幸福であつたらう。また不幸にも夏殷周三代の以前に生れ出て、禹湯文武周公孔子に缺點を正されなかつたのは、何といふ不幸であつたらう。一體、帝と王は、稱號こそ違つて居ても、聖人たるは同一である。又、夏は葛衣を冬に皮衣を着用し、口が渴すると水を飲み、腹がへると物を食ふが、事柄は違つても、智慧といふことは同一である。然るに老子佛教等の言では、「聖人賢人が出て来て、色色うるさい法則などを設けたから、反つて面倒臭い事になるのだ。それより太古の蒙昧時代に立返つて、一切を自然に任せなさい」などといふが、此論法は、冬の寒い時に皮衣を着る者を咎めて、何故葛衣を着る簡単な方法を執らなかつたかといひ、腹のへつた者を責めて、何故水を飲む簡単な方法を執らなかつたかといふと同一である。こんな理窟があるものではない。

傳曰。古之欲明明德於天下者。先治其國。欲治其國者。先齊其家。欲齊其家者。先修其身。欲修其身者。先正其心。欲正其心者。先誠其意。然則古之所謂正心誠意者。將以有爲也。今也欲治其心。而外天下國家。滅其天常。子焉而不父其父。臣焉而不君其君。民焉而不事其事。

【字義】 ○傳 賢人の著した書のこと。此處は「大學」の書をさす。○明德 道の心に得た者を徳といふ、明といへば一點の汚れもなく、如何にも光輝ある徳。○天常 仁義禮智信の五常をいふ。

【釋義】 大學に「古の帝王が光輝ある徳を天下に昭明しやうとするには、最初先づ其國を治めなければならない

其國を治めやうとするには、先づ其家を治め齊へねばならない。其家を治め齊へやうとするには、先づ其身を修めねばない。其身を修めやうとするには、先づ其心を正しくせねばならない。其心を正しくするには、先づ心の發動する意を誠にせねばならぬ」とある。是で見ると、古の心を正しくし意を誠にするは、天下を治める基礎となつたものである。然るに現今では心を治めやうとして、肝腎要の天下國家を度外にし、仁義禮智等人間の五常をなくし、子でありながら父を父とせず、臣でありながら君を君とせず、民でありながら自己の仕事を爲さないとは、邪道の人を惑はすも亦甚しいと謂はねばならない。洵に痛歎の至りに堪へない次第だ。

孔子之作春秋也。諸侯用夷禮則夷之。夷而進於中國則中國之。經曰夷狄之有君不如諸夏之亡。詩曰戎狄是膺。荆舒是懲。今也舉夷狄之法而加之先王之教之上。幾何其不胥而爲夷也。

【字義】 ○經 論語八佾の篇を指す。○詩 詩經曾頌閔宮の篇。○荆舒 二つの夷狄の國名。

【釋義】 孔子が春秋を作られた時、諸侯であつて倘し夷狄の禮を用いた者があると、春秋に夷狄として之を記載し、夷狄でも中國の禮を用いた者があると、之を中國として待遇された。論語にも「夷狄は蒙昧野蠻の國であるから、縱令ひ君主があつても、些しも統制節制がない。之に反して中國では、衰弱して君主がない様であるが、それでも夷狄に比較して優つて居る」と。又、詩經にも「戎狄は之を討ち荆や舒は懲らす」とあ

る。斯様に戎狄は中囂から擯斥されて居るのに、現今では其夷狄の野蠻の法を尊敬して、それを古聖賢の教の上に加へるといふのでは、どうして一同が連立つて夷狄とならないで置かうか。

夫所謂先王之教者何也。博愛之謂仁。行而宜之之謂義。由是而之焉之謂道。足乎己無待於外之謂德。其文詩書易春秋。其法禮樂刑政。其民士農工賈。其位君臣父子師友賓主昆弟夫婦。其服麻絲。其居宮室。其食粟米蔬果魚肉。其爲道易明。其爲教易行也。

【釋義】 それならば所謂先王之教とは、一體どんなものをいふのであらうか。外ではない。博く愛するものが仁。行つて宜しきにかなふが義。この仁と義とに由つて世に處するが道、仁義を備へて、別に外部に求める必要がないのが徳。之を文字に書き顯はした者は、詩經、書經、易經、春秋。其法則は、禮義、音樂、刑罰、政治。其人民は士、農、工、商。其位置は、君臣、父子、師友、賓主、兄弟、夫婦、其衣服は、麻や絲。其居宅は、宮室。其食物は、粟米、野菜、果物、魚類、肉類などで、其道は明瞭であり、其教は行ひ易きものである。決して特殊のやり方をする異様な教ではないのである。

是故以之爲己。則順而祥。以之爲人。則愛而公。以之爲心。則和而平。以之爲天下國家。無所處而不當。是故生則得其情。死則盡其常。郊焉而天神假廟焉。而人鬼享。

【字義】 ○祥 吉祥。○郊 郊祭といつて一種の天を祀る祭名。○廟 祖宗の神靈を祀る所。

【釋義】 此通り古聖賢の教は、洵に平易にして實行し易い者で、之を以て自身を修めると、順應にして吉祥、之を以て人を治めると、慈愛で公正、之を以て心を治めると、溫和で公平、之を以て天下國家を治めると、處置することが何事も至當でないものはないのである。こゝにいふ譯であるから、生きては君臣父子夫婦兄弟が相互に情愛がつくされ、萬一死亡の曉にも、葬送祭祀等の常禮がつくされる。それ許りでなく、郊して天を祭ると、天の神も來り格り、宗廟で祖先を祀ると、祖先の神も之を享けられるのだ。

曰斯道也何道也曰斯吾之所謂道也非向所謂老與佛之道也堯以是傳之舜舜以是傳之禹禹以是傳之湯湯以是傳之文武周公文武周公傳之孔子孔子傳之孟軻軻之死不得其傳焉苟與揚也擇焉而不精語焉而不詳由周公而上上而爲君故其事行由周公而下下而爲臣故其說長

【字義】 ○苟與揚 苟は苟況(戰國)、揚は揚雄(漢人)

【釋義】 こんな立派な道とは、どんな道であるか、それは自分が謂つて居る道で、前にいつた老子の清淨と佛教の寂滅の道ではないのだ。この立派な道の系統は、最初堯が舜に、舜が禹に、禹が湯に、湯が文王武王周公に、文王武王周公が孔子に、孔子が孟子に傳へたが、孟子が死んでから、斯道の正統は絶えた。此後、戰國時代に荀子、漢の時に揚雄の二人があつて、道理を擇んだけれども、研究が精確でなく、(學說の中に不純の分子が雜つてゐる)説明しても詳細でなかつたから、(説明が粗略なこと)道統の繼承者とはなれなかつた。

た。(荀子は性惡説、揚子は性は喜惡混合説を唱導した)こんな譯で周公以上は、いづれも上の位に居て君主であつたから、する事が皆天下に行はれたが、周公以下はどれも下の位に居て人臣であつたから、餘儀なく之を文章に書いたりして、言ふ所は自然長くなつた。

然則如何之而可也曰不塞不流不止不行人其人火其書廬其居明先王之道以道之鰥寡孤獨廢疾者有養也其亦庶乎其可也

【字義】 ○鰥 老いて妻のないもの、コヤもめ。○寡 寡婦、即ち老いて夫のないもの。○孤獨 幼にして父のないものを孤といひ、老いて子のないものを獨といふ。○廢疾 不具者。

【釋義】 それならどうしたら結局好いだらうか。それは外ではない。老佛の教を塞ぎとめなくては儒教は流せず、老佛を禁じなければ儒教は行はれないから、先づ其人人を還俗させ、其書籍を燒棄て、其寺などを普通人の住宅に改め、そして古聖王の道を明に説いて之を導き、鰥寡、孤獨、廢疾の者などが、養育されて不自由のない様になつたら、始て此聖人の道も盛大となつて、大に流行するであらう。

【參考】 宋の石守道が此篇を評して「孔子の易、春秋は、聖人より以來未だあらず、韓吏部(文公)の原道等の篇は、諸子より以來未だあらず」といつて居る。又、林次崖は「此篇、仁義道德の説を推明し、帝王、生民を左右するの法を歴叙し、之を古聖賢相傳の統に終ふ。其の佛老を闢くや、孟子の楊墨を距ぐと功を同じくす。其言は、中庸の首章、孟子の卒章に模倣す。乃ち世に垂れ教を立つるの文なり。庶幾くは四子に續が

ん。特に文を以てのみ論ずるにあらす」といへり。議論の堂堂、立言の正大な處に著目して看るが好い。文公の本領の一部分を窺ひ知ることが出来るであらう。

與孟簡尙書書

韓昌黎

孟簡字は幾道、佛教を信じて居たが、元和十四年に、公は時の天子が佛教信仰の餘、鳳翔の法門寺に佛骨を藏するを聞いて、詔して之を宮中に昇き入れさせて之を觀、又、諸方の寺に遞に迎へて供養させたのを論じて潮州に貶謫され、其地で僧の大顛といふ者と交際して居たを、人は公も佛教を信仰して居ると言ひ傳へ、孟簡はそれを聞いて手紙を贈つた。それを公は此文を書いて返事としたものである。

愈白行官自南廻過吉州得吾兄二十四日手書數番忻悚兼至未審入秋來眠食何似伏惟萬福

【字義】 ○行官 四方に行役する官。 ○數番 番は枚なり。數枚といふこと。 ○忻悚 よろこびおそる。 ○何似 如何に同じ。

【釋義】 愈が申上げます。行官が南方より回り來て貴君の居られる吉州を通過したからといつて、二十四日附のお手紙を受領しました。數枚もあるのです。喜んだり恐れたり、様様でありました。まだ承知致しません。秋から以來、御起居は如何でありませうか、推察するに御萬福だらうと存じます。

來示云有人傳愈近少信奉釋氏者此傳之者妄也潮州時有一老僧號大顛頗聰明識道理遠地無可與語者故自山召至州郭留十數日實能外形骸以理自勝不爲事物侵亂與之語雖不盡解要自胸中無滯礙自以爲難得因來往及祭神至海上遂造其廬及來袁州留衣服爲別乃人之情非崇信其法求福田利益也

【字義】 ○來示 御手紙の趣によればといふ程のこと。 ○釋氏 釋迦の教、即ち佛教。 ○外形骸 外に形骸からださないものにする。即ち脱俗すること。 ○以理自勝 道理で萬事を處理する。 ○滯礙 とどこほり。 ○福田 功德といふこと。佛教の語。

【釋義】 お手紙の趣によれば、人が愈は近來少少佛教を信仰して居ると言傳へる者があるが、事實であるかどうかとの仰であつたが、これは言傳た者の虚妄で、無根のことでありませぬ。實は潮州に居た時、一人の老僧で大顛といふ者があつて、性質が非常に聰明で、且つ道理を識つて居た。潮州の様な邊鄙では誰れも話相手にする者がなかつたから、山から潮州の城下に來させ、引留めて居たことが十數日でありました。如何にも脱俗して居て、すべて道理で萬事を處理し、種種の事物に其心を侵されたり亂されたりしない人物でありました。此者に話して見たが、道理を悉皆了解する途には往かないが、詰り、胸中に一點のわだかまりのない人であつたから、自分は容易に得られない人物と認めてそこで往來しました。神を祭る爲に海邊へ往つた時、とうとう其廬へも立寄つた次第。間もなく袁州の刺史に轉任する様になつた時、衣服を贈つて留別と

したが、是は人情であつて、決して佛法を信仰して功德利益を求めやうなどの野心から出た譯ではありませ

孔子云。丘之禱久矣。凡君子行己立身。自有法度。聖賢事業著在方冊。可效可師。仰不愧天。俯不愧人。內不慊心。積善積惡。殃慶各自以其類至。何有去聖人之道。捨先王之法。而從夷狄之教。以求福利也。詩不云乎。豈弟君子。求福不回。傳又曰。不爲威惕。不爲利疚。假如釋氏能與人爲禍。福非守道君子之所懼也。況萬萬無此理。

【字義】 ○丘之禱 論語述而篇中の語。○詩 詩經小雅旱麓の篇。○豈弟 樂しみやすらかなること。○積善云々 易經の文言篇。○傳 左傳哀公十六年中の語。

【釋義】 孔子が或る時病氣に罹られた。それを門人の子路が心配して神に禱らうと申出た。孔子は「自分は平生から天命を敬ひ畏れて、罪を天地の神に獲ないやうにと努めて居る。是が即ち禱るといふ者である。此外別に禱る必要を認めない」と答へられたことがある。すべて君子が行を正しく身を立てるには、自然一定の法度がある。聖賢の事業は詳しく書籍に記載されてあつて、手本とし師ともされるのだから、之を模範として往けば好いのである。こうすれば上は天に愧ぢず下は人に愧ぢず、内には心に愧ぢないことになる。積善には幸福、積悪には禍殃と、各其類によつて來るのは當然のことである。それをどうして聖人の道に去り、先王の法を捨て、夷狄の教に従つて功德利益を求めたりする筈がありませうか。詩經にも「樂しく安

らかな君子は、幸福を求めるに決して邪な道を以てしない」とあり、左傳にも「威力に懼れず、利慾の爲に疚しい行爲をしてはならぬ」とあります。縱令釋迦が能く人に禍福を與へるとしても、道を守る君子は些も懼れる所はないのである。まして萬萬こゝろいふ道理はない筈であるものを。

且彼佛者果何人哉。其行事類君子耶。小人耶。若君子也。必不妄加禍於守道之人。如小人也。其身已死。其鬼不靈。天地神祇昭布森列。非可誣也。又肯令其鬼行胸臆。作威福於其間哉。進退無所據。而信奉之。亦且惑矣。

【字義】 ○鬼 死んだ人のこと。○胸臆 意想。

【釋義】 其上、釋迦は果して如何なる人物であらうか、其の行ふ所の事は、君子に類するだらうか、又は小人に類するだらうか、倘しも君子に類するなら、必ず無暗に禍を道を守つて居る正しい人に加へないのが當然であり、倘しも又小人であるなら、死んでから久しい間であつて、精魂は神靈でないのが當然である。天地の神は明かに照臨して四方に列んで居るものを、どうして正しい人を嫌つて、神明を欺くことが出來やうか。又どうして天地の神が釋迦の精魂に向つて勝手に自分の意思通り、威力禍福を加へさせたりさせるものか。進んで君子とするも退いて小人とするも、どの方面から觀ても些しも根據のない事であるのに、それを信仰するなどは、間違つて居るものも甚しいといはねばなりません。

且愈不助釋氏而排之者。其亦有說。孟子云。今天下不之楊。則之墨。楊墨交亂。而聖賢之道

不明。聖賢之道不明。則三綱淪而九法敦。禮樂崩而夷狄橫。幾何其不爲禽獸也。

【字義】 ○楊墨 楊氏は利己主義、墨氏は兼愛主義を唱へた。○三綱 君臣、父子、夫婦をいふ。○九法 書經洪範篇に見えて居る、國家を治める九つ法則をいふ。

【釋義】 且、自分が釋迦の味方をしないで、反つて之を排斥するには深い理由があります。孟子がいつた言葉に「現今天下一般の人人は、楊氏の利己主義を奉じなければ、一方の墨氏の兼愛主義を信じないものはなく、洵に歎息の至りである」と。如何にも此通りであつて、楊氏墨氏が互に邪説を主張して天下の人心を亂すと、聖賢の道は之が爲に明ならず、聖賢の道が明でないと、君臣父子夫婦の人間の大小なも沈み果て、國家を治める九つの大法も破壊し、禮儀や音楽もくづれて夷狄共が横行する様になる。こうなると、どうして人は一般に禽獸とならない者があらうか、その殆どは禽獸となるであらう。

故曰能言距楊墨者聖人之徒也。揚子雲曰古者楊墨塞路孟子辭而闕之廓如也。夫楊墨行正道廢且將數百年。以至於秦卒滅先王之法燒除經書坑殺學士天下遂大亂及秦滅漢興且百年尙未知修明先王之道其後始除挾書之律稍求亡書招學士經雖少得尙皆殘缺十亡二三故學士多老死新者不見全經不能盡知先王之事各以所見爲守分離乖隔不令不公二帝三王羣聖人之道於是大壞後之學者無所尋逐以至子今泯泯也其禍出於楊墨

肆行而莫之禁故也。

【字義】 ○故曰——徒也。孟子滕文公篇の文。○古者——廓如也。揚子法言の吾子篇の文。○廓如——からりと開くさま。○坑殺——穴に埋め殺す。○挾書之律——書籍を所藏する者は、三族（父、母、妻の一族）を誅殺する法律。○乖隔——そむきへだたる。○泯泯——ほろび失せかかつて居るさま。○肆行——ほしのままに、ふるまふ。

【釋義】 こんな譯であるから、孟子が「誰でも言論で楊墨を距き斥ける者は、聖人の仲間である」といはれ、漢の揚雄は「古は楊墨二氏の説が行はれて、聖賢の道を塞いで居たのを、孟子は辯論で之を切り開いたからそこで聖道は又復かりりと開けるやうになつた」といつて居ります。夫れ楊墨の説が行はれて、聖賢の正道が廢して以來、數百年を経過して秦の時代となつては、とうとう先王の法を滅ぼしてしまひ、經書を燒棄して學者を埋殺したりして、亂暴の極點を盡した結果、天下は遂に大亂となつた。秦が滅び漢が興つてから、彼是れ百年ほどでしたが、また先王の道を終め明かにすることを知らなかつたが、其後、二代の惠帝の時となりて、始て書籍を藏する者は三族を誅する法律を除き去り、ぼつ／＼と散佚した書物を求め、生殘つた學者を召集めた。其時經書は少しく集つたが、皆缺けたりなくなつたりして居て、十中の二三は缺乏して居り、故の學者は大概は老病で死に果て、新視の學者は完全の經書を見られず、爲に先王の事を悉皆知り盡すことが出來ず、銘銘は自分の見た範圍で堅く執り守り、各人各様説く所が分離し、そむきへだたり、一致せず公平でなく、堯舜二帝、禹湯文武三王を初めとし、周公孔子等多數の聖人の道も、ここで非常に破壊して、後

世の學者は尋ね逐つて學ぶべき方法もなく、それが延いて現代にまで及んで、道は全くほろび失せかかつて居る有様であります。つまりこんな禍の起つた原因といふ者は、楊墨二氏が勝手に自説をふりまはして、それを誰も攻撃反駁せず、横行する儘に任せて爲てあります。

孟子雖聖賢不得位。空言無施。雖何補。然賴其言而今之學者尙知宗孔氏崇仁義。貴王賤霸而已。其大經大法皆亡滅而不救。壞爛而不收。所謂存十一於千百。安在其能廓如也。然向無孟子。則皆服左衽而言侏離矣。故愈嘗推尊孟子以爲功不在禹下者爲此也。

【字義】 ○空言 言葉だけで實行出来ないこと。○大經 人の常にふむべき大いなる道。○大法 だいじなおきて。○左衽 野蠻人の衣服の著かた。ひだり前のこと。○侏離 野蠻人などの言語の不明なこと。

【釋義】 孟子は聖人にも近い賢人であつたが、惜しいことには位地がなかつたから、言ふ所は之を實行する譯に往かず、如何に其言が適切でも、些しも世の貢獻とならなかつたが、併し孟子の言によつて、現今の學者は、まだ孔氏を本家本元とし、仁義を崇とび、王者をあがめ覇者を賤しむことは知つたが、大いなる道、大切なるおきてなどは、皆亡びうせて救はれず、これは爛れて拾ひあつめることが出來ず、十を千の中から、一を百の中から残したに過ぎず、(百分の一を残したことをいふ)どうして揚雄が言つた様に「かりしとなつたりするものでせうか、併し此前に孟子が出て異端邪説を攻撃しなかつたら、人は皆野蠻となり、

衣服は左り前で言語は不分明で聞き取り難い者となつてしまつたてでありませう。故に自分は嘗て孟子を推し尊んで、其功績は、禹が洪水を始末して人民を救つたと比較して、優つても劣ることはないとな断定したのも全くこれが爲であります。

漢氏以來羣儒區區脩補百孔千瘡隨亂隨失其危如一髮引千鈞。絲絲延延寢以微滅。於是時也。而唱釋老於其間。鼓天下之衆而從之。嗚呼其亦不仁甚矣。

【字義】 ○區區 くよくよすること。○千鈞 一鈞は重さ三十斤。○絲絲延延 つらなり、のびること。○寢 漸の義。だんくといふこと。○鼓 げますこと。

【釋義】 漢時代からこのかた、多数の儒者は、くよくよと此の道を補ひ繕らつたが、孔だの瘡だのが千も百もあつて、繕へば繕らう程亂れたり失つたりして、危いこと一筋の髪の毛で、千鈞も重量のある物を引く様な次第で、續いては居るもの、だんだん微かに滅びかかつて來て居るのである。こんな危急の場合に、佛老の教義を唱へて、天下一般の人をばげまして之を信仰させるなどは、不仁も甚しいといはればなりません。

釋老之害過於楊墨。韓愈之賢不及孟子。孟子不能救之於未亡之前。而韓愈乃欲全之於已壞之後。嗚呼其亦不量其力且見其身之危莫之救以死也。雖然使其道由愈而粗傳。雖滅死萬萬無恨。天地鬼神臨之在上。質之在傍。又安得因一摧折自毀其道以從於邪也。

【字義】 ○摧折さいせつ くだけをれる。

【釋義】 佛老の弊害は楊墨以上であり、自分の才智は到底孟子に及びもつかないのであります。その孟子すら道を亡びない以前に救うことが出来なかつたのに、それを自分は道のすてに破壊した後完全にしやうとするなどは、さてきて自分の力量を考へないやり方であつて、自分は危険の位地に踏込んで、此道を救護しない以前に、或は死亡するかも知れぬのであります。併し萬分の一にも此道が自分に由つて聊かなりとも後世に傳はることが出来るなら、縱令死んでも毛頭遺憾はありません。天地の神も照鑑して上に在らせられ善惡邪正を賞さんとすれば、見はつて左右に居られるのであるものを、どうして僅か一度の蹉躓つちつせき（地方に貶謫されたことを指す）位で、自身から修めて居る道を毀損して、わざわざ邪道に踏込むやうなことが出来ませうか。

籍しやく 混こん 輩ばい 雖すい 屢るゐ 指教しやくかう 不ふ 知ち 果くわ 能のう 不ふ 叛はん 去きょ 否ひ 辱じやく 吾わ 兄けい 眷けん 厚こう 而に 不ふ 獲かく 承じやう 命めい 惟い 增さう 慙ぜん 懼くわ 死し 罪ざい 死し 罪ざい 愈い 再さい 拜はい。

【字義】 ○籍混しやくこん 公の門人張籍、皇甫混をいふ。○眷厚けんこう 愛顧のこと。

【釋義】 門人の張籍・皇甫混などには、度度指導して居りますが、果して吾が道に叛いて、邪道に赴かないかどうか分りません。貴君の御愛顧を辱く致したことは感謝に堪へませんが、併し仰に従がつて佛教の信者となることは、到底お受けが出来ません。無禮の段、恐入る外はありません。其罪は死刑にも當りませう。愈再拜。

欠

欠

以上の人物なり」といつ、居る。如何にも其通りである。滿身忠義の氣が溢れて此文と爲つたもので、自分の生命などは、どうならうとそんなことは些しも眼中になく、唯、國家の成行に就いて深憂慨歎し、筆底涙を帯びて居る。或る書に、「金人は澹庵が是の封事を上つたと聞き、之を求めたいものと思つたが、仲仲手に這入らなかつたから、そこで千金の懸賞で募集して、やつと手に這入つた。それを讀んで歎息していふに『中國にも、まだまだ人物が居る。どうして輕蔑が出来るものか』と。遂に軍隊を數百里退却させた」といふことが出て居る。此話は確實に信用は出来ないが、或は事實であるかも知れない。

潮州韓文公廟碑

蘇 東 坡

韓文公は佛骨の事に就いて、時の皇帝憲宗を諫めて其逆鱗に觸れ、潮州(廣東省)に左遷されたが、間もなく袁州の刺史に移された。後、潮人は公の徳を慕つて廟を造つて之を祀つて居たが、宋の時代に改築した。其時東坡が、此碑文を撰んだのである。

匹夫而爲百世師。一言而爲天下法。是皆有以參天地之化。關盛衰之運。其生也。有自來。其逝也。有所爲。故申呂自嶽降。傳說爲列星。古今所傳。不可誣也。

【字義】 ○參天地之化。天地造化の事業を助ける。○申呂自嶽降。姜氏は虞夏の際に四岳(當時の霸者)の職に居て大功があつた。周の時に其子孫の申伯と甫侯とが宣王を輔けて中興の名臣といはれた人で、其生

れるときは山嶽の靈が之を生みつけた。詩經で大雅崧高篇に「維嶽降神。生甫及申」とあるのが是である。○傳説爲三列星。傳説は殷の高宗に相となつて大功のあつた人。死んでから天に昇つて星となつたといふことが、莊子の太宗師篇に見えて居る。

【釋義】 單に一個の匹夫でありながら、後世百代までの人の師となり、僅か一言を述べても、天下一般の法則となるなどといふ大人物であるならば、其人は天地造化の大事業を助け、國家盛衰の氣運に關係することは勿論である。それ故に生れて來るのも偶然ではなく（普通の人と違つた神秘的なことがある）。死んでも徒に消滅してしまふものではない。必ず何か爲す所があるものである。（死後にも何か爲す所の働がある）こんな譯だから、昔、申伯呂侯は山嶽の神が之を降誕させ、（上の有自来に應ず）傳説は死んでから星となつた（上の有レ所爲に應ず）といふことがあるが、古今の傳説は、決して誣言でないことが肯られる。

孟子曰。我善養吾浩然之氣。是氣也。寓於尋常之中。而塞乎天地之間。卒然遇之。王公失其貴。晉楚失其富。良平失其智。賁育失其勇。儀秦失其辯。是孰使之然哉。其必存不依形而立。不恃力而行。不恃生而存。不隨死而亡者矣。故在天爲星辰。在地爲河嶽。幽則爲鬼神。而明則復爲人。此理之常。無足怪者。

【字義】 浩然之氣 盛大流行の貌を浩然といふ。其氣といふものは、天地間に充滿して、始もなく終もなく生もなければ死もなく、殆ど言語で説明することの出來ない程の大分量を具して居る。人人が之を養成する

には、何處迄も曲つた行爲をせず、如何にも道理が正しく、不義の事をしないと、自然に擴大してくる。若しも一點の私心が滲入すると、切角膨脹しかかつて居る者でも、忽ち縮少するといふ程のもの。即ち道義的勇氣をいふ。○尋常 八尺を尋、一丈六尺を常といふ。○晉楚は晉楚二國は、當時の諸侯中の富強の國であつた。○良平 張良と陳平と。俱に前漢の高祖に仕へた人。○賁育 孟賁と夏育との二人。いづれも非常の勇

者。○儀秦 張儀と蘇秦と。

【釋義】 孟子がいつた言葉に「自分は平生から浩然の氣を養つて居る」と。是の浩然の氣といふ者は、僅か一丈前後の些細の人身に宿つては居るが、其分量といへば、實に天地間にも充滿して、廣大無邊、何といつて好いかわらない程である。故に倘し突然此氣に出遭つた場合には、王公の權威ある者も尊貴を失ひ、晉楚の大國も富貴を失ひ、張良陳平の策士も其智を失ひ、孟賁賁育の剛者も其勇を失ひ、蘇秦張儀の辯者も辯舌を失つてしまふのである。是はどうしてこうなるかといふに、是の浩然の氣といふものは、形に依つて立つて居るものでなく、足の力を恃んで行くものでもなく、生存して居る間だけ存在するものでなく、死亡したからといつて消滅するものでもない。（所謂無始無終、無邊無際である）こんな本體を具へて居るから、天では日月星辰となり、地では黃河五嶽となり、幽冥界では鬼神となり、現世では人間となり、種種様様に形をへて居るが、實は皆浩然の氣の凝結したものに外ならない。此は理の當然で、別に不思議とするに足らない

自東漢以來。道喪文弊。異端並起。歷唐貞觀。開元之盛。輔以房杜。姚宋而不能救。獨韓文公起

布衣談笑而麾之。天下靡然從公。復歸於正。蓋三百年於此矣。文起八代之衰。而道濟天下之溺。忠犯人主之怒。而勇奪三軍之帥。此豈非參天地、關盛衰、浩然而獨存者乎。

【字義】 ○東漢 後漢のこと。後漢は東の洛陽に都したから、前漢が西の長安に都したに對して、後漢を東漢といひ、前漢を西漢といふ。○房杜姚宋 房玄齡、杜如晦、姚崇、宋璟をいふ。○蓋三百年 數字の上に「ある蓋は」大數を擧ぐる辭。今の約といふに同じ。○八代 東漢、魏、晉、宋、齊、梁、陳、隋。○勇奪三軍之帥 鎮州で長官の田弘正を殺して王廷湊を立てた時、公は命を奉して宣諭した。

【釋義】 後漢から以來は、老子釋迦の教が流行して、聖賢の道は段段衰微し、文章も疲弊して修辭のみを主とする無氣力のものとなり、異端邪説が一時に起つて來た。其後、唐の太宗の貞觀、玄宗の開元年代の盛世となつて、太宗の宰相には房玄齡、杜如晦があり、玄宗には姚崇、宋璟などが居て道を行つたが、それでも此の疲弊衰微を救濟されなかつたのを、唯獨、韓文公は匹夫より崛起し、談笑の間に異端を排斥した。其爲め天下は草が風に靡く様に公に從つて、また正教に立返つた。それから以來、まづざつと三百年程も經過して居るが、文章は漢魏八代の衰運を恢復し、道は天下の人人が異端に耽溺して居たのを救濟し、忠に於ては憲宗帝の激怒を犯して佛骨の事を痛諫し、勇ては三軍の將帥なる王廷湊を叱つて其膽玉を奪つたなどは、なんと天地の化育に參與し、(天地は萬物を生育するだけだが、聖人は教育を施して天地の化育に參加する)國家の盛衰に關係して居て、それが皆浩然の氣から發して、公獨之を存して居たものであるまいか。

蓋嘗論天人之辨。以謂人無所不至。惟天不容僞。智可以欺王公。不可以欺豚魚。力可以得天下。不可以得匹夫匹婦之心。故公之精誠能開衡嶽之雲。而不能回憲宗之惑。能馴鱷魚之暴。而不能弭皇甫縛李逢吉之謗。能信於南海之民。廟食百世。而不能使其身一日安於朝廷之上。蓋公之所能者天也。其所不能者人也。

【字義】 ○豚魚 易の中孚の卦に、「信及豚魚」とあり、誠實の心は豚又は魚の様なものに迄通するといふ意。○開衡嶽之雲 公が衡山に登つて詩を作つた、折しも陰つて居た空が俄に晴れた。○回憲宗之惑 即ち憲宗が佛教を信仰されて居たことをいふ。○馴鱷魚之暴 潮州で鱷魚が害をしたのを、公は文を作つて之を祭つたら、數日の後から、其害がなくなつた。○皇甫縛李逢吉之謗 此の二人は俱に公を憲宗に讒言した。○廟食 廟に祀られること。

【釋義】 蓋し自分は嘗て天と人との區別を論じて、こんなことを思つた「人といふものは、自分の智慧でどんなこともするが、天だけは僞を受付けない。故に智慧は王公貴人を欺けても、豚や魚の様なものに欺けず力では縱令や天下を握られても、匹夫匹婦の心を服させる譯には往かぬ。それは誠がないからである」と。此故に公に於ても、其精誠は衡嶽の雲を開かせたが、憲宗皇帝の感溺を離かへすことも出來ず。鱷魚の暴害を退治しても、皇甫縛・李逢吉の讒言は止められず、又、南海、即ち潮州附近の人民に信用を得て、百世までも神として祀られても、自身は一日でも朝廷に安穩として居られなかつたのである。是等から考へて見ても、

公の能くししは天であつて、能くされなかつたのは人であることが分るではないか。

始潮人未知學。公命進士趙德爲之師。自是潮之士皆篤於文行。延及齊民。至于今。號稱易治。信乎孔子之言。君子學道則愛人。小人學道則易使也。

【字義】 ○文行 文學德行。○齊民 一般の人民。○君子——易使也 論語陽貨篇の語。

【釋義】 最初、公が潮州へ來られなかつた以前は、此土地の人は學問を知らなかつた。それを公は進士の趙德といふ者に命じて、土人の師とさせた。是から潮州の人士は、皆文學德行に篤く、其風は一般の人人にまで及んだ。其結果、今日でも、潮州は治め易い土地であるといふ評判が高い位である。孔子の言に「君子が道を學ぶと人を愛し、小人が道を學ぶと使ひ易くなる」とあるが、如何にも其通りである。

潮人之事公也。飲食必祭。水旱疾疫。凡有求必禱焉。而廟在刺史公堂之後。民以出入爲難。前太守欲請諸朝作新廟。不果。元祐五年。朝散郎王君滌來守是邦。凡所以養士治民者。一以公爲師。民既悅服。則出令曰。願新公廟者聽。民權趨之。卜地於州城之南七里。期年而廟成。

【字義】 ○刺史公堂 知事の役所。○期年 滿一ケ年。

【釋義】 潮人が文公に事へる熱心なことは非常であつて、飲食の時も先づ公を祭つてからやり、其他洪水旱

魃、疾病時疫など迄、凡そ何か願ひことがあると、必ず禱るのである。處が公の廟は知事の役所の後にあつて人民の參詣する者は、出入りに困難を感じて居た。それを前の太守は朝廷に出願して、新規に廟を築造しやうと思つて居たが、其希望を果さなかつた。元祐五年に朝散郎の王滌といふ人が是邦の太守となつたが、すべて士を養ひ民を治める方法は、一切文公を標準としたから、人民も悦服した。そこで命令を出していふに「公の廟の新築しやうと出願する者があつたら、之を許可するぞ」と。之を聞いて人民は大悦で出掛けて來て、新築地を州城の南方七里の處に選定して、滿一ケ年で見事に落成した。

或曰。公去國萬里。而謫于潮。不能一歲而歸。沒而有知。其不眷戀於潮也。審矣。軾曰。不然。公之神在天下者。如水之在地中。無所往而不在也。而潮人獨信之深。思之至。焄蒿悽愴。若或見之。譬如鑿井得泉。而曰水專在是。豈理也哉。

【字義】 ○眷戀 思ひしたふこと。○焄蒿悽愴 神靈の氣が人を襲ふをといふ。焄蒿は一種のかほりがあり氣の蒸し上ること。悽愴はぞつと感ずること。

【釋義】 或人がいふに「文公は本國を去つて一萬里もある此の潮州に貶謫され、それが一年も經過しないうちに更に他處に轉任したのだから、死んだ後でも倘し知覺があるなら、潮州を思ひ慕はないことは請合ひである」と。自分がいふに「公の神靈の天下にあるのは、丁度水が地中に在る様なもので、何處へ往つても存在しないことはない。そして潮人が唯獨信仰すること深く、思慕することが深いから、神靈の氣が人を襲つ

て、目に見える様である。譬へていふと井戸を掘つて水を得るのと同然で、水は唯、此處ばかりに在るといふのは、なんと不條理であるまひや。

元豐元年。詔封昌黎伯。故勝曰昌黎伯韓文公之廟。潮人請書其事于石。因爲作詩以遺之。使歌以祀公。其辭曰。

【字義】 ○勝 立札。

【釋義】 元豐元年に詔を以て公を昌黎の伯に封ぜられた。それだから立札に「昌黎伯韓文公之廟」と書かれた。潮人は公の事蹟を石に書附けて呉れと請求したから、爲に詩を作つて之を與へ、其詩を歌つて公を祀らせた。其詩は

公昔騎龍白雲鄉。手扶雲漢分天章。天孫爲織雲錦裳。飄然乘風來帝旁。下與濁世掃秕糠。西遊咸池略扶桑。草木衣被昭回光。

【字義】 ○公昔騎龍 莊子天地篇に「乘彼白雲遊于帝鄉」とあるに基いたもので、公の前身は神仙であつたといふこと。○手扶——章 詩經の棫樸篇に「俾彼雲漢爲章于天」とあり。雲漢は銀河をいふ。扶は「くじる」又「かきむしる」こと。天章は天の文章。○天孫——裳 天孫は織女即ち「たなばた」。○掃秕糠——秕は皮ばかりで實のない「もみ」、糠は「ぬい」。佛敎道教を指す。○西遊咸池 咸池は淮南子天文訓に「日

出於暘谷浴于咸池拂扶桑」とあり。日の浴する所をいふ。○昭回 詩經雲漢の篇に「俾彼雲漢昭回于天」とあり。光り輝くこと。

【釋義】 文公の前身は天上界の人で龍に騎つて白雲の立籠めて居るあたりを、彼方此方遊んで居られたが、自身天の河をかき分けて、天の文章を身につけて靜かに下界へ降りて來られた。其時織女は公の爲に、七色で夜光の雲錦の衣裳を織りたてて公に贈つた。それを著て（文學上天才を得たことをいふ）ひらりひらりと風に乗つて天帝の旁から天降つたが、さて下界では、世は濁り濁つて異端邪説が流行して居たから、先づ之を排斥した。醜つて公の道徳はと見ると、丁度太陽が暘谷を出て咸池、（日）入る處）扶桑（日の出る處）までも照らすやうに、其光を争つて居り、草木に至るまでも、其光輝を仰がないものはない。

追逐李杜參翺翔汗流籍湜走且僵。滅没倒景不可望。作書詆佛譏君王。要觀南海窺衡湘。歷舜九疑弔英皇。祝融先驅海若藏。約束蛟鰐如驅羊。

【字義】 ○李杜 李白と杜甫と。公より前の玄宗の時の詩人。○籍湜 張籍と皇甫湜との二人、俱に文公の門人。○滅没 光の輝き渡ること。○倒景 景は影と通ず。人が天上に居て、日月が下から反照するから、影がさかさまにうつること。○南海 潮州をいふ。○衡湘 衡山及び湘水。○九疑 舜の墓の在る處。○英皇 堯の二女娥皇・女英のこと。舜の妃。○祝融 南海の神の名。○海若 海神の名。○約束 豫め定めおくこと。

【釋義】又、公は詩に於ては、特別に李白杜甫を推奨して、後から追いかけて一緒に立並んで飛びかけた（詩壇で得意に振舞つて李杜と其技倆を等しくした）が、門弟の張籍や皇甫湜等は、汗を流し、走つて公を追ひかけて見たが、公の文章の超越して居るのに兎ても及ばないで、果ては仆れてしまった。こんな譯で、文才は光り眩いばかりで、とても常人の及びもつかない所は天上の光にまばゆくて望むことが出来ないと同じであつた。公は或る時、上書して佛骨を迎へることを諫めて、君王、即ち憲宗皇帝を咎めた爲め、帝の逆鱗に觸れて南の方潮州に左遷されたが、丁度、途次、衡山湘水の風景を眺め、舜の九嶷山附近を經過し、娥皇女英の靈魂を弔らはうと思つた。（潮州に流された御蔭で、以上の土地に往き、文學上の作品が出來た）。その時に祝融の神は先導し、海若は部下の怪物を引連れて遠方へ遁れ藏れてしまつた。是は外でもない道德の優れた人が經過するからである。さて愈、潮州に到着すると、今迄土人に害を與へた鮫や鱷に文章を作つて退去を命じ、二度と近海に出没しないやうに約束したが、鱷魚は即日退去したのは、宛も弱い羊を驅逐すると同一であつた。

鈞天無人帝悲傷。謳吟下招遣巫陽。犧牲雞卜羞我。觴於餐荔丹與蕉黃。公不少留我淚滂。翩然被髮下大荒。

【字義】○鈞天 天は九つあつて、其中央の天を鈞天といふ。○下招 天から下して招かせる。○巫陽 巫のこと。○犧牲 操は野牛の一種で、そのいけにへ。○鷄卜 雞骨で吉凶を判断する事。○荔丹 荔枝。○

蕉黃 芭蕉の實。○翩然 鳥などのとぶさま。○大荒 大空。

【釋義】天界では人物が居なくなつて、天帝は悲しまれ、歌をうたつて下界へ下し、召還さうとして巫を差向けたから、公はふただひ天界へ昇つてしまつた。そこで潮州の人は思慕の餘り、野牛のいけにへ、雞骨の占卜で、其上酒を差めて神を祭るから、どうぞ神は荔枝や芭蕉の實のこの供物をめしあがつて戴きたい、思へば公は此の潮州へ來られて僅か一年たらずに外へ往つてしまはれたから、我我どもは思慕のあまり、涙はさめざめと流れて止め度がない。どうか神は我我の此の真心を納れて、ひらひらと髪をふりかぶつて大空から下られんことを。

上田樞密書

蘇老泉

田樞密、名は況字は元均、宋の仁宗の至和年中に、樞密副使と爲つた。宋代では樞密と宰相とは、俱に朝政に參預したもので、當時之を二府と謂つた。

天之所以與我者。豈偶然哉。堯不得以與商均。而瞽瞍不得奪諸舜。發於其心。出於其言。見於其事。確乎其不可易也。聖人不得以與人。父不得奪諸其子。於是見天之所與我者。不偶然也。

【字義】○丹朱 堯の子。○商均 舜の子。○瞽瞍 舜の父の名。

【釋義】 天が我に(道德を)與へてくれたのは、どうして偶然(無意味)であらうか、決して偶然ではないのである。(社會を濟ふ大任を與へられてゐるのだ)其證據に、堯は(道德を)其子丹朱に譲ることが出来ず、舜も亦商均に傳へられず、そして瞽瞍も父の威嚴を以て舜から(道德を)奪うことが出来なかつたではないか。天與の道德を享けて居る者は、第一、心から發し、言語に出て、事實に見はれて、それが如何にも確乎として居るから、他から動かしたり易へたりすることは、到底出来ないのである。上に述べた様に、聖人たる堯舜ですら、其子に與へる譯に往かず、父たる瞽瞍ですら、子たる舜から天子の位を奪ひ取られないといふので見ても、天が我に(道德を)與へたは、決して偶然でないことが分る。

夫其所以與我者必有以用我也。我知之不得行。之不以告人。天固用之。我實置之。其名曰棄天。自卑以求幸。其言自小以求用其道。天之所以與我者。何如而我如此也。其名曰褻天。

【字義】 ○褻けあなれあなどること。

【釋義】 天が我に(道德を)與へた理由を考へて見るに、必ず我を使用して社會に貢獻させやうとする爲に外ならないのである。それを我は自覺して居ながら、之を實行することが出来ず、且、又人にも告げ知らさなかつたら、是は天は我を用ゐて呉れて居りながら、自分は其儘にさし置くものであつて、之を名づけて天を棄てた者といふのである。又、自分から卑下して、言論を採用されやうと求め、自分から小さくなつて、道を用ゐられやうと求め、天が我に與へて呉れた所の者は、そんな卑しいものでないのに、我が此通り卑屈の

行爲をするのを、之を名づけて天を褻した者といふのである。

棄天我之罪也。棄天亦我之罪也。不棄不褻。而人不我。用不我用之罪也。其名曰逆天。然則棄天者。其責在我。逆天者。其責在人。在我者。我將盡吾力之所能爲者。以塞夫天之所以與我之意。而求免。夫天下後世之譏在人者。吾何知焉。吾知免。夫一身之責之不暇而暇。爲人憂乎哉。

【釋義】 斯様に天を棄てるのは、我の罪であり、天を褻すも、我の罪である。それを棄てもせず褻しもせず居るのに、人が我を用ゐなかつたら、それは我を用ゐない人の罪である。之を名づけて天に逆ふといふのである。そうすると、天を棄てたり天を褻したりする者は、其責任は我に歸し、天に逆ふ者は、其責任は人に歸するのが當然である。責任が自分に在る者は、我は自分の力の出来るだけ盡して、そして天が我に與へて呉れた本意を全くし、天下後世からの批難攻撃を道れる様にせねばならないが、責任が人に在る者は、自分の關知する所ではない。自分は自分一身の責任を免れる様にするのにも時間が足りない位であるのに、どうして人の爲にこれと心配する餘餘があらうか。

孔子孟軻之不遇。老於道途。而不倦。不慍。不作。不沮。者。夫固知夫道之所在也。衛靈魯哀。齊宣。梁惠之徒。不足相與。以有爲也。我亦知之矣。抑將盡吾心焉耳。吾心之不盡。吾恐天下後世無

以責夫衛靈魯哀齊宣梁惠之徒。而彼亦將有以辭其責也。然則孔子孟軻之目將不瞑於地
下矣。

【字義】 ○不遇 世に用ゐられないこと。○老於道途 四方に奔走ばかりして居る内に、年をとつてしまつた。

【釋義】 孔子孟軻の聖賢となると、世に用ゐられず、四方を奔走して居る内に、年をとつてしまつたが、それでも倦まず煩悶せず、恥かしくも思はず、勇氣も挫けず、何方迄も熱心に説き廻はられたのは、固より道が自身に在るを知つて居たからである。彼の衛の靈公、魯の哀公（二公は孔子が説かれた人）齊の宣王、梁の惠王（孟子が説いた）の徒は、どれも平凡の君主で、到底與に立派な政事を行ふ人でないことは、自身（孔孟）も十分知つて居たのに拘はらず、かく熱心であつたのは、外でもない、惟、自分（孔孟）の心の有らん限りを盡したに過ぎないのである。それは自分の心の有らん限りか盡さなければ、自分は天下後世の人人は、あの衛の靈公、魯の哀公、齊の宣王、梁の惠王等か攻撃せず、また此の四君等も孔孟を用ゐなかつた責任を遁れることなるであらうと恐れるのだ。そうなると、孔子孟軻は、死んでも地下で安妥と目を瞑ることは出来ないのである。

夫聖人賢人之用心也。固如此。如此而生。如此而死。如此而貧賤。如此而富貴。升而爲天。沈而爲淵。流而爲川。止而爲山。彼不預吾事。吾事畢矣。切怪夫後之賢者。不能自處其身也。飢寒困窮之不能。而號於人。嗚呼。使吾誠死於飢寒困窮耶。則天下後世之責。將必有在。彼其身之責。不自任。以爲憂。而我取而加之吾身。不亦過乎。

【釋義】 夫れ聖人賢人が道の爲に心を用ゐるのは、上述の通りである。斯様にして生き、斯様にして死に、斯様にして貧賤に、斯様にして富貴に、志を得ては天に升り、失意では淵に沈み、用ゐられては川となり、捨てられては山となり、如何なる境遇の變化に處しても、自己の本分の盡せるだけを盡すのみである。彼は我と些しも關係はないのであるから、彼の所爲がどうあらうと、我の知つた所でない。我は吾が事を盡し終へたのである。然るに不思議なことには、後世の賢人で、自分で自身の始末がつかず、飢寒困窮に辛棒が出来ない結果、哀れな聲を出して有力者に憐愍を乞ふなどは、（韓文公を指す。公はたび／＼時の宰相に上書して採用されんことを哀求して居る。）さて、自分を置實飢寒困窮に死なせたなら、それは採用しない者の責任であるから、天下後世の批難攻撃は歸著する所があらう。（責任は時の當局者にある）彼は（當局者）自分の責任を、自身で引受けるといふ心配をしないのに、自分は（賢者）それを引取つて自身の上に加へて、餘計な心配までもするとは、なんと過つて居るではないか。

今洵之不肖。何敢自列於聖賢。然其心亦有所甚。不自輕者。何則天下之學者。孰不欲一蹴而造聖人之域。然及其不成也。求一言之幾乎道。而不可得也。千金之子。可以貧人。可以富人。非

天之所與雖以貧人富人之權求一言之幾乎道不可得也。天子之宰相可以生人可以殺人非天之所與雖以生人殺人之權求一言之幾乎道不可得也。

【字義】 ○洵 老泉の名。○不肖 おろかのこと。

【釋義】 今日、私は洵に不肖者で、どうして自分から昔の聖賢と肩を並べたりすることが出来ませうが、到底比較にならない者であります。併し自分の心では、さほどつまらない者とも思つて居りません。何故なれば、天下に於ける學者で、誰しも一駟け駟つて聖人の地位に達するのを希望しない者はありません。併しそれが成功しなるとなると、タツタ一言だけでも道にかなふことを求めても、得られないのである。家に千金を積む富豪の息子は、人を貧しくも出来、人を富ますことも出来るが、天が賦與して呉れない限りは、如何に人を貧くし人を富ます權力を持つて居ても、タツタ一言だけでも道にかなふことを求めても、得られないのである。又、天子の宰相は、人を生かすことも人を殺すことも出来るが、天が賦與しない限りは、如何に生殺の權力を持つて居ても、タツタ一言の道にかなふことを求めても、得られないのであります。

今洵用力於聖人賢人之術亦已久矣。其言語其文章雖不識其果可以有用於今而傳於後與否獨怪夫得之之不勞。方其致思於心也。若或起之得之心而書之紙也。若或相之夫豈無一言之幾於道者乎。千金之子天子之宰相求而不得者一旦在己故其心有以自負或者

天其亦有以與我也。

【釋義】 私が力を聖人賢人の學術に用ゐて、研精して居ることが久しい間でありませう。其言語や其文章が、果して今日の役に立つて後世に傳はるかどうかは知りませんが、唯、不思議なことには、(以下文章の天才あるをいふ)何か言つて見やうと思つと左程に骨が折れず、一旦心に考へるとなると、何者かが来て引起して呉れるやうで、それを心から得て紙に書くとなると、又、何者かが出て来て手引をして呉れる様な醜態であります。こゝにいふ次第でありますから、どうして一言位道にかなふ者がないことはなからうと思ひます。千金の息子、天子の宰相などですら、求めやうとして求められない者が、一朝自分の身に備はつて居るから、心の中でも實は自ら才能を信じて居るのであります。殊によると天が自分に對して特別に賦與して呉れた者ではありますまいか。

曩者見執事於益州當時之文淺狹可笑飢寒困窮亂其心而聲律記問又從而破壞其體不足觀也已數年來退居山野自分永棄與世俗日踈闊得以大肆其力於文章詩人之優柔騷人之清深孟韓之溫醇遷固之雄剛孫吳之簡切投之所向無不如意

【字義】 ○聲律 詩賦の平仄音律。○記問 經書などの記述又は應答。○優柔 やさしくおとなしい。○騷 離騷を作つた屈原を指す。○孟韓 孟子韓愈。○遷固 司馬遷と班固と。○孫吳 兵家の孫武と吳起と。

○簡切 簡明で切實。

【釋義】 先般執事に益州で御面會致しましたが、其時御覽にいられた文章は、淺はかて狹くろしく、お耻かしい限りでありました。それは飢寒だの困窮が心をかき亂し、又、受験の準備としての詩賦の平仄音律、經義の記述應答などに苦心して居た爲め、文體などはめちやめちやになつて、到底觀るに足らない者でありましたが、數年來、山野に引籠つて、自分では永く世に棄てられるのを本分とし、世間の俗事とは分け離れた爲め、一方で非常に力を文章に盡すことが出来ました。其擧句、詩經のやさしくおとなしく、屈原の清き心に深い思ひ、孟子韓愈の溫和醇粹、司馬遷・班固の雄大剛健、孫子吳子の簡明切實なるものなど、之に合はせて作らうと思つと、以上の文學上の特色を心の儘に書けないものはありません。

嘗試以爲董生得聖人之經其失也流而爲迂鼃錯得聖人之權其失也流而爲詐有二子之材而不流者其惟賈生乎惜乎今之世愚未見其人也作策二道曰審勢審敵作書十篇曰權書。

【字義】 ○董生 漢の董仲舒。○聖人之經 聖人の常道。○聖人之權 聖人の權變、即ち事の場合に応じて適宜の處分。○策 論策。○道 篇に同じ。普通の文は篇といひ政事經濟に關する策論は道といふ。

【釋義】 嘗試に思つたことがありました。「董仲舒は聖人の常道を得たが、迂濶に流れた缺點があり、鼃錯は聖人の權道を得たが、詐道に流れた缺點がある。此二人の才を備へて迂濶にも詐道にも流れないのは、惟、賈

誼一人のみである」と。然るに残念なことには現今では、私は此賈誼に比敵する人を見出せないのではありません。論策二篇を作りました、一を審勢、一を審敵といひます。書十篇を作りました、名づけて權書といひます。

洵有山田一頃非凶歲可以無飢力耕而節用亦足以自老不肖之身不足惜而天之所與者不忍棄且不敢褻也。

【字義】 ○一頃 百畝。

【釋義】 私は山田を百畝ばかり所有して居りますから、凶年飢饉でない限りは、飢ゑることもありません。骨を折つて耕作し、無益の費用を節儉すれば、老年を送るに十分であります。不肖の此身は惜しいとは思ひませんが、さりとて天が賦與されたこの本分は、之をむさむさ棄ててしまふに忍びず、其上又、褻したくないのであります。

執事之名滿天下天下之士用與不用在執事故敢以所謂策二道權書十篇爲獻平生之文遠不可多致有洪範論史論十篇近以獻内翰歐陽公度執事與之朝夕相從議天下之事則斯文也其亦庶乎得陳於前矣若夫言之可用與其身之可貴與否者執事也執事責也於洵何有哉。

【字義】 ○内翰 詔勅の起草、又は欽定著作の事などを司る官を翰林院學士といふ。内翰は、即ち翰林院學士のこと。

【釋義】 執事の名聲は天下に充滿して居ります。天下の士を採用すると否とは、執事の方寸に在るのであります。故に策二篇權書十篇を差出して御覽に供す次第であります。平生作つて居る文章は、執事と距離が餘り隔つて居りますから、澤山に差出せません。洪範論史論等十篇は、近頃、翰林院學士の歐陽公の御手許まで差出して置きました。想像致すに、執事は公と朝夕一所に天下の事を御協議なさるでありません。そうすると、この洪範論などは、或は歐陽公の手から執事の前に陳列されて御一讀を得るかも知れません。文章中論述した議論で、御採用になるべきか、此身を貴くせらるべきか否かに就いては、是は執事の御責任であつて、私に於て關係する所ではありません。

上范司諫書

歐陽公

范仲淹、字は希文、右司諫より歴官して參知政事に進む。卒して文正と諡せられ、楚國公を追封せられた。月日具官謹齋沐浴拜書司諫學士執事前月中得進奏吏報曰自陳州召至闕拜司諫即欲爲一書以賀多事勿卒未能也。

【字義】 ○月日具官 上書の本書なら何月何日何の官某と書くのが當然だが、茲では本書でないから略したのである。

○齋沐浴 齋戒は「ものいみ」といつて、身心飲食を慎み、穢に觸れないやうにすること。沐浴とは、沐は頭を洗ひ、浴は身體を清めること。○進奏史 進奏院といふ詔勅などを傳達する役所の官吏。○闕宮城の門をいふ。故に朝廷を尊敬して闕といふ。○勿卒 あわただしい。

【釋義】 月日某官某、謹んで齋戒沐浴して司諫學士の執事まで一書を差出します。前月中に、進奏吏からの報告を得ましたが、それによると、「執事は陳州から召されて朝廷に來られ、司諫の官職に拜命せられた」といふことであります。早速一書を作つて御視を申し上げやうと思つて居りましたが、用事が澤山たて込んで居て、勿卒の折とて本意を達することが出来ませんでした。

司諫七品官爾於執事得之不爲喜而獨區區欲賀者誠以諫官者天下之得失一時之公議係焉今世之官自九卿百執事外至一郡縣吏非無貴官大職可以行其道也然縣越其封郡逾其境雖賢守長不得行以其有守也吏部之官不得理兵部鴻臚之卿不得理光祿以其有司也若天下之得失生民之利害社稷之大計惟所見聞而不繫職司者獨宰相可行之諫官可言之爾。

【字義】 ○九卿 九人の大臣。○吏部 官吏の任免陟黜を掌る。○兵部 軍事を司る省。○鴻臚 外務省。○光祿 式部省。

【釋義】司諫の職は七品の相當官で、執事におかれては之を得られても左程お喜びでもありません。併し私獨、區區たる小さな心で祝賀致さうと思つた譯は外でもありません。考へて見ると、諫官の職は、天下政道の得失と一時の公議とに關係がある洵に重大なる官職であるからであります。何故かといふと、現代の官で、中央政府では九人の大臣、其他の百官から、外は地方の一郡一縣の長官まで顯官重職で、其主義を行ふことの出来ない者はないのでありますが、併し一旦、縣で其管轄を越え、郡でも管轄を越え、如何に賢明な大守(郡の長官)又は縣令などでも、其職權を管轄區域外にまで及ぼすことが出来ません。それは外でもなく銘銘守るところの範圍があるからであります。獨、地方官許りでなく、中央政府でも、吏部の官は兵部の事務が扱はれず、鴻臚の大臣は光祿の事務が扱はれないのも、同じく其職分があるからであつて、其權限は洵にはつきりと區別がついて居ます。處が、それが天下の得失、人民の利害、國家の大計などに就いて、或は見たり或は聞いたりすると、職掌に束縛もされずに、處理されることの出来るのは、獨、宰相が政務を實行し得、諫官が諫言し得る許りであります。

故士學古懷道者仕於時不得爲宰相必爲諫官諫官雖卑與宰相等天子曰不可宰相曰可天子曰然宰相曰不然坐乎廟堂之上與天子相可否者宰相也天子曰是諫官曰非天子曰必行諫官曰必不可行立于殿陛之前與天子爭是非者諫官也宰相尊行其道諫官卑行其道言行道亦行也

【字義】○殿陛 宮殿の「きざし」。

【釋義】上述の次第でありますから、士たる者で古聖賢の道を學び、經世經國の大業を行はうとする者で、時の朝廷に仕へて、倘し宰相となることが出来ない時は、必ず諫官と爲らうと希望します。諫官の官位は成程斯様に卑いが、職務の重大なのは、宰相と同一であるからであります。政事堂の上で、天子は「不可」といはれるのを、宰相は「可」といひ、天子が「然り」といはれるのを、宰相は「然らず」といつて、廟堂で天子と可否を辯論する者は、宰相であります。天子が「是」といはれるのを、宰相は「非」といひ、天子が「必ず行はう」といはれるのを、諫官は「必ず行つてはなりません」といひ、宮殿の階下に立つて、(諫官は位地が卑いから殿上に上れない)天子と是非を爭論する者は、諫官であります。宰相は尊い位地に居て其道を行ひ、諫官は卑い位地に居て言論を行ふのであつて、果して言論が行はれば、道も行はれるといふことになるのであります。(こゝに至れば宰相と同一である。)

九卿有司郡縣之吏守一職者任一職之責宰相諫官係天下之事亦任天下之責然宰相九卿而下失職者受責於有司諫官之失職也取譏於君子有司之法行乎一時君子之譏著之簡册而昭明垂之百世而不泯甚可懼也夫七品之官任天下之責懼百世之譏豈不重邪非材且賢者不能也

【字義】○簡册 書籍のこと。

【釋義】九卿百官又は郡縣の長官などで、一職を守る者は、單に一職だけの職責を負擔するに過ぎないが、宰相とか諫官などは、天下一般の事に關係し、そして天下一般の責任を引受けるものであります。併し宰相九卿以下すべての官吏で、苟も職務に失敗があつた時は、役人から處罰されるが、諫官で失策すると、君子から攻撃を受けなければならないのであります。役人の處罰は一時的のものであるが、君子から受けた譴責攻撃は之を書籍に記載して明白で、之を百代までも殘されて消滅しないから、洵に恐ろしい譯です。夫れ七品の官等の諫官といふと、如何にも卑しい様に見えるが、しかも天下の責任を負擔し、百代までの攻撃を顧慮することであると、なんと重大な任務ではありますまいか。此の任務を引受けるには、材能あり、且つ賢明な人でなければ、負擔は出来ないのであります。

近執事始被召於陳州。洛之士大夫相與語曰。我識范君。知其材也。其來不爲御史。必爲諫官。及命下。果然。則又相與語曰。我識范君。知其賢也。他日聞有立天子陛下。直辭正色。而諍廷論者。非他人。必范君也。拜命以來。翹首企足。竚乎有聞。而卒未也。竊惑之。豈洛之士大夫。能料於前。而不能料於後也。將執事有待而爲也。

【字義】○洛 帝都といふ義。○御史 百官を糾彈することを掌る。

【釋義】 此頃執事が始て陳州から召出された時、帝都の士大夫は、相與に語りあつていふに、「自分は范君を知つて居る、其材能を知つて居る。今度帝都へ來られるといふが、御史とならなければ必ず諫官であらう」と。大命が下つたら、果して諫官であつた。そしたら又、語り合つていふに「自分は范君を知つて居る、其賢明を知つて居る。諫官となつた以上、他日、天子の宮殿の階下に立つて、辭を曲げず、顔色を正しくし、面前で是非を争ひ、朝廷で曲直を論ずるのは、他人でなく必ず范君だらう」と。處が拜命されてからのことだ、我我共は首を延ばし足をつまだてて、何か諫言されるだらうと待つて居りますが、今日までまだ其話を聞きません。實はどうされたことかと疑ひ惑つて居る次第であります。なんと帝都の士大夫は拜命以前のこと(不爲御史必爲諫官云々を指す)は巧に豫想が出来ても、拜命後のこと(直辭正色面諍廷論云々を指す)は豫想し損なつたのでありませうか。否、そうではなく、執事に於かれては或る時期を待つて居て、それでこんなのでありませう。(有待の二字が後の議論を呼起す)

昔韓退之作爭臣論。以譏陽城。不能極諫。卒以諫顯。人皆謂城之不諫。蓋有待而然。退之不諫。其意而妄譏。修獨以謂不然。當退之作論時。城爲諫議大夫。已五年。後又二年。始廷論陸贄。及沮裴延齡。作相。欲裂其麻。纒兩事耳。當德宗時。可謂多事矣。授受失宜。叛將強臣。羅列天下。又多猜忌。進任小人。於此之時。豈無一事可言。而須七年耶。當時之事。豈無急於沮延齡論陸贄兩事耶。

【字義】 ○争臣論 本書卷二に出づ。○陸贄 唐の徳宗の時、裴延齡が陸贄を讒言したのを、陽城は諫官を引連れて延齡の倭姦を朝廷で論争した。○麻 麻紙といつて、麻を原料にして造つた紙に黄白二種がある、白麻は任官の辭令を書するに用ゐる。○叛將 強臣 節度使の横暴を極めたものをいふ。

【釋義】 昔、韓退之が争臣論一篇を作つて、諫議大夫陽城が、十分に諫言しないのを攻撃した結果、最後に城は諫言で名を取る様になりました。人は皆考へますに「城が諫言しなかつたのは、推測するに時期を待つて居たからである。それを退之は城の意中を識らずに、妄りに攻撃したのは、洵に間違つて居る」と。處が私丈けは考へるに、此議論は誤つて居ると、何故ならば、退之が此論文を作つた時は、城は諫議大夫と爲つてからすでに五ヶ年を経過して居り、それから後又二ヶ年を経て、始て陸贄の事に就いて、朝廷で論争したのと、又、裴延齡が宰相と爲るといふに反對して、その辭令書である麻紙を引裂かうとしたとの、僅か二件に過ぎないのであります。徳宗皇帝の時代は、天下多事と謂つても好い位で、天子が官職を授けたり、之を受ける相手方など、俱に其宜しきを得ず、節度使などで朝廷に叛いた大將、横暴な臣下等が天下に綱の目を張つた様に列んで居り、又猜忌の深い徳宗は、好んで小人を任用されたのであつた。此の様な時に出會つて、城たる者、どうして一言の論争する事件がなくて、七ヶ年も時期を待つて居るといふことがあらうか、又、當時の事柄で、延齡の宰相と爲るを沮み止めたり、陸贄の貶斥を論議する二ヶ條より、もつと大切な事がなからうか。こんな譯は決してない筈であります。

謂宜朝拜官而夕奏疏也。幸而城爲諫官七年。適遇延齡陸贄事。一諫而罷。以塞其責。向使止五年六年而遂遷司業。是終無一言而去也。何所取哉。今之居官者。率三歲而一遷。或一二歲。甚者半歲而遷也。此又非可以待乎七年也。

【字義】 ○司業 國子司業といつて、今の大學教授。

【釋義】 私の考へでは、「城たる者、朝に拜命したら夕方直ちに意見を認めて上書するのが至當であらう」と。幸にも城は諫官となつて七ヶ年を繼續し、丁度折よくも延齡陸贄などの事件に出遇つて、一回諫言して罷められて、責塞ぎだけは致したものの、倘しあれが五年か六年か七ヶ年かで國子司業に轉任したなら、是は初から終まで一言もいはずに去つたことになる。こんなことでは諫官として何の取り所があらうか、現今官に居る者は、大概三年目に一度づつ轉任し、中には一二年で轉するもあり、甚しいのになると、半年位で遷るのもありますから、到底七年間を待つなどの優長な眞似は出来ないのであります。

今天子躬親庶政。理化清明。雖爲無事。然自千里詔執事。而拜是官者。豈不欲聞正議而樂讜言乎。今未聞有所言說。使天下知朝廷有正士。而彰吾君有納諫之明也。

【字義】 ○理化 教化と治理と。○讜言 道理に叶つた言。

【釋義】 現今、聖天子は躬ら政事を裁斷され、教化と治理は清く明かに、洵に太平無事であるとはいへ、併

しはるる千里もある遠方から、執事に詔してお召還しになつて、是の諫官に拜命された思召は、どうして正論を聞き善言を樂みたいといふ御心でないことがありませう。それであるのに、今日まで、まだ執事は何等の諫言を奉つて、天下の人人に、朝廷には近頃范某と云ふ正士が居るといふを知らせ、そして吾君は其人の諫言を御嘉納遊ばす聰明無比な方であることを世間に知らせられたといふを聞きませぬ。

夫布衣韋帶之士。窮居草茅。坐誦書史。常恨不見川。及用也。又曰。彼非我職。不敢言。或曰。我位猶卑。不得言。得言矣。又曰。我有待。是終無一人言也。可不惜哉。

【字義】 ○布衣韋帶之士 布の衣服に皮の帶をしめて居る人。即ち無位無官の人のこと。○草茅 草や茅の生えて居る處に住居すること。民間のことにいふ。

【釋義】 夫れ、布衣韋帶の無官の人で、草深い片田舎に住居して經書史傳を讀んでばかり居て、滿腔の經綸を懷き、常に採用されないのを恨んで居る。それが一旦用ゐられるとなると、「あれは自分の職務でないから言はない」と。或は「自分の位地はまだまだ卑いから、言ふことが出来ない」と。さて言ふことの出来る位地になると、今度は「自分は時期を待つて居るのだ」と。こんなことでは結局誰一人も言ふ者がなくなる事になつてしまふ。なんと惜しいではありませんか。

伏惟執事思天子所以見用之意。懼君子百世之譏。一陳昌言。以塞重望。且解洛士大夫之惑。則幸甚幸甚。

【釋義】 伏して思ふに、執事に於かれては、天子が執事を御任用になつた思召を考へられ、同時に君子や百世までの非難攻撃を取るのを懸念されて、一たび善良なる言論を陳述して、天下から屬望されて居る責任を果たし、且帝都の士大夫が懷いて居る疑惑をお解き下さつたら、大幸之に過ぐるものはありません。

卷五 有字集

小心文

此集皆謹嚴簡潔之文。場屋中。日晷有限。巧遲者不如拙速。論策結尾。略用此法度。主司亦必以異人待之。

此集に載せた文章は、どれも皆謹ぶかく嚴格であつて、そして簡明で要領を得て居る者許りである。場屋(試験場)中では、時間に制限があるから、上手で遅い者は、寧ろ拙くても速く出来る者には若かないのである。論策文の結末に、こゝいふ法則を用ゐて書立てると、試験官も必ず異常の人才として待遇するであらう。

師說

韓文公

師道が衰微して、世人一般に従ふを恥辱と心得る有様であつた。それを文公は世間の嘲罵に頓著せず、後輩を召し集めて自分で師と爲り、又此説を作つて意見を發表したものである。

古之學者必有師。師者所以傳道授業解惑也。人非生而知之者。孰能無惑。惑而不從師。其爲惑也終不解矣。

【釋義】古の學者は必ず師がある。師とは先生の道を傳へ、學業を授け、疑惑を解決するものである。すべ

欠

欠

生物を食はず、生草を踏まないといふ靈獸で、麒麟は其牡で麟は牝である。是は實在的のものでなく、聖王が
出ると麒麟も出現するといつて、龍などと同じく、支那上古の理想的動物である。

此篇は春秋に記載されて居る通り、哀公の十四年に狩をして麒麟を獲たといふことに就いて、許多の議論を
吐露したものである。解とは解説の義である。

麟之爲靈昭昭也。詠於詩。書於春秋。雜出於傳記。百家之書。雖婦人小子。皆知其爲祥也。

【字義】 ○詩 詩經をいふ。

【釋義】 麟の靈獸であることは洵に著明であつて、詩經にも此物を詠じてあり、春秋にも書かれ、歴代の歴
史傳記、又は百家の書にも、あちらこちらに記載されて居るほどで、婦人小兒までも誰しも皆麒麟は芽出度
い靈物であるといふことを知つて居る。

然麟之爲物。不畜於家。不常有於天下。其爲形也不類。非若馬牛犬豕豺狼麋鹿然。然則雖有
麟。不可知其爲麟也。角者吾知其爲牛。鬣者吾知其爲馬。犬豕豺狼麋鹿。吾知其爲犬豕豺狼
麋鹿。惟麟也不可。不可知。則其謂之不祥也亦宜。

【字義】 ○麋 「とないい」 鹿の一種。○鬣 「たてがみ」。

【釋義】 併し此の麟は家に飼育されず、不斷常常、世間に在るものでなく、その形状は他の動物と似て居

馬牛犬豕豺(山犬)狼麋鹿など同一でないのだ。それだから縦令や麟が居ても、之を麟と知るよしもない。角の生えた者は、自分は牛であると知り、鬣ある者は、自分は馬であるを知り、其他、犬豕豺狼麋鹿は、自分分は犬豕豺狼麋鹿であるを知るが、惟、麟だけは知ることが出来ない。知ることが出来なければ、之を不祥の動物と見做しても差支へない譯である。

雖然麟之出必有聖人在乎位。麟爲聖人出也。聖人者必知麟。麟之果不爲不祥也。

【釋義】 併し麟は必ず聖人が天子の位地に居る時に出現するもので、全く聖人の爲に出て来るのである。故に聖人は必ず麟を知つて居る。麟はそうすると決して不祥の物ではないのである。

又曰麟之所以爲麟者以德不以形。若麟之出不待聖人則其謂之不祥也亦宜。

【釋義】 又、或る方面からいふと、麟が麟として貴ばれる理由は、生物を食はず、生草を踐まないなどといふ立派な徳があるからで、形體がどうのこうのといふ譯からでない。故に倘しも麟の出現するのが、聖人の出る時を待たずに、勝手に出現する様では、之を不祥の物と謂つても、決して差支へないのである。

雜説上

韓文公

雜説とは、自分の心に浮んだ事を記載したに過ぎない。

此篇の主意は、雲と龍とを借り、龍を聖君に、雲を賢臣に比して、聖君賢臣相待つて、そこで大功を建てる

ことが出来るものであるといふを説いたのである。

龍嘘氣成雲。雲固弗靈於龍也。然龍乘是氣。茫洋窮乎玄間。薄日月。伏光景。感震電。神變化。水

【字義】 〇嘘 吸うた氣を、緩くそそぐと吹き出すこと。〇茫洋 ひろくとしたさま。〇玄間 天間。

〇薄 迫るなり。〇伏 かくすこと。〇沮 陵谷 脚や谷を水で一面にしたす。

【釋義】 龍が氣を吹き出すと、それが雲となる。(聖主が賢臣を用ふるに喩ふ)併し雲は本來龍より靈異なものではない。(賢臣は聖君に及ばざるに喩ふ)といつて、龍はこの氣に乗つて、ひろびろと天空を極め、日月の在る所までに達し、日月のひかりをも匿し、雷電をも感じさせ、千變萬化で、或時は下界に大雨を降らせて一面の洪水とさせ、脚や谷を浸してしまふ。是で考へると、雲も亦靈怪なるものである。(聖君が賢臣を任用すると、それこそ大功業が建てられる)。

雲龍之所能使爲靈也。若龍之靈則非雲之所能使爲靈也。然龍不得雲無以神其靈矣。失其所憑依。信不可歟。異哉其所憑依。乃其所自爲也。易曰雲從龍。既曰龍雲從之矣。

【字義】 〇憑依 もたれ依る。〇易 易經の文言傳中の語。

【釋義】 雲は龍が之を靈怪にさせるもので、單獨では、どうすることも出来ぬが、一方、龍の方でも、其靈

怪は雲が之を靈怪にさせる譯には往かぬ。(賢臣に功業を建てさせるものは聖君であるが、聖君が聖君として億兆の人民から瞻仰されるのは、賢臣が之をどうすることも出来ぬ。聖君自身が之を爲さればならない)併し、龍は雲を得なければ、到底不思議な靈異を現はせない。そうすると、龍がもたれ依つて居る雲を失つては、如何に神靈な龍でも何の働きも出来ぬ(聖君と賢臣とで、始て大功業が建てられる)なんと洵に不思議なことであるまいか、龍がもたれ依つて居る雲は、外でもない、龍自身が吹き出した雲ではないか。(聖君のたよめる者は賢臣であり、賢臣の事業は、即ち聖君自身が爲す所である)。易にも『雲は龍に従ふ』といつて居る。最早や龍といへば、雲は必ず之について居るのだ。(聖君と名のついて居る君には、必ず賢臣が輔佐して居る)。

雜説下

韓文公

此篇は、世の英雄豪傑と名のつく者は、必ず之を尊重し、之を優遇し、之に重大な任務を授けて、始て其才能を發揮することが出来るのであるといふを馬に喩へて説いたものである。

世有伯樂。然後有千里馬。千里馬常有而伯樂不常有。故雖有名馬。祇辱於奴隸人之手。駢死於槽櫪之間。不以千里稱也。

【字義】 ○伯樂 解は卷一『送溫處士赴河陽軍序』に出て居る。○不常有 稀に世に出て、絶えず世には

出るといふわけにはゆかぬ。○駢死 並んで死ぬる。○槽櫪 槽は馬の食物を入れる桶、櫪は厩の踏み板。

【釋義】 世には伯樂と名のついた馬を相る名人があつて、始て一日に千里も走る名馬が出て来るのである。一體、千里の馬は、平常何時でもあるが、伯樂はいつでも有るといふ譯には往かない。(人を知る賢明な宰相があつてこそ、英雄豪傑が活動出来る、併て其英雄豪傑は、常に民間に居ても、人を知る者は、いつも有るとは往かぬ)故に縱令どんな名馬があつても、徒らに名もない馬丁どもの手で恥辱を受けて、飼桶又は厩小屋の踏み板の間で、どれもこれも首をならべて死んで、折角千里を走る能力があつても、哀れ之を認められずに死んでしまふのだ(平凡な宰相は、英雄豪傑を認めることが出来ないから、俊才はつまらなく一生を終つてしまふ)馬之千里者。一食或盡粟一石。食馬者不知其能千里而食也。是馬也。雖有千里之能。食不飽。力不足。才美不外見。且欲與常馬等。不可得。安求其能千里也。

【釋義】 馬で一日に千里も驅る者は、食物もそれ相當に多量を要し、一回の食量は、或は一石の米をも食盡すのである。處が馬の飼主は、此馬が千里も驅る能力を持つて居ると知つて飼つて居ないのである。(異常の才能ある者には、それ丈けの待遇を與へなければならぬ)故に是の馬は、縱令千里を驅る能力があつても食物が不十分だから、力も満足に出せず、才能の優れて居るのも、外面に見はれない。駿馬どころか、一時普通の馬と同程度の働きをしようと思つても、それすら不可能である。どうしてそれが千里も驅出すことが出来やうか。(俊才でありながら、尊位厚祿がないから、才智を展ばさうと思つても、それは出来ず、平凡人

と同等の働きも出来ない)

策之不以其道。食之不盡其材。鳴之不能通其意。執策而臨之曰。天下無良馬。嗚呼其真無馬耶。其真不識馬耶。

【字義】 ○策 鞭のこと。名詞ともなり、動詞ともなる字。

【釋義】 然るに飼主は其馬が駿馬といふことを知らず、無暗やたらに鞭をあて、適當の方法を以てせず。食料を與へるにも、それが不十分だから、材能を發揮されず、鳴いて訴へたいにも意思が通ぜず、酷使虐遇を受けて許り居る。一方、飼主は鞭をふりまはしながら、馬に對して獨語をいつて「天下は廣いが、理想的の馬は一頭も居ないワイ」と歎息するが、さてさて、此御者のいふ通り、實際駿馬は天下に居ないのであらうか、それとも眞實馬を相ることが出来ないのだらうか。

送薛存義序

柳子厚

薛存義、永州の零陵の令となつて居たが、轉任の時に、柳子厚が此序文を書いて送つたのだ。河東、薛存義將行。柳子載肉于俎。崇酒于觴。追而送之。江之漘。飲食之。且告曰。凡吏于土者。若知其職乎。蓋民之役。非以役民而已也。

【釋義】 河東の人薛存義君が、今や他處へ轉任しやうとする時、自分は肉を盛物臺に載せ、酒を「さかづき」に盛り、あとから追かけて河のほとりへ往き、これに飲食させ、且つ告げていふに「すべて土地を治める官吏(地方官で地方行政を掌る者)に就いては、貴君は其職を知つて居られますか。抑々官吏たる者は人民から使役される者(人民の使用人)で、人民を使役するばかりが、其職分でないのである。

凡民之食於土者。出其什一。傭乎吏。使司平於我也。今受其南。忘其事者。天下皆然。豈惟意之。又從而盜之。向使傭一夫於家。受若直。意若事。又盜若貨器。則必甚怒。而黜罰之矣。以天下多類。此而民莫敢肆。其怒與黜罰何哉。勢不同也。勢不同而理同。如吾民何。有達乎理者。得不恐而畏乎。

【釋義】 すべて人民が、土地を耕作して往く以上、収入の十分一の税を政府に提供して、それで官吏を雇ひ安寧を我(官吏)に圖らせるのである。處が官吏は其直賃錢(即ち俸給)を受けながら、其職務を怠つて居る者が、天下一般である。どうして職務を怠る許りだらうか、其上、自分の官職を利用して、人民の財産を「こまかいす」のである。なんとけしからぬことではないか。翻つて之をお前の家に引くらべて考へて見るが好い。倘し一人の男を自分の家に傭入れたと假定して、お前から與へる俸給を受けながら、お前の仕事を怠り、又、お前の貨物器財を盗んだら、お前は必ず怒つて、其者を或は追出し又は罰するであらう。考へて見るに、天下の事此に似て居る者が、澤山ある、それであるに、人民は官吏に對して、怒つたり又は追出し或は處罰し

ないといふは、どういふ理由であらうか。是は外でもない。人民と官吏の勢力が同一でないからである。勢力は同一でなくも、道理は同じである。こんな始末で吾が民をどうすることか。道理に通じて居る者なら、恐れ畏れて人民に「ふびん」をしなければならぬいじやないか。

存義假令零陵二年矣。蚤作而夜思。勤力而勞心。訟者平賦。者均老弱。無懷。許暴。憎其爲不虛。取直也。的矣。其知恐而畏也。審矣。吾賤且辱。不得與考績。幽明之說。於其往也。故賞之以酒肉。而重之以辭。

【字義】 ○考績幽明 書經の舜典に『三載考績。三考黜陟幽明』とある。官吏の政績を考査し、幽て罪ある者は之を黜げ、明て功績のある者は之を昇任させること。

【釋義】 存義君は零陵を假りに(本官にせず縣令の試補になつて)治めて居られたことが二年であつたが、其間は、蚤く起きて事務を執り、夜遅くまで政治上の事務を考へ、骨を折り心を勞し、訴訟は公平に、租税の賦課は均一に、行政の結果によつて縣内の老弱誰しも詐欺の念を懷き、亂暴な行動をする者もなくなつた。是で君が職務を盡さずに俸給丈けを取つて居なかつたのが明白である。それなら君は職務に對して恐れ畏れて、放漫的でないのも確實である。自分は職分賤しく、且つ貶謫を受けてこんな土地へ來て居る者で、到底中央政府の官吏の成績考査に與る身分でないから、存義の功績を上申して引立てることが出来ない。故に責めても酒肉を勸めて君の今日迄の熱心を賞賛し、其上此文句を書いて送るのである。

送董邵南序

韓文公

董生は壽州安豐の人、孝行で名が高かつた。文公が江南に奉職して居た時、交際を結んで『嗟哉董生行』の詩などを作つた。

此篇は、董生が轅軻不遇の餘、河北に游んで仕を藩鎮に求めやうとした時の送序であるが、當時の節度使といふ者は、極めて不臣横暴で、動もすると叛亂を企てる實に始末にへないものであつた。其處へ董生が出掛けて往つて仕へやうとするのは、公に於て此上もない不満であつたから、之を書いて「董生が往かなければならない必要は認められないといふのと、河北の藩鎮どもが早く唐朝に歸順するが好いといふ」ことを諷したものである。

燕趙古稱多感慨悲歌之士。董生舉進士。連不得志於有司。懷抱利器。鬱鬱適茲土。吾知其必有合也。董生勉乎哉。

【字義】 ○燕趙 支那北部地方をいふ。今の北京は古の燕の地であつたから、現今でも北京を燕京ともいふ。

【釋義】 戰國時代の燕趙地方は、古來慷慨悲歌の士が多いと稱された處である。董生は進士に推薦された後、いつも役人から氣に入られず、落第をしつづけて、其舉句に、立派な器量を持ちながら、心中に不平を抱いて、此度この燕趙地方に出掛けるが、自分は必ず意氣投合して、相當に用ゐられるに相違ないと認めるのである。董君よ、怠らずに勉めるが好い。

夫以子之不遇時。苟慕義彊仁者。皆愛惜焉。矧燕趙之士。出乎其性者哉。然吾嘗聞風俗與化移易。吾惡知其今不異於古所云。聊以吾子之行卜之也。董生勉乎哉。

【字義】 ○吾子 「君」とか「お前」とかいふこと。

【釋義】 夫れ、君が今日世に用ゐられないといふに就いては、苟も義を慕ひ仁を勉める人人は、誰しも不遇を惜まない者はない。況して燕趙地方の人人は、天性仁義を愛するのであるものを、君が歓迎を受けるのは確實であらう。併し自分が嘗て聞いたことには、「風俗はその時代時代の教化によつて移り易るものである」と。自分はどうして現代の燕趙の風俗は、古代から言傳へられて居るのと、同一であるとも断定は出来やうか。先づ今回君が往かれるに就いて之を判断しやうと思ふのだ。董君よ、努力するが好い。

吾因子有所感矣。爲我弔望諸君之墓。而觀於其市。復有昔時屠狗者乎。爲我謝曰。明天子在。上可以出而仕矣。

【字義】 ○望諸君 燕の樂毅（戰國時代の節義の人）が趙に仕へて、望諸君と號せられた。○屠狗者 狗だの牛だのの屠殺業者。史記刺客傳に「荆軻至燕。愛燕之屠狗者高漸離。軻嗜酒。日與屠狗飲於燕市」とあり。此處では高漸離を指す。

【釋義】 自分が君の出發に方つて、心に感じたことがある。どうぞ彼地へ往かれたら、望諸君樂毅の墓に參詣して下さい。そして燕の市中を見渡して貰いたい、また昔の屠狗者高漸離の流に逢はれるであらうか、果して出逢はれたら、自分に代つて告げて貰いたい、現今は賢明な天子が御世を知り召て居らせられるから、何も藩鎮の部下に屬して、ぐづ／＼することはない、早く都に出てお仕へするが好い」と。

【參考】 解題の處で述べた通り、董生は自分の不遇が不平の餘り、朝廷に服従しない藩鎮に身を託さうとして居るが、是は洵に贊成出来ないことであるが、さりとして正面から攻撃も出来ず、故に側面から述べ立てて樂毅の墓に參詣して呉れなどといつて居るが、此樂毅は、燕から引拂つて趙に往つてしまつたが、それでも燕を終身忘れなかつた人であるから、之に參詣するのを頼んだのは、其間に千萬無量の含蓄があるを見逃してはならない。又、屠狗者の高漸離も、荆軻と市中で酒を飲んだ後、お互に手を把つて泣いたといふことである。それは自分の能力を誰も知つて呉れる人がないからである。即ち今日の董生の境遇と一致して居るのだ。此二人を引合に出したのは、一は董生に故國を忘れてはならないといふことを諷し、一は縱令多少の不平はあつても、聖天子が位に即かれて居られるから、藩鎮などの部下に屬するは見合せたが好いといつて論じたのである。茅鹿門は此文を評して「文僅百餘字。而感慨古今。若與燕趙豪雋之士。相爲叱咤嗚咽。其間一涕一嘆。其味不窮。昌黎序文。以之當屬第一」といつて居る。こんな文章は、數十百回繰返し繰返し含味すると、妙味は無限に出てくる。

送王含秀才序

韓文公

王含は隋末の大儒通の弟績字は無功の子孫である。この績は、劉伶が『酒德頌』と名づけて、酒の徳を稱賛した文に次いで、『醉郷記』一篇を著した有名な人である。この績の子孫たる含は、世に用ゐられずして、他處に出向くに方りて、公は此文を草して、其行を送つたのである。

吾少時讀醉郷記。私怪隱居者無所累於世。而猶有是言。豈誠旨於味耶。及讀阮籍陶潛詩。彼雖優蹇。不欲與世接。然猶未能平其心。或爲事物是非相感發。於是託而逃焉者也。

【字義】 ○阮籍 晉の人。物事に頓着なく、酒許り飲んで居た。○陶潛 字は淵明、晉末宋初の人。非常に酒を嗜んだ。○優蹇 おこりたかぶること。

【釋義】 自分が少い時、王績の作つた醉郷記一篇を讀んで、心竊に不思議に思つたことがある。それは外でもない、世を捨てて居る人は、世を見捨てて居るのだから、何も心に累(心が世の事物に執はれること)はされる筈がない。それであるのにまだ酒にかこつけて胸中の不平を洩らして居るが、なんと眞實酒を旨いと思ふのであらうかと。また阮籍や陶潛の詩を讀んで見るに、矢張り同一であつたので、始て一切が分つた。此人人等は驕傲で、世の中との關係を希望しないとはいへ、不平の氣は抑へやうとしても抑へきれず、又は種種の物事の爲に、感慨が湧出してくるから、そこで酒に假つて一切を忘れて居るのである。

若顏氏子操瓢與箆。曾參歌聲若出金石。彼得聖人而師之。汲汲每若不可及。其於外也固

不暇。尙何麴蘖之託。而昏冥之逃耶。吾又以悲醉郷之徒。不遇也。

【字義】 ○顏氏子 孔子の門人顏回をいふ。平生非常な貧乏で、僅かな飲料と食物に安んじて、些しも貧乏に苦にしまつた。○曾參 亦孔子の門人。貧乏に居ても泰然として歌を謡つて、其聲は鐘や磬の樂器から出る様に玲瓏たる者であつた。○麴蘖 酒をいふ。○昏冥 酒に酔ひづぶれること。

【釋義】 顏回などは、一ヶの瓢に入れた飲料と、一ヶの箆(飯をいれる器)にいた飯だけの貧乏暮しても、自分の樂は些しも改めず。曾參は満足に食ふことも出来ないのに、歌を謡つて其聲の玲瓏たることは、鐘や磬から出る様に清らかであつた。此二人等は孔子といふ聖人を師とし、休まず力めて、いつも及ばないの心配する様であつた。斯様に、外事すらも心を動すひまがないのに、どうして酒にかこつけて、酔ひつぶれて世を逃れたりすることが出来やうか。是だから益、彼の醉郷に隠れた王績、阮籍、陶潛の徒が、時世に遇はず、煩悶許りして居たのを氣の毒に思けない譯には往かぬ。

建中初。天子嗣位。有意貞觀。開元之不績。在廷之臣。爭言事。當此時。醉郷之後世。又以直廢。吾既悲醉郷之文辭。而又嘉良臣之烈思。識其子孫。

【字義】 ○建中 唐の德宗の年號。○貞觀開元 貞觀は唐の太宗の年號。開元は玄宗の年號。貞觀は吳音「ちようばん」を以て行はる。○不績 大いなるいさを。

【釋義】建中の初年に、天子即位せられ、彼の太宗の貞觀、玄宗の開元の善治善政を繰返したいとの思召があつた。其時朝廷の官人等は、争つて時事に就いて意見を申述べたが、此時、『醉郷記』の作者王績の子孫は直言したので廢せられたが、自分は以前に『醉郷記』の文句を讀んで、作者の意中を氣の毒に思つて居るのに、其上、又、善良な臣が出て來たのを感服して、其子孫を知りたいと思つて居た。

今子之來見我也。無所挾。吾猶將張之。況文與行不失。其世守渾然端且厚。惜乎吾力不能振之。而其言不見信於世也。於其行。姑與之飲酒。

【字義】○無所挾。才智才能のないこと。○張。誇張すること。○渾然。角又は「くぼみ」のないさま。

【釋義】處が、今、君が來て自分に面會したのだから。縱令君に才智才能がない平凡人であつても、自分は十分大きさに吹立てやうとするのだ。況して君の文章や行事は、祖先傳來の守りを失はず、些しも圭角がなく、正しくして濃厚であるものを。どうして推獎しないで好からうか。唯、惜しいことには、自分は微力で君に對してなんの手助けも出來ない上に、言ふ所も世間に信ぜられないことを。餘儀なく、其出發に方つて、先づ先づ一所に酒を飲んで、氣晴しをしようではないか。別に世間から醉郷の仲間ともされはすまい。

答李秀才書

韓文公

李師錫字は圖南、秀才の科目に擧げられた人。

愈白故友李觀元賓。十年之前。示愈別吳中故人詩六章。其首章則吾子也。盛有所稱引。

【字義】○李觀。字は元賓、太子校書郎と爲つた。年二十九歳で歿した。文章に工に、時人は「韓退之と優劣がない」と謂ひ合つた。○稱引。稱は譽めたてる、引は陳べることを。即ちほめたて陳べるの義。

【釋義】韓愈が申し上げます。亡友李觀字は元賓が、今から十年前に、自分に吳中で友人に別れた時の詩六篇を示したが、其最初のものは、貴君であつて、非常に貴君をほめ立ててあつた。

元賓行峻。潔清。其中狹隘。不能包容於尋常人。不肯苟有論說。因究其所以。於是知吾子非庸衆人。時吾子在吳中。其後愈出在外。無因緣相見。元賓既歿。其文益可貴重。思元賓而不見。見元賓之所與者。則如元賓焉。

【釋義】あの元賓は、行がきびしくおごそかに、且つ潔白で、胸中はせまくろしく、普通の人を包みいれることが出來ない性質で、苟且には人を論評せず、必ずそれだけの理由を研究して始て口に出すといふ様な堅實な人である。(それが口を極めて貴君を稱揚するから)それだから、貴君は平凡人でないのを知つて居た。時に貴君は吳中に居り、自分は他の地方に出て居たから、面會するに便宜がなく、唯、空しく想望するのみであつた。其後、元賓は死亡して其文章は益々貴重なものとなつた。如何に元賓を思つてもモウ面會は叶はないが、其平生交際して居た友人に面會すれば、元賓に對面するも同様と思つて、益々心に君を慕うて居た。

今者辱惠書及文章。觀其姓名。元賓之聲容。恍若相接。讀其文辭。見元賓之知人。交道之不甘。甚矣子之心。有似於吾元賓也。

【字義】 ○恍 ほのか。

【釋義】 處が、此度、御書面及び文章を頂戴いたしたが、貴君の姓名を觀ると、元賓の聲や容がほのかに現はれて、丁度面會して居る様な心地がする。又、貴君の文句を讀むと、(貴君の人物が高く)元賓が人を見抜く眼力があり、交際の方法は洵に清らかであつたことが領られた。實に實に不思議である。貴君の心が、吾親友の元賓に似て居るとは。

子之言以愈所爲不違孔子不以雕琢爲工。將相從於此。愈敢自愛其道。而以辭讓爲事乎。然愈之所志於古者。不惟其辭之好。好其道焉。爾讀吾子之辭。而得其所用心。將復有深於是者。與吾子樂之。況其外之文乎。愈頓首。

【字義】 ○雕琢 玉をみがきざむことより、詩文などを工夫して作り上げる義に用ゐる。

【釋義】 貴君の言に、「拙者の文章は、孔子の本旨に違はず、徒らに世間の人人の様に、文句を修飾しだして満足しないのが氣に入つたから、是から其主義に従つて學びたい」との事でありましたが、自分では決して自分の道を惜んで、辭退などを致しませうか、喜んでお傳へも致します。併し自分が古に志して居るのは、

唯、文辭を好むといふだけではなく、古の道を好んで居るのである。貴君の文章を讀んで、貴君の心の在る所がわかりましたが、文章以上に深い道といふ者がありますから、どうか貴君と斯道を樂みたいものです。況て外形の文章などは勿論のこととあります。愈頓首。

送許鄂州序

韓文公

許鄂州は、名は志雍字は仲輿といつた。鄂州の刺史であつたから、許鄂州といつたのである。是の時、于頔(第一卷の「與于襄陽書」とある)は此の人であるが、山南節度使であつて、鄂州は其屬邑であつた。

此の于頔は節度使と爲つて、人民から租税を徵收するのが如何にも苛酷であつたから、公は許を送る序文に於て、頔をも諷諫したものである。

愈嘗以書自通於公。累數百言。其大要言。先達之士得人而託之。則道德彰而名問流。後進之士得人而託之。則事業顯而爵位通。下有矜乎能。上有矜乎位。雖恆相求。而不相遇。于公不以其言爲不可復書。曰。足下之言是也。

【釋義】 自分は嘗て書面を差出して于公に致し、其文句は數百言も費した。其大意は、こうであつた。「先進の人が賢明の人士を得て之に信任すると、道德も彰れ名譽も残り、後進の士が先進の人を得て之に附託すると、事業も顯れ官位も得られる。それが下の人が自分の才能に矜り、上の人が爵位に矜つたりすると、上下お互

に求め合つても、到底相遇ふて成功することは覺束ない」と。于公は此言を不可とされず、返書に「お前の言ふことは尤である」といはれた。

于公身居方伯之尊。蓄不世之材。而能與卑鄙庸陋相應。答如影響。是非忠乎君而樂乎善。以國家之務爲己任者乎。愈雖不敢私其大恩。抑不可不謂之知己。恆矜而誦之情。已至而事不從。小人之所不爲也。故於使君之行。道刺史之事。以爲于公贈。

【字義】 ○方伯 十ヶ國の長官。此處では于公を指す。○使君 天子から四方の國國へ差遣はされる使者のこと。此處では許を指す。許は鄆州の刺史となつて赴任するのであるから、此の稱號を用ゐたのである。

【釋義】 あの于公は、身は一方の旗頭であつて、其上、めつたに世に出て來ない材能を持つて居りながら、よくも自分の鄙しい、才能の平凡な自分などと應答(手紙に返辭)されること、影の形に添ひ響の聲に應ずる様に迅速であるとは、是れ全く君に忠義で善道を樂み、國家の重任をば、全く自分一身に負擔されて居る爲でありませう。自分は于公から賜つた返事の大恩を私して、決して増長する譯ではありませんが、併し公をば知己と謂はればなりません。故に平常心に矜つて口で之を言つて居るのであります。于公に對する情だけが極點に達しておりながら、行爲が之に附随しないといふは、小人でも爲さない所でありませうから、使君の赴任に方りて、刺史の職務に就いて聊かながら陳述して、于公への贈りものと致さうと思ひます。

凡天下之事。成於自同而敗於自異。爲刺史者。常私於其民。不以實應乎府。爲觀察使者。恆急於其賦。不以情信乎州。由是刺史不安。其官觀察使不得其政。財已竭而歛不休。人已窮而賦愈急。其不爲盜也亦幸矣。

【字義】 ○自同 上下の情を通じ、其職を私せざるること。○自異 前者の反對。歛 あつめとること。

【釋義】 凡そ天下の事、上と下とが情を通じあひ、官吏は自ら其職分を私しないといふので成功をするが、之に反すると失敗する。地方牧民官の刺史が直支配の人民と共謀して私腹を肥やし、實際の状況を觀察使府に通ぜず觀察使も亦いつも其租税を取立ることが厳しく、實際の状況を聞取つて刺史の言を信じない。是だから州の刺史は安んじて其官に居ることが出來ず、觀察使に於ても、十分管轄内を治められず、人民の財力は缺乏しても聚め取るにやみ間なく、人民の困窮は極度に達しても取立ては愈々、厳しい。こんな次第では、人民どもは其地を逃亡して、他方面で盜賊とならないのが、寧ろ幸福と謂はればならぬ。

誠使刺史不私於其民。觀察使不急於其賦。刺史曰。吾州之民。天下之民也。惠不可以獨厚。觀察使亦曰。某州之民。天下之民也。歛不可以獨急。如是而政不均。令不行者。未之有也。

【字義】 ○觀察使 唐の世では諸道に觀察使を置き、軍隊のある所には節度使を置く。天下を分けて四十餘道と爲し、大なる者は十餘州、小なる者は二三州を統轄す。長官は其の直支配の州(道の首府)に私して支配

下の他の州を虐使する習慣があつた。

【釋義】 實際、州の長官たる刺史は其民に私せず、其上の道の長官たる觀察使は租税を嚴重に取立てないやうにし、刺史は「吾が管轄の州の人民は、天下の人民である。恩惠を唯、獨吾が州の人民許りに厚くしてはならぬ」といひ、觀察使も亦、「某州の人民は、某州丈の人民ではない、天下の人民である。聚め取ること唯、獨某州に許り厳しくしてはならぬ」といひ、斯様にして政が不公平であつたり、命令が行はれない者は昔からない筈である。

其前之言者。于公既已信而行之矣。今之言者。其有不信乎。縣之於州猶州之於府也。有以事乎上。有以臨乎下。同則成。異則敗者。皆然也。非使君之賢。其誰能信之。愈於使君。非燕遊一朝之好也。故其贈行不以頌而以規。

【釋義】 前言、即ち先進後進の説は、自分が上書した結果、于公はすでに信じて實行されて居る。それなれば今述べた自同自異の言に於ても、信ぜられないことがあらうか。一體、縣の州に於ける關係は、州の縣に於けると同様である。縣が上の州に事へ、州が下の縣に臨むに、自同なれば成功するが、自異だと失敗するは、皆同然である。こゝにいふことは、使君の様な賢明な方であれば、誰が自分の言ふことを信じて呉れませうぞ。自分は使君に對しての交誼は、酒筵の席で一度二度知合つて居るなどといふ淺い交りではありませぬ。故に御出發に際しての贈として、稱贊の言を以てせず、規誡の言を以てする次第であります。

贈崔復州序

韓文公

崔復州、名は羣字は敦詩、復州の刺史であつた。

有地數百里。趨走之吏。自長史司馬以下數十人。其祿足以仁其三族及其朋友故舊。樂乎心。則一境之人喜。不樂乎心。則一境之人懼。大丈夫官至刺史亦榮矣。

【字義】 ○趨走之吏 はしりまはる小吏。○長史 刺史の下に屬して雜務をつかさどる。○司馬 刺史の下にあつて兵事をつかさどる。○三族 父、母、妻の族。

【釋義】 土地を支配すること數百里（一里は四町餘）はしりまはる役人即ち長史又は司馬から以下數十人を使役し、其俸祿は父母妻の三族、又は朋友知人までも惠むことが出来る程を有し、心に樂むことがあると、管轄内の人まで皆嬉しく思ひ、心に樂まない、管轄内の人には皆懼れるといふ程の勢力を持つて居る。男と生れて官が刺史にまでなると、また光榮と謂はればならない。

雖然幽遠之小民。其足跡未嘗至城邑。苟有不得其所。能自直於鄉里之吏者。鮮矣。況能自辯於縣吏乎。能辯於縣吏者。鮮矣。況能自辯於刺史之庭乎。

【釋義】 さうはいふものの、其土地の最も邊鄙に住んで居る小百姓で、足は一度も城下へ往つたことのない

様な者共は、苟も自分に得心の出来ないことのある場合は、自身で村役場の小役人に向つてさへも陳辯請願が出来る者は極く少数である。況してこういふ連中が、自身縣吏に向つて陳辯するのをも、どうして縣吏に對して、どしどしと陳辯の出来る者は、澤山ある譯がない。それがもう一層縣吏より上位にある刺史の法廷に出頭して、自身陳辯するのだから、到底之が出来る筈がない。

由是刺史有所不聞。小民有所不宣。賦有常而民產無常。水旱癘疫之不期。民之豐約懸於州。縣令不以言。連帥不以信。民就窮而斂愈急。吾見刺史之難爲也。

【字義】 ○癘疫 癘は悪い氣、疫は流行病。○期 豫期しないこと。○連帥 觀察使を指す。

【釋義】 こんな理由であるから、刺史は民間の事情を聞かず、小百姓は自分の意見を陳述されない。租税は一定の賦課があり、民の産業は一定不變のものでない。其上水難旱害、惡氣時疫の豫期されないものもある。人民の貧富は州に重大な關係があるのに、縣令は民情を州の刺史に報告せず、觀察使は刺史の言を信じないといふ有様で、人民は日を逐ふて困窮しても、一向頓著なくどしどしと租税を取上るとなると、刺史は中間に立つて、仕事のやり悪いこと、推察に餘りある次第であります。

崔君爲復州。其連帥則于公。崔君之仁。足以蘇復人。于公之賢。足以庸崔君。有刺史之榮。而無其難爲者。將在於此乎。愈嘗辱于公之知。而舊游於崔君。慶復人將蒙其休澤也。於是乎言。

言。

【字義】 ○休澤 立派な恩澤。

【釋義】 崔君は現に復州の刺史であり、そしてその上に立つ觀察使は于公である。崔君の仁惠は復州の疲弊して居る人民を蘇息させるは請合ひであり。于公の賢明は、崔君を任用されるに相違ない。そうすると、刺史たる光榮はあるが、刺史たる困難は毛頭ないことは、崔君に於て始て獲られるであらう。自分は前年、于公の知遇を受け、そして古くから崔君と交際をして居るのである。將來、復州の人は崔君のお蔭で、すぐれた恩澤を受けやうとするが慶賀に堪へないから、そこで一言を述べ立てた次第であります。

讀李翱文

歐陽公

翱字は習之、唐の貞元十四年の進士。元和の初、國士博士、史館修撰などになつた。

予始讀復性書三篇。曰此中庸之義疏爾。智者識其性。當復中庸。愚者雖讀此不曉也。不作可焉。

【字義】 ○義疏 經書其他の書物の意味の注釋。

【釋義】 自分が始て李翱が著した『復性書』三篇を皆讀んだが、考へたのに「是はあの『中庸』の注釋に過ぎない

い者だ。知者は自己の本性を多少なりとも識つて居るから、之を研究するには中庸の本書を調べるが當然であり、又、愚人であるなら、こんなものを讀んだところで、到底了解が出来るものではないから、『復性書』などは作らなくても好い。寧ろ餘計な者を作つた」と。内心感服しなかつた。

又讀與韓侍郎薦賢書以謂翱特窮時憤世無薦己者故丁寧如此使其得志亦未必然以翱爲秦漢間好事行義之一豪雋亦善論人者也。

【字義】 ○韓侍郎 韓愈をいふ。侍郎の官職に居たことがあるからかくいふ。○豪雋 豪傑のこと。

【釋義】 又、『韓退之に與へて賢人を推薦する書』といふのを讀んで考へるに「翱は特別に困窮した時、誰も自分を推薦して呉れないのに憤慨して、其爲に此通り丁寧なのである。倘しも此の男が志を得たならば、ケ程迄には丁寧ではなからう」と。或る人は翱を評して「翱は丁度、秦漢の時代に事を好んで義侠的なことをした豪傑と同様の一人である」といつたのは、如何にも人を評論するに其當を得たものであると思つた。

最後讀幽懷賦然後置書而嘆不已復讀不自休恨翱不生於今不得與之交又恨予不得生翱時與翱上下其論也。

【字義】 ○幽懷賦 李翱の作つたもの。

【釋義】 最後に其作の『幽懷の賦』一篇を讀んで、感歎してやまなかつたから、そこで今一度讀返すと、仲仲

讀罷められない。洵に残念なことには、翱は現代に生れなかつた爲め、自分は之と交際が出来ず、又、自分が翱の時代に生れて、之と議論を仕合ふことが出来なかつたことを、くれぐれも遺憾千萬に思つた。

況廼翱一時有道而能文者莫若韓愈愈嘗有賦矣不過羨二鳥之光榮歎一飽之無時爾推是心使光榮而飽則不復云矣。

【字義】 ○羨二鳥——無時 韓文公時に遇はず、京師を去つて東に歸らうとし、潼關を出て黄河の沿岸に休息して居た時、白鳥と白鷗、鶴を籠に入れて通行する者があつた。それは其地の大官が此鳥を天子に進獻する者で、通行の人人は皆路を避け、目を側めて誰も正視しなかつた。そこで公は自身を比較して、鳥にも劣つて居る境遇を歎して賦を作つたことがある。此句は其中にある。

【釋義】 況して翱の同時代で、有道であり且つ文章に巧であつた人は、韓文公より外にはなかつた。その文公の作つた賦を見るに、「あの二鳥は洵に光榮であるが、翻つて自身を省ると、一度の食事も定つた時に満腹が出来ないのは、實に歎息の至りである」といふ位なものであつた。是の心を推究して見ると、文公が倘し光榮の身の上であり、そして飽食が出来たなら、満足して別に何も言はなかつたであらう。

若翱獨不然其賦曰衆囂囂而雜處兮咸歎老而嗟卑視予心之不然兮慮行道之猶非怪神堯以一旅取天下後世子孫不能以天下取河北以爲憂嗚呼使當時君子皆易嘆老嗟卑之

心爲翱所憂之心。則唐之天下豈有亂與亡哉。

【字義】 ○驚囂 多勢で騒ぐこと。○神堯 唐の高祖皇帝の諡號。○旅 五百人をいふ。

【釋義】 然るに翱などは、唯、獨そんなことには些しも頓著しなかつた。其賦に「人は皆ガヤガヤと騒いでガヤガヤと生活して居て、みんな老年となるのを歎息し、官位の卑いのを怨嗟するが、自分はそんなことは何とも思つて居ない。唯、心配なのは、道を行ふとしても、十分それが世に行はれないのを心配する許りだ」と。又、「あの唐の先祖たる高祖皇帝は、其初僅か五百人許りの兵で天下を取られたのに、其後世の子孫になると、天下の兵の力を動してすら、たつた河北一帯の地方すら取戻されないので（穆宗二年再び河朔を失ふを指す）心配だ」と云つて居る。さてさて、翱の同時代の君子達が、みんな老年を歎息したり官位の卑いのを嗟いたりして居た心を變更して、翱が心配して居た心を持つたならば、唐の天下は、どうしてあの様に擾亂又は滅亡などをしたりするであらうか。そんなことは決してなかつた筈である。

然翱幸不生今時。見今之事。則憂又甚矣。奈何今之人不憂也。余行天下。見人多矣。脫有一人能如翱憂者。又皆疎遠與翱無異。其餘光榮而飽者。一聞憂世之言。不以爲狂人。則以爲病子。不怒則笑之矣。嗚呼。在位而不肯自憂。又禁他人使皆不得憂。可歎也夫。

【字義】 ○病子 病人。

【釋義】 併し一方からいふと、翱は幸福にも現代に生れて來なかつたことである。倘し現代に生れて現代の腐敗混亂の状況を目撃したら、其憂は一層ひどかつたであらう。こんな状態であるのに、現代の人は、どうして心配もせず平氣であるか、自分では不思議でならない。自分は諸方を周遊して多數の人に面會したが、倘しも一人でも翱の憂ふる所と同様な點を憂へて居る者があると、矢張、のけものにされるのが翱と同様である。此外、光榮の身分を占め美食に飽いて居る者が、一度でも世を憂へる言を聞くと、其人を見做して狂人としなければ、病人と認め、立腹しなければ笑つて馬鹿にするといふ有様である。さてさて國家重要な位地に居ながら、自分が國家の事に就いて心配もせず、其上、他人迄をも差止めて心配させないやうにするとは、實に實に歎息至極のことである。

讀孟嘗君傳

王 荆 公

孟嘗君は、戰國時代齊の王族田文の號である。賢明で名聲が諸侯の間に高かつた。或る時、秦の昭王が孟嘗君を自國に招き寄せて對面したが、其賢明におそれて之を囚へて殺さうとした。そこで孟嘗君は人を王の寵姫の所にやつて、其盡力で助けて貰うとしたら、姫は「孟嘗君の所有して居る狐白裘を貰ひたい、そしたらどうか救つてあげやう」といつたが、是時すでに、狐白裘は王に獻上してしまつた後であつたから、どうすることも出來ず非常に當惑した。之を見て隨行の食客で、竊盜が上手なものがあつて、秦王の寶藏中に忍び込んで、盗み出したから、孟嘗君は之を姫に贈つて、約束通り、其の盡力で歸國を許された。孟嘗君は大急

ぎで、夜中に函谷關に辿り着いたが、關所の規則として、一番鶏が鳴かなければ、關所の通行は許さないことになつて居た。是時、其食客で鶏の擬聲の上手な者があつて、聲を張上げて鳴いたら、附近に飼はれて居る鶏が残らず鳴出して、遂に無事に關所の通行が出来、本國に歸つて來た。

一體、孟嘗君は食客を置くことを好んで、三千人の多數を收容して居たといふことであるが、こんなに多數の食客があつたのにも拘はらず、孟嘗君を佐けて大功を立てさせた者は一人もなく、孟嘗君を平凡に終はらせたのは、畢竟、君が人物を見抜く眼識がないからであるといふに論斷したものである。

王荊公、名は安石字は介甫、臨川の人、禮部侍郎から累進して吏部尙書に至り、舒國公に封ぜられ、後、改めて荊に封ぜられた。哲宗が即位されて、司空の官を加へられ、卒して太傅を贈られ、諡を文と賜はつた。公は唐宋八家の一に數へられる文豪であり、且つ新法を制定して名高かつた。公の新法は、惜しいことには失敗に終つたが、是は環境の状況と時世とが、失敗させたもので、之を以て公を奸物視したりするのは、餘り殘酷に失する。公は依然に大經世家であり、又、大文豪である。

世皆稱孟嘗君能得士。士以故歸之。而卒賴其力。以脫於虎豹之秦。

【釋義】 世人は皆稱賛して、「あの孟嘗君は能くも賢良の士を取り得たものである。君が士を待遇する方法が宜しきになつて居たから、士は四方から君の家に集り來て、結局、此の士の盡力によつて、あの虎豹にもたとへられる暴戾な秦の毒手を逃れた」といつて居る。

嗟呼孟嘗君。特雞鳴狗盜之雄耳。豈足以言得士不然。擅齊之強。得一士焉。宜可以南面而制秦。尙何取雞狗盜之力哉。

【釋義】 さてさて、自分から評論させるなら、孟嘗君は、ただかとり鶏の鳴聲を真似たり、竊盜の頭分位なものである、どうして賢士を得たなどと稱賛する價値があらうか。それでなければ、孟嘗君の位地は、齊の公族であり、齊は列國中の強大なものである。此の齊國の強大を勝手に振舞う身分であるから、一人の賢士を得ただけでも、南面して王位について秦をおさへつけることも出来る筈である。どうして鶏鳴狗盜などの盡力を待つことがあらうか。

雞鳴狗盜之出其門。此士之所以不至也。

【釋義】 鶏鳴狗盜などの末輩が、其門下から出るといふは、とりもなほさず賢士が來なかつた譯である。

卷六 種字集

小心文

此集才學識三高議論關世教古之立言不朽者如是夫葉水心曰文章不足關世教雖工無益也人能熟此集學進識進而才亦進矣

【字義】不朽 左傳襄公二十四年の三不朽に出づ。立德・立功・立言の三は永久に存在して朽ちないといふことあり。此集に載せてある所は、才智、學問、見識の三つが高く、其の論ずる所は、世の教化に關係があるもので、古人も言つた通り、「言論が千古朽ちない」とは、こゝにいふものを指すのであらう。葉適（水心と號す）がいふに「文章は世の教に關係しないやうな者は、如何に工妙でも、何の役にも立たない」と。洵に至當の議論である。初學者果して此集に熟したなら、學問も進歩し見識も進歩し、才智も亦進歩すであらう。

前出師表

諸葛武侯

諸葛武侯名は亮、字は孔明、琅邪陽都の人。後漢の末、羣雄の崛起せし時、劉備を輔佐して、三國鼎立の謀を立て、國を蜀漢と號して、専ら吳と連合し、魏を滅ぼして後、吳を并合し、最後に天下を一統しやうと計畫し、専心忠節を盡した。劉備即ち昭烈帝が崩後は、後主に事へて益、輔翼の任を盡したが、其出征中、五

丈原で死んだ。年五十四。忠武侯と諡せられた。

此表は、後主の建興五年に、侯が魏を征伐に出發の時、後主に上つたものである。

臣亮言先帝創業未半而中道崩殂今天下三分益州疲弊此誠危急存亡之秋也然侍衛之臣不懈於内忠志之士忘身於外者蓋追先帝之殊遇欲報之於陛下也

【字義】○崩殂 崩御といふに同じ。○三分 蜀、魏（曹丕）吳（孫權）の三國に分裂したこと。○益州 蜀漢の都の所在地。今の四川、成都府。

【釋義】臣亮が申し上げます。先帝陛下が漢室復興の御創業が、まだ半途にもならない中に、中頃崩御ましまし、其結果、現今では天下に三つに分裂し、蜀漢、魏、吳となり、各地に鼎足の形を致して居りますが、此三國の中で、御國はとりわけ疲れ衰へて居りまして、誠にあぶなく存亡にも關する重大の時期であります。それにも拘はらず侍衛の臣下は、内、宮中にて一點も懈怠の心を起さず、忠義の士は、一身を、外、國境に忘れて働いて居りますが、其の理由は外でもありません、全く先帝陛下が特殊の待遇をお與へ下さつた其御恩に感泣して、せめて之を陛下に報い奉らうと致して居る次第でございます。

誠宜開張聖聽以光先帝遺德恢志士之氣不宜妄自菲薄引喻失義以塞忠諫之路也宮中府中俱爲一體陟罰臧否不宜異同若有作姦犯科及爲忠善者宜付有司論其刑賞以昭

板 大モクヒロメル

陛下平明之治。不宜偏私使内外異法也。

【字義】 ○開張聖聽 天子のお聞きをひろめる。○光先帝遺德云々 一本に遇の上に殊の字、恢の下に弘の字あり。○菲薄 うすくすること。○陟罰 昇進させると罰を與へると。○臧否 善きと悪しきと。○有司 役人。

【釋義】 斯様の次第故、陛下に於かせられても、御耳をお立てになり、善言は之を御採用あつて、先帝陛下の御遺徳をいやが上にもお輝しになり、忠義の志を懐いて居る臣下の氣分を御引立の程を願はしう存じます。決して御自身で輕輕しく薄つべらのお考で、つまらない説を引いて、大義のある所を忘却し、折角忠義の志で諫言申上げる路をお立切になるなどのことはない様に願はしう存じます。宮中と外廷とは、同體でありますから、善き者は昇進させ、悪しき者は處罰して、宮中の奉仕の者だから、大目に見る、外廷の臣下だからどしどし處罰するなどといふ、偏頗な御處置があつてはなりません。倘しも惡事をしたり、法規を犯したり、又は忠節善行がある者などは、それぞれ擔當者に引渡して、刑すべきは之を刑し、賞すべきは之を賞し、そして陛下が如何にも正平公明の御政治の有様を、一般にお示しが願いたく、決して不公平の御處置などがあつて、宮中外廷の間に法の相違がある様な事があつてはなりません。

侍中侍郎郭攸之費禕董允等此皆良實志慮忠純是以先帝簡拔以遺陛下愚以為宮中之事無大小悉以咨之然後施行必能裨補闕漏有所廣益將軍向寵性行淑均曉暢軍事試

用於昔日先帝稱之曰能是以衆議舉寵以為督愚以為營中之事無大小悉以諮之必能使行軍和穆優劣得所也。

【字義】 ○侍中 禁中に在つて天子の左右に侍り、詔勅等の當否を調へる官。○侍郎 宮門を守り、行幸の時扈從する官。後代では各省の次官。○忠純 忠實純粹。○簡拔 えらびぬく。○闕漏 缺點、手ぬかり。○淑均 善良公平。○曉暢 さとり通ずる。

【釋義】 侍中の郭攸之、費禕、侍郎の董允などは、いづれも善良篤實に、其志慮即ちかんがへる所は忠節純粹で、君國の事許りを考へてゐるものでござります。その故に先帝陛下に於かせられては、多數の御臣下の中から、おえらびおぬき出しになつて陛下にお遺しになつた次第故、臣が考へますに、宮中に於ける一切の事柄は、大小に論なく、残らず此三人に御諮詢に相成つた上に、御實行遊ばされたら、必ず缺點又は手ぬかりを補つて、御利益になることと存じます。又、將軍の向寵は、性質善良に、行狀は公平に、其上に軍隊全般の事にさとり通じて居り、現に前年實地で試験濟の人物でございまして、先帝陛下も御稱賛あつて、才能のすぐれたものだとの仰がございました。こゝにいふことから衆議の上、寵を推薦して都督と致した次第。臣が考へますに凡そ軍隊一般の事柄は、大小に論なく、残らず之に御諮詢相成つたら、此者は必ず軍隊行伍を和睦させ、優者劣者はそれ相當の位地に据附けて、偏頗不公平の處置などのないやうに致しませう。

親賢臣遠小人此先漢所以興隆也親小人遠賢臣此後漢所以傾頽也先帝在時每與臣論

此事未嘗不嘆息痛恨於桓靈也。侍中尙書長史參軍。此悉貞亮死節之臣也。願陛下親之信之。則漢室之隆。可計日而待也。

【字義】 ○先漢 高祖劉邦から十三世、孺子嬰まで二百十四年で、王莽の爲に滅ぼさる。○後漢 光武皇帝劉秀から十二世、獻帝まで二百九十六年で、曹丕に篡はれた。○桓靈 十代桓帝、十一代靈帝をいふ。

【釋義】 賢臣を親しみ用ゐて小人を遠けたのは、先漢が隆盛に越いたわけ、小人を親しみ用ゐて賢臣を遠けたのは、後漢が衰微に越いたわけでございます。先帝御在世中、いつも臣と、この前後漢の盛んになり衰へた事をお話しになつて、あの桓帝、靈帝の二帝が今些し賢明であつたら、あの様にもろくも滅亡を招かなかつたであらうと、御嘆息御痛恨遊ばされたいことはございませんでした。唯今侍中尙書の陳震、長史參軍の蔣琬は、いづれも貞節で真心のある者共でございますから、どうか陛下は此二人をお親しみ御信任あるやうに願ひまする次第で、倘し左様に相成ますと、漢の皇室の復興隆盛となるのは、短期日の中に待つことが出来まする。

臣本布衣躬耕於南陽。苟全性命於亂世。不求聞達於諸侯。先帝不以臣卑鄙。猥自枉屈。三顧臣於草廬之中。諮臣以當世之事。由是感激。遂許先帝。以馳驅。後值傾覆。受任於敗軍之際。奉命於危難之間。爾來二十有一年矣。先帝知臣謹慎。故臨崩寄臣以大事也。

【字義】 ○全 性命を亂世に全くして、之を失つたりしない。○傾覆 敗北の事をいふ。○大事 賊を伐つこと。即ち魏の曹丕をいふ。

【釋義】 臣は本来一箇微賤の布衣で、自身で南陽に耕作し、自己の身命を、此の亂れに亂れた世の中に、之を失はないやうにと存じ、名前の聞えたり、立身出世などを、當時の大名に向つて求めもせず、専心耕作に許り従事致して居りました。處が先帝陛下は、臣の様な微賤な者に御頓著なく、尊い御身分をお届けになつて、三度までも臣を隆中の草の廬のあばら家に御光來を辱うし、臣に御諮問になつたのには現今の世に處する方法を以てせられました。斯様の御殊遇に感激致し、從來田園生活に一生を送らうと決心致して居りました。心を翻へし、とうとう先帝陛下に對しまつりて、戰場に馳驅往來致すことを以てしました。其後味方の敗北に遭ひ、吳と同盟の大任を敗軍の舉句に承はり、命令を危難の間に奉じて微力を盡したことがございまして、あれから今日まで、指を擧めて數へて見ますると、最早二十一年の歳月を経過致して居ります。先帝陛下は、臣が洵に謹み深い者であると御見抜きになつた爲め、崩御の間に、臣に御委託になつたのに、賊を滅ぼして天下を一統する重大な任務を以てせられました。

受命以來。夙夜憂歎。恐付託不效。以傷先帝之明。故五月渡瀘。深入不毛。今南方已定。甲兵已足。當獎帥三軍。北定中原。庶竭駑鈍。攘除姦凶。興復漢室。還于舊都。此臣之所以報先帝而忠陛下之職分也。

【字義】○瀘 川の名。四川省と雲南省の間にある。○不毛 小石交りの土地で、五穀の出来ないところをいふ。○姦凶 魏の曹丕を指す。

【釋義】 御命令を承つてこのかた、朝から夜まで心配に心配を重ね、かく重大な御委託に對して、臣が愚鈍の爲め實效をあらはされず、先帝陛下のお眼鏡に傷つけまつてはならないと、そのみを氣に掛けて居た次第でございます。こゝにいふ譯でございますから、五月の炎暑にも拘らず、雲南附近の瀘水を渡つて、更に深く深く五穀も生じない土地にまで這入つて、其地方を平げました。今や南部地方は最早や平定致し、兵器も十分整ひましたら、此上は軍隊を引率して、北方中央の土地、即ち魏の曹丕の都を進撃致さればなりませぬ。どうも駕馬の様な鈍才であります、全力を竭して姦賊の曹丕を撲ひ除いて、漢室を昔通りの隆盛な者に致し、漢の建てて居た長安の舊都に遷都する様に致したい存念でございます。此れが臣が先帝陛下の鴻恩に報い奉り、又、陛下に對しまつり忠義なる所の職分でございます。

至斟酌損益進盡忠言則攸之樟允之任也願陛下託臣以討賊興復之效不效則治臣之罪以告先帝之靈若無興德之言則責攸之樟允之咎以彰其慢陛下亦宜自謀以咨諏善道察納雅言深追先帝遺詔臣不勝受恩感激今當遠離臨表涕泣不知所云

【字義】 ○咨諏 はかりとうこと。○雅言 正しい言。

【釋義】 倘しも利益不利益を酌み量つて、忠義の諫言を申し上げることは、攸之、樟、允等の任務でございますから、どうか陛下に於かゞりては、臣にお任せあるのに賊を討ちて漢室を復興する實效を以てせられんことを。そして實效を立てられない場合に、何卒臣の罪をおただしになつて、先帝の御靈にお告げを願ひます。又、倘し陛下に對してお徳を進めまつる諫言を申さなければ、攸之、樟、允等の罪をお責めになつて、職務に怠慢なことを明かになされんことを願ひます。又、陛下に於かゞりても、御自身善く善く御熟考あつて、善良な方法を臣下に御諮詢あり、臣下の申上る言葉の中で、正しい言を御採用あつて、先帝陛下の御遺詔をお守りあらんことを希望致します次第でございます。臣は御鴻恩を受けて感激に堪へません。今日遠くお別れ致さればなりません、此上表を認めるに方りて、涙が流れて流れて、何と申して宜しいやら分りません。

【參考】 此篇は改めて言ふまでもなく、今古有名の文章であつて、其忠誠懇篤の氣、全く肺腑中から流れ出て居る。安子順が評して「讀諸葛孔明出師表而不墮淚者其人必不忠。讀李令伯陳情表而不墮淚者其人必不孝。讀韓文祭二十二郎文而不墮淚者其人必不友」と謂つて居るのを見ても、如何に是文の定評があるかが分るであらう。

送浮屠文暢師序

韓文公

浮屠は梵語の音譯で、或は佛陀、母駄、没陀ともいひ、漢譯して覺者、即ち無常を觀破し、眞理に到着せし

人の義である。浮屠文暢師といへば、僧文暢法師といふこと。

人固有^{ヨリ}儒^ニ名^ヲ而^{シテ}墨^ニ行^{ハス}者^ハ問^ハ其^ノ名^ト則^{シテ}是^レ校^ス其^ノ行^ハ則^{シテ}非^キ可^キ以^テ與^フ之^ノ遊^ス乎^カ。如^ク有^ル墨^ノ名^ニ而^{シテ}儒^ノ行^ハ者^ハ問^ハ其^ノ名^ト則^{シテ}非^キ校^ス其^ノ行^ハ則^{シテ}是^レ可^キ以^テ與^フ之^ノ遊^ス乎^カ。揚子雲稱^ス在^リ門^ノ牆^ニ則^{シテ}塵^ニ之^ノ在^リ夷^ノ狄^ニ則^{シテ}進^ム之^ノ吾^レ取^リ以^テ爲^ス法^ト焉[。]

【字義】 ○墨行 墨翟の行ひをいふ。墨子は度度前にいつた通り、兼愛説を唱へた人。○揚子雲 漢の揚雄

字は子雲、『揚子法言』を著はした。其中の修身篇に在門牆云云の語が載つて居る。

【釋義】 人には表面儒者と見せかけて、内實は墨子の行爲をして居る者がある。其名義丈けは洵に好いが、其行爲を調べると甚だ宜しくない。こんな人とは交際すべきであらうか、固より交際するは宜しくない。又、墨子を學んで居るといふ名義でありながら、儒者の行爲をして居る者がある。其名義丈けでは洵によろしくないが、其行爲を調べると洵に宜しい。こんな人と交際すべきであらうか。固より交際して義支へない。是に就いて揚子雲が「孔子の門や牆に迄來て居りながら、邪道を行ふ者は追ひ拂ひ夷狄で道を知らない者は引入れて教へて遣る」といつて居るが、洵に尤な言と思つから、自分は此言を以て交際法とするのである。

浮屠文暢喜文章。其周遊天下。凡有行必請於縉紳先生。以求詠調其所志。貞元十九年春。將行東南。柳君宗元爲之請解其裝。得所得叙詩累百餘篇。非至篤好。其何能致多如是耶。惜其

無以聖人之道告之者而徒舉浮屠之說贈焉。

【字義】 ○縉紳先生 士大夫と謂ふほどの人。

【釋義】 僧の文暢は文章がすきて、諸國をめぐり歩いて、到る處で必ず其土地の士大夫に頼んで、各自の志して居る所を、詩文に書いて貰ふことをするのであつた。貞元十九年の春。此度は東南地方に行かうとした時、友人の柳宗元が、自分にも何か書いて遣つて呉れとの請求であつた。そこで其行李をあけて見たら、人から書いて貰つた敘文とか、又は詩篇とかが百篇あまりもあつた。師が非常に篤志でなければ、どうして斯様に澤山を集めることが此通りにならうか。併し、多數の人人は、聖人の道を告げ示さずに、徒に佛教の教義を持出して書いてやつて居るのが、洵に心外でならない。

夫文暢浮屠也。如欲聞浮屠之說。當自就其師而問之。何故謁吾徒而來請也。彼見吾君臣父子之懿。文物禮樂之盛。其心有慕焉。拘其法而未能入。故樂聞其說。而請之。如吾徒者。宜當告之以二帝三王之道。日月星辰之所以行。天地之所以著。鬼神之所以幽。人物之所以蕃。江河之所以流。不當又爲浮屠之說。而瀆告之也。

【字義】 ○懿 すぐれて。美なること。○瀆告 相手の知つて居ることを更に告げる。

【釋義】 夫れ文暢師は僧侶である。倘し佛教の教義を聞きたいなら、自身で自分の師匠に就いて聞くのが當

然である。何の理由で吾吾孔子の道を修めて居る仲間と面會して、わざわざ来て聞く必要があらうか。自分の想像では、彼れ文暢師は、吾が儒教の君臣父子の閒柄の如何にも美しく、一國の文明を進歩させる制度法律などの文物、又は禮儀音樂などの盛んなを見て、心の中に慕はしくは思うが、佛法に拘泥して、まだ思切つて儒教に入ることが出来ないものであらう。故に儒教の説を些しても聞きたいと思つて、我等の仲間に向つて、かく詩文の贈言を求めに相違ない。それであるから、吾徒たる者は、文暢師に告げるに、堯舜の二帝や禹・湯・文武(文王武王を合せて一王とする)の三王の道、日月星辰の運行の理、天地の著明なるわけ、鬼神のおくふかく妙なるわけ、人類が斯様に多數あるわけ、揚子江黄河などの晝夜間斷なく流れるわけなどを説明して遣るのが當然であつて、何もわざわざ佛敎の教義に就いて演し告げることをする必要があらうか。

民之初生。固若禽獸。夷狄然。有聖人者。立然後知宮居而粒食。親而尊尊。生者養而死者藏。是故道莫大乎仁義。教莫正乎禮樂。刑政施之於天下。萬物得其宜。措之於其躬。體安而氣平。

【字義】 ○刑政 刑罰。

【釋義】 人類が初めて生れ出て来た時は禽獸だの夷狄だのと、些しの相違がなかつた。それが聖人と名のつく人が出て、始て家屋に住居し五穀を食し、親子相親しみ、長者を尊敬し、生きて居る者は相互に扶養し、死ぬると埋葬することを知つたのである。是の故に、道にも種種あるが、仁と義の大道ほど大なる者はなく、教は禮義、音樂、刑罰などより正しいものはなく、之を天下に施しては、萬物皆其宜しきを得、之を一身に

備へると、身體は安らかに氣分は和むになる。

堯以是傳之舜。舜以是傳之禹。禹以是傳之湯。湯以是傳之文武。文武以是傳之周公孔子。書之於冊。中國之人世守之。今浮屠者孰爲而孰傳之耶。

【釋義】 是の大なる道の傳統をいふと、堯は之を舜に傳へ、舜は之を禹に傳へ、禹は之を湯に傳へ、湯は之を文王武王に傳へ、文王武王は之を周公孔子に傳へたのである。そして之を書物に記載して中國の人は代之を守つて来て居る。然るに此佛敎といふ者は、一體、誰れが之を始めて誰れが之を傳へて来たか。全く夷狄の人が唱導したもので、どうしても異端邪説と謂はねばならない。

夫鳥俛而啄。仰而四顧。夫獸深居而簡出。懼物之爲己害也。猶且不免焉。弱之肉強之食。今吾與文暢安居而暇食。優游以生死。與禽獸異者。寧可不知其所自耶。

【字義】 ○簡出 時折り外へ出る。

【釋義】 先づあの禽獸を見るが好い。鳥は俯して食物を食ひながら、始終首をあげて四方を見て、自身に危害を與へる者を豫防し、獸類は穴の中に深くかくれ住んで居て、時時でなければ外へは出ない。是は皆外敵が自分を害するのを懼れるからである。こんなに警戒しても猶ほ危害は免れず、弱者の肉は強者の餌食となるのだ。然るに今日、自分等は文暢師と安らかに生活しゆつくり食事をし、太平無事に一生を送つて、禽獸

などの様に警戒許りして居るのと相違があるといふに就いては、どうして其の自り來つた所、即ち聖人が教養して呉れたお蔭であることを知らないで好いであらうか。

夫不知者非其人之罪也。知而不爲者惑也。悦乎故不能即乎新者溺也。知而不以告之者不仁也。告而不以實者不信也。余既重柳請。又嘉浮屠能喜文辭。於是乎言。

【釋義】 夫れ聖賢の道を知らないといふは、其人の罪ではない。が、一旦知つてから之を行はないのは惑つて居ることの甚しいものである。古くから信じて居る佛教許りを悦んで、新たに聞いた聖人の道に赴くことが出来ないのは、水に溺れて浮み上げれない様な者である。自分は聖人の道を知つて居りながら、彼は僧侶だからとして告げ教へてやらないのは、不仁の所爲であり、告げても信實の事を告げないのは、不信の行爲である。自分は柳宗元の依頼をおろそかにせず、又、師が能く文章を喜まれるのを感心した擧句、そこで斯様な言を申述べる次第である。

柳子厚墓誌銘

韓文公

墓誌とは、其人の傳記を記載して墓中に瘞める者をいひ、銘とは、其人の功業を稱賛した者の稱。

柳宗元は古今の大文豪であり、韓文公は之に凌駕する程の大巨筆であつたことは、一般周知の事である。此の巨筆で此の大文豪を銘したのであるから、文公の墓誌として第一位たるに論なく、古今の墓誌としても、

之に優越したものはないといつて差支へない。

子厚諱宗元。七世祖慶爲拓跋魏侍中。封濟陰公。曾伯祖爽爲唐宰相。與褚遂良、韓瑗俱得罪。武后死。高宗朝。皇考諱鎮。以事母棄太常博士。求爲縣令。江南其後以不能媚權貴失御史。權貴人死。乃復拜侍御史。號爲剛直。所與游皆當世名人。

【卓義】 ○拓跋魏 北魏の拓跋氏。○武后 則天武氏。唐の高宗の皇后であつたが、高宗の崩後、自立して女帝と爲つた。○皇考 なくなつた父を尊んでいふ。○權貴 權門貴戚をいふ。此處にては當時の權官宰相實參を指す。

【釋義】 子厚諱は宗元、七世の先祖の慶は北魏拓跋氏に仕へて侍中と爲り、濟陰公に封ぜられた。曾祖父の兄爽は唐の宰相と爲つて、褚遂良、韓瑗などと、則天武后の怒に觸れて、高宗皇帝の時代に死んだ。子厚の父親は鎮といつて、孝心の篤い人で、母に孝養する必要上、帝都で太常博士といふ官であつたものを、わざ／＼江南地方の縣令になることを願つて、其地方へ往つた。處が、母の死んだ後、都へ歸つて朝廷に仕へ居たが、當時の權官に媚び諂はうことが出来なかつた爲め、侍御史の職を失つたが、其人が死んでから、ふたたび侍御史を拜命した。剛毅正直との評判が高く、交際する人人は、いづれも皆當代世に名ある人許りであつた。

子厚少精敏。無不通達。逮其父時。雖少年已自成人。能取進士第。嶄然見頭角。衆謂柳氏有子。

む真執ヲ執誠みる君子は自文によらねん

文章軌範新釋卷六 柳子厚墓誌銘

二九四

矣。其後以博學宏辭授集賢殿正字。僞傑廉悍議論證據古今。出入經史百子。踔厲風發。率常屈其座人。名聲大振。一時皆慕與之交。諸公要人爭欲令出我門下。交口薦譽之。

【字義】 ○精敏 事物の道理にくはしく、才氣敏捷のこと。 ○通達 物事を明かに心得て居ること。 ○成人 一人前の人。 ○嶄然 高くぬきんでて時つさま。 ○僞傑 すぐれて秀でて居る。 ○廉悍 ひどく強い。 ○踔厲風發 踔厲は高遠なり、議論が人にすぐれてするどく、風のやうに勢よく口から出ること。 ○要人 要路にあたる人。

【釋義】 子厚は少年の頃から道理に精しく、才氣敏捷で、何事も明かに心得て居ないものはなかつた。其父親の存生中は、まだ少年であつたが、すでに一人前以上の有様で、進士の試験にも及第し、高くもぬけて、衆人に超越し居たから、皆が「柳氏には善い子がある」と稱賛して措かなかつた。其後、博學宏辭科といふ試験に及第した擧句、集賢殿正字といふ官を授けられた。人物がすぐれ秀でて居り、氣象がひどく強く、議論する時などは、今代はいふに及ばず、古代の事も證據に引出して、其上、經書歴史などを引用し、其論鋒の鋭いこと風の吹捲くやうで、大概、一座の人人を屈服させてしまふのであつた。こゝにいふ人物だから、名聲は非常に高く、當時の人人は、皆子厚を慕ひ交はり、殊に公卿を初め、要路に居る大官は、自分の門下から出世させやうとして、銘銘が之を推薦したり譽立てたりした。

貞元十九年。由藍田尉拜監察御史。順宗即位。拜禮部員外郎。遇川事者得罪。例出爲刺史。

294 → 299
破つておる

欠

欠

P6

位者推挽故卒死於窮裔材不爲世用道不行於時也使子厚在臺省時自持其身已能如司馬刺史時亦不斥斥時有人力能舉之且必復用不窮然子厚斥不久窮不極雖有出於人其文學辭章必不能自力以致必傳於後世如今無疑也雖使子厚得所願爲將相於一時以彼易此孰得孰失必有能辨之者

【字義】 ○願藉 かりかへり見て惜む。○推挽 後から推したり、前から引張る。○窮裔 邊鄙の土地。○臺省 御史臺、禮部省。

【釋義】 子厚は前方少年の時、人の爲にすることにのみ勇んで、自身に對しては、自重したり又はふりかへつて自身の損得利害を顧なかつた。そして平生「功績事業は、左程骨の折れる者ではない。やらうと思へば何時でも出来る」と考へて居た。こんな譯であつたから、王叔文等に連座して廢退されたので、残念千萬と謂はねばならない。又、退けられた時、知合つた人で、氣概があり勢力がある者が、誰一人後から推したり前から挽く者もなかつたから、とうとうあんな邊鄙な柳州などといふ土地で死んでしまひ、(柳子厚は柳州の刺史で終つた)折角、世に稀れた材能を持ちながら、それが世の用ともならず、道は當時に行はれなかつたのは、返す返すも残念なことであつた。倘しも子厚が御史臺で監察御史、禮部省で禮部員外郎を勤務して居た時から、自身で自分を大切に扱ふことが、貶謫されて永州の司馬となつたり、柳州の刺史であつた時の様であつたら、斥けられることはなかつたらう、又、斥けられても勢力のあつた人が引上げてくれたら、必

すふたたび用ゐられて、あんなに困窮などはしなかつたであらう。どの方面から見ても、痛歎の至りに堪へない次第である。併し、一方からいふと、子厚が斥けられることが永くなく、困窮することが極點に達しなかつたなら、如何に萬人に超越した人とはいへ、子厚の文學文章などは、必ず此上努力して後世にまで傳はることは、今から保證の出来るといふ程のあの立派なものになれなかつたであらう。そうすると、倘し子厚が志願通り、一時、大將大臣になつたとて、あの高位高官(彼)をこの不朽の文名(此)と交換するといふは、どちらが利益か、どちらが不利益かは、更めていふまでもなく、必ず之を辨別するものがあるに相違ない。(無論文名の方が重い)

子厚以元和十四年十一月八日卒。年四十七。以十五年七月十日歸葬萬年先人墓側。子厚有子男二人。長曰周六。始四歲。季曰周七。子厚卒。乃生。女子二人。皆幼。其得歸葬也。費皆出。觀察使河東裴君行立。有節槩。重然諾。與子厚結交。子厚亦爲之盡。竟賴其力。葬子厚於萬年之墓者。舅弟盧遵。遵。涿人。性謹順。學問不厭。自子厚之斥。遵從而家焉。逮其死。不去。既往葬。子厚又將經紀其家。庶幾有始終者。銘曰。

【字義】 ○節槩 節操氣概。 ○舅弟 舅は母の兄弟、舅弟は即ち母方の叔父の子(従兄弟)なり。舅弟を叔父とするは誤なり。 ○經紀 一家のくらしの方法をつける。

【釋義】 子厚は元和十四年、十一月八日に死んだ。年は四十七歳であつた。翌年七月十日に、故郷の萬年縣の亡くなつた父親の墓の側に、持歸つて葬つた。子厚に男子が二人あつて、長男を周六といひ、四歳になつた許り、季の子が周七といつて、子厚が死んでから生れた。外に女子が二人あつたが、いづれも皆幼少である。遺骸を郷里へ持歸つて葬むることが出来たのは、費用は一切觀察使で河東の人裴行立君から出たのだ。此の行立といふ人は節操氣概がすぐれて居り、一旦、うけあつたら何處迄もやりとほすといふ人物で、子厚とは深く交際を結んで居た。子厚も生前には此人の爲に盡力したこともあつた。こんな譯で結局此人の世話によつて葬送が出来た。それから、子厚の遺骸を萬年縣の先代の墓迄運んだのは、母方の叔父の子の盧遵といふ者で、この遵は涿の人で、性質が謹慎温順であり、學問をして倦むことを知らないといふ人である。子厚が地方へ貶謫されてから、遵は附き隨つて其所に住んで、子厚が死ぬるまで引拂はなかつた。さて子厚の遺骸を郷里に葬送し、又、引還つて子厚の家の遺族に對して、生活の方法をつけやうとして居る。この人こそ眞に始もあり終もある人と謂つて好い。(世間の輕薄兒とは比べものにならない)銘は

是惟子厚之室。既固既安。以利其後人。

【字義】 ○室 墓のこと。

【釋義】 是は外でない柳子厚の墓である。生前は種種の迫害を受けたが、此様に安全に、出来て居るから、此内で永久に眠つて、どうか後世子孫に福利を與へられたい。

大唐中興頌序

元次山

大唐中興とは、玄宗皇帝の時、安祿山、史思明の叛亂があつて、天子は蜀に蒙塵せられ、一時、唐の社稷は危殆に瀕した。肅宗皇帝即位の後、始て洛陽、長安の二京を克復し、此亂を平定し、國基再び鞏固と爲つたことをいふ。頌とは、功徳を贊嘆したもの名。

元次山、名は結、次山は其字である。道州刺史と爲つた時、仁惠の政治を施したから、人民は石を立てて其徳を頌したといふ。卒して禮部侍郎を贈られた。

天寶十四年安祿山陷洛陽明年陷長安天子幸蜀太子即位於靈武明年皇帝移軍鳳翔其年復兩京上皇還京師於戲前代帝王有盛德大業者必見於歌頌若今歌頌大業刻之金石非老於文學其誰宜爲

【釋義】 天寶十四年に、安祿山が叛して洛陽を陥落し、翌年には更に長安を攻落した。そこで玄宗皇帝は蜀に蒙塵され、太子は靈武(地名)で即位された。是が肅宗皇帝である。翌年肅宗皇帝は鳳翔地方に軍隊を移され、其年に洛陽、長安の兩京を恢復し、太上皇即ち玄宗皇帝は、蜀から長安に還幸された。

さてさて、前代の帝王で、何が盛徳大業があると、必ず歌頌に見はして之を稱贊するのである。今日、この克復の大業を歌つて、それを鐘や石に刻すといふは、餘程文學に老れた者でなければ、誰れがそれをやれやうか。到底覺束ない。

【參考】 此篇は中興頌の序文であつて、所謂「頌」は別に在るのだ。其頌を唐の顏真卿が書いて、之を永州の磨崖石に刻した。有名な「磨崖碑」といふは、即ち是である。(磨崖とは、浯溪の崖石を磨いたものといふこと)

書箕子廟碑陰

柳 柳 州

箕子は名は胥餘といつたが、箕といふ土地に領地があつたから、一般に之を箕子といつた。殷の紂王の諸父で、庶兄といふ説は誤である。とも角殷の王族である。紂王の暴逆無道が極點に達した時、箕子は屢之を諫めたが、聽かれなかつた。そこで狂人の眞似をして市に隠れ、琴を弾じて悲哀の情を寄せて居た。周の武王が殷を滅ぼした後、箕子を捜し出し、朝鮮に封じた。

凡大人之道有三。一曰正蒙難。二曰法授聖。三曰化及民。殷有仁人曰箕子。實具茲道。以立於世。故孔子述六經之旨。尤殷勤焉。

【字義】 ○大人 ここでは聖人のこと。○蒙 艱難をふりかぶる。○六經 詩、書、易、禮、樂、春秋をいふ。

【釋義】 凡そ聖人のやり方に三様ある。一には正しい道を守つて、どんな大難でも、ふりかぶつて進むこと。二には天下の大法を定めて、次に出て来る聖人に授けてやること。三には教化の力が、一般の人民に及ぶこ

とである。殷の時代に仁人があつて箕子といつた。正しく此三つの道を一身に兼ね具へて世に立つた。故に孔子が、詩、書、易、禮、樂、春秋等の主旨を述べ立てられた時、特別に箕子の事に就いては、鄭寧懇切に説かれたのである。

當紂之時、大道悖亂。天威之動、不能戒聖人之言。無所用進、死以僨命。誠仁矣。無益吾祀。故不爲委身以存。祀誠仁矣。與亡吾國。故不忍具。是二道有行之者矣。是用保其明哲。與之俯仰。晦是謨範。辱於囚奴。昏而無邪。墮而不息。故在易曰。箕子之明夷。正蒙難也。

【字義】○天威之動 天の威光が、災害を下して警戒するをいふ。○併命 國家と運命を俱にする事。○委身以存祀 一身を餘所の國に委ねまかせて、殷の祀を絶えないやうにした。○明哲 事理に明らかで、すぐれてかしいこと。○晦是謨範 國家の大計、及び後王の模範となる教訓をくらしかくして、外面にあらはさぬ。○囚奴 箕子は紂を諫めた時、囚はれて奴となつた。○墮 墮落をいふ。○易 明夷の卦に「箕子之明夷」とあり。箕子の明哲も、暗虐な君主の爲に破壊されたといふこと。

【釋義】 殷の紂王の時には、大道はやぶれ亂れ、天の威光が、種々の災害を下し亡國の兆候を示して之に警戒を與へたが、別に警戒もせず、箕子の様な二三の聖人の諫言も更らに耳に入れなかつた。殊に比干などは極諫の極、國家の滅亡と運命を俱にして死んだのは、人道に適つたものと謂はねばならぬ。又、微子は自身を投出して、君の祖先の祭祀を維持するには何等の益もないと考へたから、諫めて死ねる様なこと

はせず、身を他國に委れて殷の祀を繼續したのは、是も洵に仁道に適つて居る。自國を引拂つたりすると何んだか國家滅亡の手傳でもする様で、洵に忍びないといふので之れをせず。あの比干の命を併すのと微子の身を委ねるとの二道を兼ね併せて之を行つたものがある。即ち箕子其人である。こんな譯で、箕子は、自身の賢明を保全して世の成行と浮沈昇降し、是の國家の大計、後王の模範となるべきものを持ちながら、それを晦し匿して表面に見さず、或る時は囚はれて奴となつて恥辱を受けたりしても、外面はどこ迄も昏昧無智のやうに見せかけて、そして一點邪僻の行なく、墮落したやうで、しかも道を守つて些しも息まなかつた、故に易の中に「箕子の明哲も傷れた」と載つては居るが、正しく是が正しい道を守つて、大難をふりかぶるといふことになるのである。

及天命既改。生人以正。乃出大法。用爲聖師。周人得以序彝倫。而立大典。故在書曰。以箕子歸。作洪範。法授聖也。及封。朝鮮。推道訓俗。惟德無陋。惟人無遠。用廣殷祀。俾夷爲華。化及民也。率是大道。聚於厥躬。天地變化。我得其正。其大人歟。

【字義】○彝倫 五倫五常をいふ。○洪範 天下を治める大法を陳べた文で書經の中にある。○人無遠 土地が遠近であるからといつて、人に差別をつけない。○俾夷爲華 野蠻夷狄を華夏禮儀の國をさせる。○率是大道 前に述べた大人の道三つを統べる。○天地變化 天地革命の大異變。

【釋義】 殷は既に滅亡し、天命は周に歸し、人民正道に歸することになつて、そこで箕子は兼ねてから著へ

て居た國を治める大法を出して、聖人武王の師と爲り、周人は之に依つて五倫五常の人の常に守るべきすぢ道を順序だて、國家民生の大典を立てることが出来た。是故に書經にも「武王は箕子を引連れて來て、箕子は天下を治める大法を作つて獻上した」とあるが、是が前に述べた所の天下の大法を定めて、次に出て來る聖人に授けてやるといふことになるのだ。其後、朝鮮に封ぜられては、聖人の大道を推し廣げて、民俗を訓戒し、其徳は洵に立派な者である。又、土地が遠近であるからといつて、人に差別をつけず、誰でもなづけやほらげ、そして殷の祀を永く朝鮮で保存し、夷狄の國を文明に變化させた。是が前に述べた所の教化の力が一般の人民に及ぶといふことである。斯様に三箇條の大人の道三つを統べて、之を一身に集め、如何に天地が大變化しても、自分は何處までも正道を失はないといふは、是こそ聖人といつて差支へないであらう。

於虜當其周時未至殷祀未殄。比干已死。微子已去。向使紂惡未稔而自斃。武庚念亂以圖存。國無其人誰與興理。此人事之或然者也。先生所以隱忍而不去。意者有在於斯乎。唐某年作廟汲郡歲時致祀嘉先生獨列於易象作是頌云。

【字義】 ○武庚 紂の子。○亂 治なり。

【釋義】 さてさて、周がまだ天下を統御する時期が來ず、殷の祀がまだ絶えない時に方つて、比干は最早や殺され、微子は最早や他國へ往つてしまつたが、あの時に紂の暴虐がまだ十分熱さない中に死んでしまひ、其子の武庚は國家の治まることを考へて、殷の祀の保存を圖らうとしたと假定して、其時に國家を治める良臣

は、皆死んでしまつて居たら、誰と國を治めることが出来やうか。こういう事柄は、人間世界に動ともする有勝のことである。先生(箕子を指す)が種種の迫害を受けても、こらへ忍んで奴隸とまでなつて居たのは其志はこゝろいふ所にあつた爲であらうと思はれる。唐の某年に、祀廟を汲郡に作つて四季をり／＼祭典を行ふことにした。自分は先生が比干微子のあるにも拘らず、唯、獨、易の明夷の卦の象に書きつけられたのを感歎の餘り、是の頌を作つたのである。

蒙難以正授聖以謨宗祀用繁夷民其蘇憲憲大人顯晦不淪聖人之仁道合隆汚明哲在躬。不陋爲奴行讓居禮不盈稱孤高而無危卑不可踰非死非去有懷故都時詘而伸卒爲世模。易象是列文王爲徒大明宣昭崇祀式乎古闕頌辭繼在後儒。

【字義】 ○憲憲 明に盛んなる貌。○顯晦 世に出てて高い地位と、隠れて囚奴と爲ると。○隆汚 世の盛衰をいふ。○有懷 故都 箕子が朝鮮に封ぜられた後、周に朝して、故の殷の墟を觀て、無量の感慨に堪へられ、「麥秀の歌」を作つたこと。○大明 大いなる明德。

【釋義】 大難をふりかぶつても屈せず撓まず、何處までも正しい道を履み、あの聖人たる武王に、國家を治める大計大法を授けられた。斯人の力によつて、殷の祀は滅びず繁昌し、朝鮮の夷民どもも、此の教化によつて殆ど蘇生の思をした。徳の明に盛んなる此聖人は、世に出て朝鮮に君臨した時も、身を晦まして囚奴と爲つた時も、徳は些しも變らず、聖人の仁を具へて、其道は世の盛衰に合し、明哲を身にたもつて居たから

囚奴と爲つても、そんなことを卑陋と思はず。謙讓の美德を行ひ禮儀の節文に居て、朝鮮の國王でありながら、孤(王侯の一人稱代名詞)と稱して自ら高ぶることを満足とせず。高い地位に居ても、些しの危険の模様がなく。卑い身分となつた時でも、誰一人ふみ踰へて輕蔑する者はなかつた。あの比干は死に、微子は去つたが、其死、其去に倣はず、只管、故國を懷つて、胸中に萬斛の涙をたゝえて居た。最初は大に屈して囚奴にまでなつたが、最後には大に伸びて朝鮮に封ぜられ、結局、世の模範にまでなつた。易の明夷の卦に書き載せられ、文王と同じ仲間となり、(明夷の卦の象には、文王と箕子とが引證されてある)大いなる明德は四方にひろがり、今代之を神として祀るといふも、真心を籠めてのことである。惜しいことには古來、歌頌の辭がなかつたから、之を繼いで作るのは後世の儒者の任務であらう。(即ち自分が作つた譯である)

嚴先生祠堂記

范文正公

嚴光字は子陵、後漢の光武皇帝がまだ微賤であつた時、子陵とは同窗の學友であつた。光武が即位の後、子陵は姓名を變して富春山下で、耕作又は釣魚などをして居たのを、捜し出して宮中に連れ来て打とけて其晚は一緒に寝た。處が子陵の眼中には、天子といふものがなかつたから、足を伸して帝の腹の上に載せた。翌朝になると、天文方が奏聞したのに「客星が帝座を犯しました」と。帝之を聞いて「それは心配するに及ばない。朕は故人の嚴子陵と、昨夜同衾したに過ぎないのだ」と答へられた。後、諫議大夫になれとお勧めがあつたが、たつて辭退して、相變らず舊の故巢の富春山中に歸つて、一生を終つた。

祠堂とは、之を祀つた堂のこと、今、嚴州桐廬縣に存在して居る。

范文正公名は仲淹、字は希文、蘇州吳縣の人。參知政事になつた。卒してからは兵部尙書を贈られ、文正と諡を賜はつた。

先生、光武之故人也。相尙以道。及帝握赤符、乘六龍、得聖人之時。臣妾億兆、天下孰加焉。惟先生以節高之、既而動星象、歸江湖、得聖人之清、泥塗軒冕、天下孰加焉。惟光武以禮下之。

【字義】 ○故人 舊友といふこと。 ○赤符 天子となるべき豫言書。 ○乘六龍 天子の位をいふ。易の六龍に乗すといふに取つて、帝位に上ることをいふ。 ○動星象 天文にあらはれた。即ち子陵が足を帝の腹に載せたこと。 ○軒冕 軒は車、冕は冠。

【釋義】 先生は光武帝の舊友である。少年時代には、お互に道を以て相正しあつて居たが、後、帝が天子と爲るしるしを得て、いよいよ帝位に即き、億兆の人人を臣下としてからは、天下の者共、誰とて之に及ぶものがあらうか、然るに惟、先生だけは節操を以て高ぶつて些しも屈しなかつた。それから帝と同衾した處が足を帝の腹に載せて、天文にまで見はれ、諫官に拜命せられしも辭退して民間に引歸り、聖人中の尤も清きところを身にたもつて、車に乗り又は冠を戴いて役人はなすのを土の泥の様に心得たといふは、天下廣しといつても、誰れが之に及ぶ者があらうか。然るに惟、光武帝だけが、禮節を手厚くして之に下られた。

在蠱之上。衆方有爲、而獨不事王侯。高尚其事。先生以之在屯之初。九陽德方亨、而能以貴

下賤大得民也。光武以之。

【字義】 ○蠱之上九 易の蠱の卦の上九のこと。争臣論に説明してある。○屯之初九 易の屯の卦の初爻をいふ。

【釋義】 帝と先生とを易の卦に當嵌て見ると、蠱の卦の上九の爻は、他の人人は、皆それ／＼自分の職務に勵んで居る（他人は官位を得て働いて居る）のに、獨、王侯にも仕へないで高尚に構へて居るといふのであるが、先生は此爻を實行されて居り、又、屯の初九の爻は、天子の陽徳が天下に行き渡つて居るにも拘はらず、尊貴の身分で微賤の士にへり下るから、非常に庶民から心服されるといふのである。是は光武帝が此爻を實行されて居た。

蓋先生之心出乎日月之上。光武之量包乎天地之外。微先生不能成光武之大。微光武豈能遂先生之高哉。而使貧夫廉、富夫立。是大有功於名教也。

【字義】 ○儒夫 氣分の引立たない、くづ／＼した男。○名教 道德の教。

【釋義】 推し量るに、先生の心の潔白なは、日月の上にも「もぬけ」て高し、光武帝の度量の廣大なは、世界の外をも包むといふ程の大きさである。先生がなかつたら光武帝の大きな所は成せなかつたであらう。又、光武帝がなかつたら、どうして先生の高尚な志を遂げさせられう。全く二人相待つて大を成し高きを遂げたものである。そして先生のこの高潔な行を觀ては、愆深い男も感化されて、清廉となり、意志の薄弱な男も

感化されて志を立てる様になるので、實に道德の教に功のあるのは莫大と謂はねばならぬ。

仲淹來守是邦。始構堂而奠焉。乃復爲其後者四家。以奉祠事。又從而歌曰。雲山蒼蒼。江水泱泱。先生之風。山高水清。

【字義】 ○奠 祭奠すること。○復 賦役を免除する。○蒼蒼 深青色。○泱泱 深く廣い貌。

【釋義】 仲淹、即ち自分は是邦の太守と爲つて來た。そこで始て祠堂を建築して祭奠を執行し、其子孫の四軒に租税を免除し、祭祀に従事させ、又、それにつれて歌を作つた。其歌は

雲の懸つて居るあの山は、青青として高く聳え、揚子江の河水は、混混として深く廣く流れて居る。先生の高風清節は、正しく此山の高く、此水の長い様で、千秋萬古、永く世の模範となるであらう。

跋紹興辛巳親征詔草

辛稼軒

紹興辛巳は、南宋の高宗の三十一年である。是時、金主亮は大軍を率ゐて宋を侵して來た。帝がそこで詔を下して親征されやうとした其草稿である。辛稼軒は、名は弃疾字は幼安、歷城の人。稼軒は別號である。朱子と交りが深かつた。官は樞密都承旨にまなつた。

使此詔見於紹興之前。可以無事。雖之大恥。使此詔行於隆興之後。可以卒不世之伐。功今此。

詔與此虜猶俱存也悲夫。

【字義】 ○隆興 孝宗の年號。

【釋義】 此詔が倘し紹興以前に發せられたら、あの様に此宋が滅亡し、徽宗欽宗以下百官までが、降虜となつて、讐敵に事へたりする恥辱を取らなかつたであらう。此詔が倘し隆興以後に發せられたら、中原恢復の志があつた時であるから、世にも比類のない大功が立てられたらう。處が親征の詔勅だけあつて、實行されなかつたから、詔と讐虜と依然として存在して居るとは、なんと悲しいこととなからう。

袁州學記

李 泰 伯

袁州に學校を新築した記文である。

李泰伯、名は觀、泰伯は其字である。或はいふ名は安期と。盱江の人。

皇帝二十有三年制詔州縣立學。惟時守令有哲有愚。有屈力殫慮。祇願德意。有假官借師。苟具文書。或連數城。已誦絃聲。倡而不和。教尼不行。

【字義】 ○皇帝——年 古代まだ年號のなかつた時分は、單に皇帝即位から何年目といつて時代をあらはしたものである。泰伯は古法に則とつて、かく書いた。この二十三年は、宋の仁宗皇帝慶曆四年であつた。○制詔 勅命をいふ。○守令 太守と縣令と。○誦絃 禮記に「春誦夏絃」とあつて、節をつけて讀むを誦とい

ひ、琴などに合せて歌ふを絃といふ。即讀書といふ義。

【釋義】 宋の仁宗皇帝の即位から二十三年めに、各地の州縣に勅命を下され、學校を立て教育を勵まされた。處が、當時の地方官たる太守又は縣令などの中で、賢明な者もあり、愚昧な者もあつて一様でなかつた。力の有らん限りを盡し、十分に思慮し、謹んで天子優渥の御旨に對へて、教育を勵行した者もあり、又、學官教師等の名義だけを假設して、單に形式的に文書類を具へて體裁を繕つて居た横著者もあり、甚しい者になると、數ヶ城一帯は、些しも讀書の聲がなく、かく天子が教育を獎勵倡導されて居るのに、下の地方官が之に應和せず、教育は停滯して行はれない土地もあつた。

三十有二年范陽祖君無擇知袁州。始至進諸生知學官闕狀。大懼人才放失。儒效闕疎。無以稱上意旨。通判穎川陳君侁聞而是之。議以克合。

【字義】 ○儒效闕疎 儒教の效力がおろそかになる。○通判 諸州に通判を置き、長官の副とす。地方行政は皆通判の贊同を得て施行す。

【釋義】 三十三年、即ち仁宗皇帝の至和元年に、范陽の人祖無擇君が袁州の知事となられた。著任早速、學生を招寄せて、學校の狀況を聞糺し、學制の缺點を發見し、非常に、人才が折角集て居るのに、こんなことでは放失してしまひ、儒教の效力もおろそかになるであらう、かくては、天子の御旨に相違すると心配した。これを通判の官である穎川の人陳侁君が聞いて、「其心配はいかにも尤もだ」と贊成し、學校建築の相談が一

致した。

相舊夫子廟。陝隘不足改爲。乃營治之東。歐土燥剛。厥位而陽。厥材孔良。殿堂門廡。黝堊丹漆。舉以法故。生師有舍。庖廩有次。百爾器備。並手偕作。工善吏勤。晨夜展力。越明年成。舍菜且有日。

【字義】 ○夫子廟 孔子の廟。○隘隘 せまいこと。○治 縣廳。○廡 堂下のほそどの。○黝堊 青黒い色と白色。○丹漆 赤と黒と。○生師 學生と教師と。○庖廩 臺所と米倉。○百爾 多數といふ程のと。○舍菜 釋菜と同一である。孔子祭の名。一名釋奠。

【釋義】 さて建築の場所を選定して見たが、從來の孔子廟の所在地では、せまくて到底改築されないから、そこで縣廳の東に新築することにした。土質は乾燥堅剛で、地位は南に向ひ、建築材料は非常に善良、本殿講堂、又は門から廡に至るまで、一切、舊法に従ひ、學生と教官とは、皆寄宿舎宅があり、臺所米倉なども順序正しく築造され、所有器物は皆完備し、建築の技師ども、一同手を揃へて著手した。職人は良工、官吏は勤勉に、朝早くから夜遅くまで、間断なく従事したから、越えて翌年に、さしもの大建築も見事に落成し、舍菜即ち釋奠（學校には孔子を本尊として祀つてある。故に釋奠を行うは、開校式を舉行することになる）も近日に迫つた。

盱江李觀論于衆曰。惟四代之學。考諸經可見。曰。秦以山西鑿六國。欲帝萬世。劉氏一呼。而

關門不守。武夫健將。賣降恐後。何耶。詩書之道廢。人惟見利。而不聞義焉耳。孝武乘豐富。世祖出戎行。皆孳孳學術。俗化之厚。延于靈戲。草茅危言者。折首而不悔。功烈震主者。聞命而釋。兵羣雄相視。不敢去臣位。尙數十年。教道之結人心如此。

【字義】 ○四代 虞、夏、殷、周。○劉氏 漢の高祖劉邦。○賣降 降参して爵祿を得ること。○世祖 後漢の世祖光武皇帝劉秀をいふ。○戎行 軍隊の中といふ程のこと。○孳孳 孜孜に同じ、つとめはげむ。○靈戲 靈帝獻帝、即ち後漢の末の天子。○草茅危言 民間で憚らず言論すること。

【釋義】 さて盱江の人李觀、即ち自分が學生に告げていふに「上古、虞、夏、殷、周時代の學校教育の隆盛であつたことは、經書などに見えて居るから、今更之を説明する必要を認めないが、降つて秦の時代となつては、初め崑山の西部に國を構へて居たものが、段段勢力を張り、最後には六國を攻滅ぼした結果、始皇帝は天子の位地を千萬世の後にまで傳へやうと希望し、法律其他種種の手段で、叛亂を防いだが、始皇が崩じて間もなく、早くも革命の火の手があがつて、中にも劉氏は一呼して起ち上り、秦で要害無比と恃んで居たあの函谷關に推寄たら、敵は防禦する處が、忽ち降参し、武夫健將で、秦が依頼して居た者共も、忽ち旗を捲いて降参して、爵祿を得て自分の安全富貴を圖つたその理由は、一體、どういふ譯でこつたのであらう。外でもない、學者を坑殺したり經書を燒却したりして、詩書禮樂の道は地に墜ち果て、世人は惟、利益といふことだけを知つて、道理といふ者を知らなかつたからである。之に反して前漢の武帝は、前代から

の豊富な財力を承け繼ぎ、後漢の世祖は軍隊の出身であつたが、いづれも學問にいそしみ勵んで、或は大學を興し、或は節義を獎勵されたりした爲め、風俗感化の方は遠く靈帝獻帝迄にも及んだ。民間の志士は君を思ひ國を憂ふの餘り、直言して憚らず、縱令首を斬られても後悔せず。勳功拔羣、威權赫赫、天子も畏れ憚るといふ様な地方の總督でも、一朝勅令を聞くと武器を解いて實權を奉還し、各地に割據し居る羣雄でも思切つて人臣の位地をすてなかつた(臣下の位地に満足して居た)ことが尙ほ數十年も續いた。教育道德の力が人心に結びついたので此通りであつた。

今代遭聖神、爾袁得賢君、仰山庠序踐古人之迹。天下治則譚禮樂以陶吾民。一有不辛、猶當仗大節爲臣死忠、爲子死孝、使人有所賴且有所法。是惟朝家教學之意、若其弄筆墨以徵利達而已、豈從二三子之羞、抑亦爲國者之憂。

【字義】 ○聖神 仁宗皇帝を指す。 ○庠序 學校のこと。

【釋義】 今代は聖天子を戴き、汝袁州では賢知事を仰ぎ、汝袁人に學校に於て古人のやり方を實踐躬行させる事になつたのは、洵に慶賀の至りに堪へない次第である。故に此學校の學生共は、天下泰平の時は、禮義音樂などの談しをて袁人を薰陶感化し、一朝不幸の時變に遭遇した場合には、大いなる節操をすがり持つて、臣下の位地であるならば忠義の爲に命をすて、子たる身分ならば孝行で死ねる様にし、人人によりかかる所あり、且、模範とさせる様に爲さればならぬ。是が唯一の朝廷で教育學問を獎勵される精神である。それを

此眞意を誤つて、筆墨を振り舞はして詩文などを作つて、單に試験に合格すること許り考へ、そして一身の利益出世のみ求めるといふことであると、どうして諸子達の恥辱だけに止まらうか、進んでいふと、國家を治める人の尤も憂慮する所である。

書洛陽名園記後

李文叔

洛陽に在つた有名な庭園の事を李文叔が記載して、卷末に書いたものである。李文叔、名は格非、文叔は其字である、濟南の人。能文で蘇東坡に知られて居た。後、禮部員外郎に爲つた。洛陽處天下之中、挾殺阻之阻、當秦隴之襟喉、而趙魏之走集、蓋四方必爭之地也。天下當無事則已、有事則洛陽必先受兵、余故嘗曰、洛陽之盛衰、天下治亂之候也。

【字義】 ○殺阻 二つとも山の名。 ○秦隴 俱に西部にある地。 ○走集 邊境の壘壁。 ○候 兆候。

【釋義】 洛陽は天下の中央に位して、殺山阻山の險阻を帯び、秦隴の襟又は咽喉くび、即ち要衝に當り、趙や魏の國境の壘壁に而し、洵に要害堅固の地であるから、四方の人人皆之に注目し、争つて取りたがる處である。故に天下が泰平無事の時は夫迄であるが、一朝事變が出来た時は、洛陽は必ず最初に兵を受け、戰爭の巷と爲るのである。自分は是故に、或る時いつた「洛陽の盛衰は、天下治亂の兆候である」と。

方唐貞觀開元之間、公卿貴戚開館列第於東都者、號千有餘邸、及其亂離、繼以五季之酷、其

池塘竹樹、兵車蹂躪、廢而爲丘墟。高亭大榭、烟火焚燎、化而爲灰燼。與唐共滅、而俱亡無餘處矣。余故嘗曰：園囿之興廢、洛陽盛衰之候也。

【字義】○五季 五代、即後梁、後唐、後晉、後漢、後周をいふ。○池塘 池やつつみ。○蹂躪 踏みこむ。○大榭 屋根のある物見臺。○園囿 園は果樹を植ゑた所、囿は禽獸を飼ふ場所。

【釋義】唐の太宗の貞觀、玄宗の開元時代には、三公九卿貴顯外戚などが、東都即ち洛陽に邸宅を構へた者が千以上もあつたと謂はれて居た。處が唐が亂れて、引續いて五代の慘酷な禍があつて、さしもの池やつつみや、竹又は樹木などは、兵車の爲にふみにぢられ、荒廢して丘とか舊址と爲り、壯麗を極めた高い亭、大きな物見臺も、戦火の爲に焼き盡され、灰燼と化し、唐と共に消滅して跡方もなくなつてしまつた。自分は是であるから、前方いつたのである「園囿の興廢は洛陽盛衰の兆候である」と。

且天下之治亂、候洛陽之盛衰、而可知。洛陽之盛衰、候園囿之興廢、而得。則名園記之作、余豈徒然哉。

【釋義】且つ天下の治亂は、洛陽の盛衰によつて之を知り、洛陽の盛衰は、園囿の興廢で分るとなると、『名園記』の作は、決して無益の事ではなからう。

嗚呼公卿大夫、方進於朝、放乎一己之私、自爲之、而忘天下之治忽、欲退享此得乎。唐之末路、是已。

【釋義】さてさて、上は公卿から、下は大夫に至るまで、一旦朝廷に仕へると、忽ち自己の私慾に驅られて宏壯な邸宅園囿などを作り、日日其中で遊び戯れて、國家の治亂に就いては、之を忘れ果ててしまつて居ては、自分一人退いて此樂を享けやうとしても、出来る筈があらうか。唐の末年が即ち是れである。後世の公卿たる者、深く此點に留意しなくてはならない。

岳陽樓記

范文正公

岳陽樓は、岳州巴陵郡に在つて、彼の有名なる洞庭湖を瞰下し、眺望の廣大なこと無類であると謂はれて居る。岳陽の名は、この岳州は天岳山の陽にあるからで、そして此樓は、實は州城の西門の樓である。樓の眺望が、かく廣大であつたから、古來、文人墨客どもが、わざわざ迂路して此樓に上り、詩歌を作つて壁に書つけて互に才華を競争した。故に洞庭湖の雄大を詠じた詩賦は、澤山残つて居る。こんな場處であるから、此記文を作るに就いても、作者は尤も苦心を要するのだ。即ち單に湖の雄大を述立てたのでは、陳腐となつて何の興味もないことになる。それを此の文章のやうに著想して、岳陽樓其者を活した所に、作者の苦心と手腕が認められる。

慶曆四年春、滕子京謫守巴陵。越明年、政通人和、百廢具興。乃重修岳陽樓、增其舊制、刻

唐賢今人詩賦于其上。屬予作文記之。

【字義】 ○滕子京 名は宗諒、子京は其字だ。涇州の刺史であつた時、官金消費の廉によつて、巴陵の太守に貶謫されたが、實は惡意でやつたのでなかつた。○屬 屬に同じ、「たのむ」こと。

【釋義】 宋の仁宗皇帝の慶曆四年春、滕子京が貶謫されて巴陵郡の太守にされた。もとより善良な人物であつたから、管轄内の施政其宜しきを得て、越えて翌年には、すでに政治は行波らない處もなくなり、一般の人民も其感化によつて洵によく和睦し、従前は廢されて顧みられなかつたものも、皆復興する様になつた。そこで岳陽樓の荒廢しかつたものを、更に修築し、舊來の制定を増しふやして、唐代の作者及び現代の人士の詩又は賦を欄間に刻んで、いよく落成したから、自分にたのんで、文章を作つて改修の由來を書くことになつた。

予觀夫巴陵勝狀。在洞庭。一湖銜遠山。吞長江。浩浩湯湯。橫無際涯。朝暉夕陰。氣象萬千。此則岳陽樓之大觀也。前人之述備矣。然則北通巫峽。南極瀟湘。遷客騷人。多會于此。覽物之情。得無異乎。

【字義】 ○浩浩湯湯 浩浩は、水のひろくとしたさま。湯湯は、波のわきたつさま。○巫峽 洞庭の上流に在る三峽の一。○瀟湘 洞庭湖の下流に在る二つの澤の名。

【釋義】 自分が巴陵郡の景勝を見渡すに、全く此洞庭湖があるから、其名を撞にして居るのである。さて、湖面を見ると、漫漫たる湖水は、遙か遠方の山山を、殆ど口中でころがして居るやう、又、滔滔たる揚子江を一呑みに吞込んで居る様で、水のひろくとしたる、波の湧立つ、實に廣大無邊であり、殊に其左右は茫茫として果しもなく、旭日の輝き、夕日の隈取り、空中に起る現象が、千變萬化する。是がすなはち岳陽樓上から眺望した景色の梗概である。併し、湖面の廣濶とか、水量の澎湃とかは、前人が最早や詩賦に述べて居るから、今更、事新しく説明する必要を認めない。それ故、自分は別の方面に就いて、述べて見やうと思ふ。一體、此湖水は、北は巫峽の山に通じて居り、南は瀟湘の水に達して居て、遷謫を受けた人、或は風流人などが諸方へ往く通路であるから、自然こんな人達は、多數此樓に來ることになる。其人人が此湖面を展望すると其心情は各々相違がないとは謂へまい。

若夫霪雨霏霏。連月不開。陰風怒號。濁浪排空。日星隱曜。山岳潛形。商旅不行。檣傾楫摧。薄暮冥冥。虎嘯猿啼。登斯樓也。則有去國懷鄉。憂讒畏譏。滿目蕭然。感極而悲者矣。

【字義】 ○霪雨 長く降りつづく雨。

【釋義】 倘しも長雨が霏霏として細かに降りつづき、月を跨つてもまだ開霽せず、冷い風は湖面に怒り叫んで、濁つた浪は立ち騒いで雲をかきわける様であり、太陽も星も全く姿をかくし、山岳も形を隠し、旅人も絶え果て、樓下に碇泊する船は、檣は傾き楫はこわれて、如何にも慘憺たる光景を現出し、それが夕

方となると、暗闇の中で虎が嘯いたり猿が啼いたりするといふ凄惨の時に、此の岳陽樓に登つた人があるとすると。遙遠と國を去つたことである、故郷の妻子は無事であらうか、かく遠方に迄來るといふは、全く諷言を受けた爲である、諷言は油断がならぬ者であり、譏りは畏ろしいものと、種種の事柄を考出し、眼に見える者は皆さびしげな者許りと相待つて、感極つて涙を流す者があるに相違ない。

至若春和景明。波瀾不驚。上下天光。一碧萬頃。沙鷗翔集。錦鱗遊泳。岸芷汀蘭。郁郁青青。而或長烟一空。皓月千里。浮光躍金。靜影沉璧。漁歌互答。此樂何極。登斯樓也。則有心曠神怡。寵辱皆忘。把酒臨風。其喜洋洋者矣。

【字義】 ○頃 百畝。○錦鱗 普通は金魚又は緋鯉の類のことだが、ここではただ奇麗な魚といふまでのこと。○芷 香草。○郁郁 香の高いこと。○浮光 月が水にうつつて、波に弄される光り。○靜影 靜に映る月影。○寵辱 君から寵愛を受けたり、恥辱をとること。

【釋義】 それが俯し、陽春三月、あたり長閑に晴れ渡り、波も騒がず、水と空とは唯、同一の青い色で、數萬町歩の湖面に碧を湛へ、沙鷗は飛び交ひ、魚は泳ぎ廻り、岸に芷、水際に蘭などが、香氣高く青青と生ひ茂り、或は天空に烟が盡く見る間に、一輪の明月は東から出て、皓皓として千里を照し、水にうつる月影は黄金を散らした様、又、或る時は圓く宿つて夜光の璧を沈めた様であり、あちらこちらの島影では、長閑な漁夫の歌を、甲が唱へると乙が答へるといふ、洵に平和な光景に對すると、其愉快は極點に達し、此の樓

に登ると、心はひろく精神はよろこび、寵愛も恥辱も忘れ果てて、酒を引寄せて風景を觀賞し、其喜びは廣

廣として際限のない者であらう。

嗟夫予嘗求古仁人之心。或異二者之爲。何哉。不以物喜。不以己悲。居廟堂之高。則憂其民。處江湖之遠。則憂其君。是進亦憂。退亦憂。然則何時而樂耶。其必曰。先天下之憂而憂。後天下之樂而樂。噫。斯人吾誰與歸。

【字義】 ○二者 前の喜んだり悲しんだりするをいふ。○物 外物。○江湖 民間といふ程のこと。○歸 従ひおむく。

【釋義】 さて、自分は或る時、古の仁人の心を推し究て見るに、どうも前に述べた様な、景色に就いて喜んだり悲んだりする所爲とは、全然相違して居るのは、どういふ譯であらうか、その仁人は、外物、即ち官爵祿位を加へられても、喜ぶことをせず、自身が困窮して居るからといつて、悲しむこともせず、身を政事堂の高い位地に置くと、只管人民の事許りを心配し、民間に居る時は、主君の身に許り就いて心配するのである。そうすると、進んで朝廷に仕へる時も、退いて民間に居る時も、均しく心配は絶えないのである。それならば一體何日になつたら樂むだらうかと尋ねたら、仁人は必ず「天下の人が心配する以前に、其心配を豫知して準備を爲し、天下の人が樂む様になつてから樂む」と答へるであらう。さてさて此様な理想的な人がなかつたら、自分は誰に従ひたらうか。

卷七 乎字集

小心文

韓文公・蘇東坡二公之文。皆自莊子覺悟。此集可與莊子並驅爭先。

韓文公・蘇東坡二人の文章は、皆莊子（名は周）から悟つて、あんな名文が出来たのである。此乎字集に載せた文章などは、取分け立派な者で、莊子と并行して、寧ろ超越する程の者である。

祭田横墓文

韓文公

田横は戦國時代の齊王田氏の一族である。漢の高祖が天下を一統して後、横は其徒五百人と海上の一小島に住んで居た。それを高祖が強ひて召し寄せた。横は餘儀なく洛陽附近迄来たが、「自分は始め漢王（高祖）と南面して王といつて居たが、今漢王は天子と爲り、自分が之に事へるは恥辱此上ない。且自分は曾て酈生を烹殺したことがある。それを其弟と俱に肩を併べて主君に事へるといふは、良心に對して洵に堪へられないことである」といつて、自刎した。高祖之を聞いて涕を流し、卒二千人を發して、王者の禮で之を葬つた。横の客二人も幕側で自刎した。高祖は之を聞き、「其徒五百人が尙ほ海中に居ると聞いて居る」といつて之を召寄せさせたが、来て見ると、横はすでに死んだといふことを知つて、皆自殺した。此の文は公が二十八歳の作で、是時、公は博學宏詞科に受験したが、うまく往かなかつた。そこで三回まで

欠

欠

いふ野獸でも又、虎でもないのに、どうして廣い野原で追ひまはされるかといふ文句があるが、自分の身の
上は、此詩と洵に好く似て居るが、一體、自分の唱へる道がわるい爲に、こんな迫害を受けるのであらうか
といはれたら、顔子が答へて「先生の道は廣大無邊でありますから、天下の人は之を受けないので。併し受
けられないといつて、決して悲觀するには及びません、受けられない所で、始て君子といふことが
分ります」といつたら、孔子は喜ばしげな様子で笑つて「顔回よ、倘しもお前に澤山財産があつたなら、自
分はお前の番頭にならうものな」といはれた。

夫天下雖不能容而其徒自足以相樂如此乃今知周公之富貴有不如天子之貧賤夫以召
公之賢以管蔡之親而不知其心則周公誰與樂其富貴而夫子所與共貧賤者皆天下之賢
才即亦足以樂乎此矣。

【釋義】 斯様に孔子の道は、天下一般が之を受けられなかつたが、それでも門人等が、互に樂みあつて居た
のが此通りであつた。そこで周公は富貴の身分であつても、到底孔子の貧賤に及ばないのが分ります。夫れ
召公は賢明の人であり、管叔、蔡叔は骨肉の兄弟の間柄であつてすら、周公其人の精神を知らず、猜疑の眼
で見居るといふ様では、周公たる者は誰と與に其富貴を樂めやうか。之に反して孔子が貧賤を共にされて
居る者共は、皆天下に於ける賢才であるから、孔子は之を樂んで其貧賤を忘れられるに十分でありました。
軾七八歲時始知讀書聞今天下有歐陽公者其爲人如古孟軻韓愈之徒而又有梅公者從

欠

いふ野獸でも又、虎でもないのに、どうして廣い野原で追ひまはされるかといふ文句があるが、自分の身の
上は、此詩と洵に好く似て居るが、一體、自分の唱へる道がわるい爲に、こんな迫害を受けるのであらうか
といはれたら、顔子が答へて「先生の道は廣大無邊でありますから、天下の人は之を受けないのです。併し受
けられないといつて、決して悲觀するには及びません、受けられない所で、始て君子といふことが
分ります」といつたら、孔子は喜ばしげな様子で笑つて「顔回よ、倘しもお前に澤山財産があつたなら、自
分はお前の番頭にならうものな」といはれた。

夫天下雖不能容。而其徒自足以相樂如此。乃今知周公之富貴有不如天子之貧賤。夫以召
公之賢。以管蔡之親。而不知其心。則周公誰與樂其富貴。而夫子所與共貧賤者。皆天下之賢
才。即亦足以樂乎此矣。

【釋義】 斯様に孔子の道は、天下一般が之を受けられなかつたが、それでも門人等が、互に樂みあつて居た
のが此通りであつた。そこで周公は富貴の身分であつても、到底孔子の貧賤に及ばないのが分ります。夫れ
召公は賢明の人であり、管叔、蔡叔は骨肉の兄弟の間柄であつてすら、周公其人の精神を知らず、猜疑の眼
で見て居るといふ様では、周公たる者は誰と與に其富貴を樂めやうか。之に反して孔子が貧賤を共にされて
居る者共は、皆天下に於ける賢才であるから、孔子は之を樂んで其貧賤を忘れられるに十分でありました。
軾七八歲時。始知讀書。聞今天下有歐陽公者。其爲人如古孟軻韓愈之徒。而又有梅公者。從

之游而與之上下其議論其後益壯始能讀其文詞想見其為人其飄然脫去世俗之樂而自樂其樂也方學爲對偶聲律之文求升斗之祿自度無以進見於諸公之間來京師逾年未嘗窺其門

【字義】 ○賦 蘇東坡の名。○對偶聲律之文 對偶は、四六文といつて、四字一句、六字一句と順順に駢て作る文體。聲律とは、平、上、去、入の四聲からなる詩文の調子をいふ。俱に受験の時に用ゐるもの。

【釋義】 自分は七八歳の時から、始て讀書をしましたが、其時から「現今歐陽公と謂はれる方があつて、其人物は、古の孟子、又は韓文公の様であり、そして又、梅公といふ方があつて、歐陽公と交際され、相與に議論を闘はし居られる」と聞いて居りましたが、其後だんだん壯年となつて、始て二公の文章を拜讀し、其御人物を想像いたして、大方、飄飄乎として世間並の娛樂(物質的快樂)をもぬけて、自身の樂(精神的快樂)を樂まれて居るのであらうと推測して、益々敬慕の念が深くなりました。それから後、四六文、又は詩などと學んで受験準備を致し、僅か許りの俸祿を求めることになつてからは、自分で考へたのに、愚鈍の此身、とても諸公に拜謁する資格はないと認め、市都に來て一年以上になりますが、一度も二公の門に參趨致しませんでした。

今年春天下之士登至於禮部執事與歐陽公實親試之賦不自意獲在第二既而聞之人執

事愛其文以爲有孟軻之風而歐陽公亦以其能不爲世俗之文也而取焉是以此非左右爲之先容非親舊爲之請屬而嚮之十餘年間聞其名而不得見者一朝爲知己

【字義】 ○禮部 禮部省。

【釋義】 處が今年の春、天下の士が禮部省に羣至りて試験を受けることになりました時、執事と歐陽公とが御自身試験をなされ、自分は其時實に意外千萬にも、第二番で及第致さうとは、自分ながら不思議に思ふ次第でありました。後、人から「執事は自分の文章が御氣に入つて、孟子の面影があるとされ、そして歐陽公も亦、世間並の文章を作らないといふがお氣に入り御採用になつて、其爲め此位地(二番目の及第)が獲られたのだ」と承まりました。考へて見ますに、お側の人人が、自分の爲に、別に受験前に紹介して呉れたのでもなく、親戚舊知の人共が、お願致して呉た譯でもなく、そして十餘年前から、お名前丈け承つて居て、一度もお目通りが出来なかつたものが、一朝の試験で知己と爲つたといふは、眞實意外と致す次第であります。

退而思之人不可以苟富貴亦不可以徒貧賤有大賢焉而爲其徒則亦足恃矣苟其儂一時之幸從車騎數十人使閭巷小民聚觀而贊歎之亦何以易此樂也傳曰不怨天不尤人蓋優哉游哉可以卒歲

【字義】 ○閭巷 むらざと。○優哉游哉 ゆつたりとすること。

【釋義】引退いて考へて見ますに、人は無意味にて富貴となるは宜しくなく、それかと言つて、理由なく貧賤となるも宜しくありません。唯、ここに大賢人があつて、其仲間となつて従ひ遊ばば、それこそ心だのみになつて満足此上もない次第であります。それがそうでなく、ただ一時の僥倖で、車馬騎兵の數十人を引連れて大道を練りあるき、閭巷の匹夫に、よりたかつて羨しがり歎息させたところで、どうして賢人に従つて遊ぶ其愉快と易へられませうか。『論語』「も、縦令如何なる不遇の境遇に居ても、上は天に對して怨まず、下は人に向つて不平をいはぬ」とありますが、如何にも其通りであります。果して人事を盡して一點遺憾がないといふことであつたら、胸中はゆつたりとして、何不足のない譯で、こうしてこそ一生を申分なく送ることが出来るのであります。

執事名滿天下而位不過五品其容色溫而不怒其文章寬厚敦朴而無怨言此必有所樂乎
斯道也。軾願與聞焉。

【字義】○寬厚敦朴 ゆつたりとして親切に、質朴で些しの飾りもないこと。

【釋義】執事の御高名は天下一般に行渡つて居りますのに、位階といへば、僅に五品に過ぎません。併し、其御容貌は、溫和であつて些しの御憤悶のきまもなく、其文章を拜見致すに、ゆつたりと親切に、質朴で飾りなく、そして怨みがない言語は、些しも其中に見當りません。こういふお心持では、必ず古聖人の道をお樂になつて居るに相違ありません。自分はどうかそれを伺いたいものであります。

三槐堂銘

蘇東坡

三槐は三公をいふ。周の時代には、外朝に三本の槐を植え、三公之に向つて坐する制であつたから、後世三公を三槐といつた。

宋の晉國公王祐は大祖皇帝に仕へて、直諫で名が高かつた。嘗て帝に謂つて「五代の君は、猜疑心が深くて無罪の人を多く殺しました。其爲め國運が長くありませんでした。どうか陛下は之を鑑みて戴き度い」と申上げたから、帝は怒つて讒國軍行軍司馬に貶し、華州に安置され、七年間召還されなかつた。太宗即位の後兵部侍郎に拜命して召されたが、謁見しない以前に薨去した。初め祐が貶謫される時、送別の人が「貴君は將來宰相と做られるであらう」といつたら、祐は笑つて「自分が做れなかつたら、息子が必ず做れるだらう」と答へた。息子といふは、文正公旦のことである。祐は嘗て三槐を庭に植えて「自分の子孫は、必ず三公と爲る者があらう」といつたが、其後果して且が宰相と爲つた。

天可必乎賢者不必貴仁者不必壽天不可必乎仁者必有後二者將安取衷哉。

【字義】○必 きつと、相違なくなるといふ義。○衷 かつたよらぬこと、即ち中正。

【釋義】天の應報は確實に人に與へられるものであらうか、賢人でも必ず貴くなるとは往かず、仁者でも必ず壽命が長いとは往かぬから、どうもあてにならないが、そうかといつて、天の應報は確實にない者と斷言は出来ぬ。仁者には必ず子孫が繁榮する者であるから、そうすると、此二つの者は、どちらに中正を取つた

ら好いであらうか。(どちらに標準を定めるであらうか) 洵に艱難する次第である。

吾聞之申包胥曰。人衆者勝天。天定亦能勝人。世之論天者。皆不待其定而求之。故以天爲茫
茫善者以意惡者以肆。盜跖之壽。孔顔之厄。此皆天之未定者也。松柏生於山林。其始也困於
蓬蒿。厄於牛羊。而其終也。貫四時。閱千歲。而不改者。其天定也。善惡之報。至於子孫。則其定也
久矣。吾以所見所聞考之。其可必也。審矣。國之將興。必有世德之臣。厚施而不食其報。然
後其子孫能與守文太平之主。共天下之福。

【字義】 ○申包胥 戰國時代の楚の臣。○人衆——勝人 多數でやると、或る場合は天道にも勝つて、無理な
道が定まつて来ると、天道が結局人に勝つ。○盜跖 古の大盜。○蓬蒿 よもぎのこと。○世德 世世徳を
積む。○國家の成法を守つて、暴力武力を用ひぬこと。

【釋義】 自分が聞いて居るが、昔、申包胥の言に「多人數でやると、或る場合には天道にも勝つて、無理な
推進ほすことが出来るが、さて、天道が定まつて来ると、結局、天道が人に勝つのである」とある。如何に
も此通りである。世人が天道に就いて彼此いふ者は、大概、天道の定まる時を待つて、其應報を求めないか
ら、いつも天道をとりとめない者と認め、善人はなまけ、悪人は勝手氣儘に悪事をするのである。彼の盜跖
が壽命を全くして終り、孔子顔子が種種の厄難にあたりしたのは、いづれも天道がまだ定まらなかつたから

である。近い例が、松や柏が山林中に生えると。最初は、よもぎ類の雜草に困められ、牛羊に蹂みにじられ
たりして、様様の迫害を受けるが、此時期は天がまだ定らない時で、それが最後になると、春夏秋冬を推進
し、千載を経過しても、青青とした色艶を易へないのは、天が定まるからである。善惡の應報も是と同様で
其人の一代で定まらなければ、子孫の代になつて定まるのは、當然の理由である。自分は見たり聞いたりし
て居る所に就いて考へて見るに、應報は必然ある者に相違ないことは、確實である。國家が興らうとする時
には、心ず世世徳を積み重ねた良臣が出て、來て厚く功徳を天下に施しながら、其報を酬受けない。故に其
子孫になつて、國家の成法を守つて天下を太平にしようとする賢君(二代目以下の守成の君)爲に、忠義を
盡す者が出て來て、君臣相與に天下の幸福を受けるのである。

故兵部侍郎晉國王公顯於漢周之際。歷事太祖太宗。文武忠孝。天下望以爲相。而公卒以直
道不容於時。蓋聞嘗手植三槐於庭。曰。吾之子孫必有爲三公者。已而其子魏國文正公旦相。
眞宗皇帝於景德祥符之間。朝廷清明。天下無事之時。享其福祿榮名者十有八年。

【字義】 ○漢周 五代の後周をいふ。

【釋義】 故の兵部侍郎晉國公(祐)は、五代の後漢後周の頃から世に知られ、宋になつてから、太祖太宗
二帝に事へ、文武を兼ね忠孝の徳を具して居られたが、天下の人人は、皆公が宰相と爲られることを希望し
て居たが、公は餘り直諫されるから、當時に容れられなかつた。聞く所に據ると、公は自身で三本の槐を庭

前に植えて「自分の子孫に、必ず三公と爲る者があらう」といはれたといふことである。其後、其の子魏國文正公且は、眞宗皇帝に景徳、祥符年間に宰相と爲り、朝廷の政治は清く明に、天下は泰平無事の時に福祿や光榮の名譽を受けられたことが十八年に互つた。

今夫寓物於人。明日而取之。有得有否。而晉公脩徳於身。責報於天。取必於數十年之後。如持左契。交手相付。吾是以知天之果可必也。

【字義】 ○寓物於人 人に物を預ける。○左契 二つに分けたわりふの左の一方。即ち貸方が持つてゐる證書。

【釋義】 今、人に物を預けると假定して、それを翌日になつて取戻さうとしても、戻せることもあり。又、戻されないこともある。それが晉國公などは、徳を身に修めて、報酬は天道に任せ、確實の報酬を數十年の後に取られたことは、證書を手持つて、貸金を取立て、手から手へ交付する様であつた。自分はいふ譯で、天の應報は的確の者であるといふのを知つた。

吾不及見魏公。而見其子懿敏公。以直諫事仁宗皇帝。出入侍從將帥三十餘年。位不滿其徳。天將復興王氏也。歟。何其子孫之多賢也。

【釋義】 自分は遺憾なことには、魏公にはお目通りが出来なかつたが、其子懿敏公(王素)には面會した。

公は直言極諫で仁宗皇帝に事へ、入つては侍從となり、出でては將帥とられたことが前後三十年の久しきに及んだが、位地は其徳の優れたのと一致しないのは、察するに、天は更にふたたび王氏を隆興させやうとして居るのでないかと思はれるのである。どうしてこんなに晉公の子孫に賢人が多いのだらう。全く天の應報の結果に外ならないのだ。

世有以晉公比李栖筠者。其雄才直氣不相上下。而栖筠之子吉甫。其孫徳裕。功名富貴。略與王子等。而忠恕仁厚。不及魏公父子。由是觀之。王氏之福。蓋未艾也。懿敏公之子羣。與吾游。好徳而文。以世其家。吾是以錄之。銘曰。

【字義】 ○李栖筠 字は貞一。唐の時御史大夫であつた。○直氣 剛直の氣象。○吉甫 字は弘憲。李栖筠の子。唐の憲宗の時、宰相と爲つた。○徳裕 字は文饒。武宗の時、矢張宰相と爲つた。

【釋義】 世間では晉公を唐の李栖筠に比べる者があるが、そのすぐれた才と剛直の氣象とは、どちらがどうともいへない。又、栖筠の子の吉甫、孫の徳裕の功名富貴に於ても、先づざつと王氏と同様である。併し、眞心あり同情心深く、仁惠で深切なのは、到底魏公父子には及ばないのである。是で見ると、王氏の福は、まだまだ是位で盡き果てないことが豫測出来るのである。懿敏公の子羣といふは、自分と實際して居るが、徳を好んで文學にすぐれ、そして代代家門を恥かしめない人である。故に自分は特に之を書立てて置く。銘は

嗚呼休哉魏公之業。與槐俱萌。封植之勤。必世乃成。既相眞宗。四方砥平。歸視其家。槐陰滿庭。吾儕小人。朝不及夕。相時射利。皇 卹 厥德。庶幾僥倖。不種而穫。不有君子。其何能國。王城之東。晉公之所廬鬱鬱三槐。惟德之符。嗚呼休哉。

【字義】 ○休 美なこと。○封植 封は土をかける、植はうゑる。○皇 違と通す。「いとま」と訓む。○符 しろし。

【釋義】 さてさて美しいことである魏公の功業は、槐と一緒に發芽したが、之に土をかけたかたり植附けたり、さまざま骨を折るから、代を重ねて徳も加はり槐もそだつのである。乃ち彼の魏公は眞宗皇帝の宰相とも爲つて、其力で天下は太平の極に達した。久振りに家に歸つて見ると、父の植みて置いた三本の槐は繁茂して葉の陰は庭一面を掩つて居た(父祖の下した徳の種子が、子の代になつて茂つた)之に引かへ、吾吾ども平民は、朝の事は考へても、晩の事は考へる暇はないといふ始末で、唯、其時時の利益許りを圖つて、徳がどうかうかなどいふことを考へる餘暇はなく、萬一の幸福をねらつて、種子を下さないで收穫を獲やうと目論んで居る有様、洵にお恥かしい次第である。凡そ君子といふものがなかつたら、國家は成立される者でない。魏公の様な人があつてこそ、始て安泰なのである。王城の東に王公の家があるが、其處には繁茂した三本の槐がある。その槐こそは實に魏公の徳の表徴である。さて、何と立派ではなからうか。

表忠觀碑

蘇 東 坡

觀とは、道教の寺院をいふ。

五代の人錢鏐字は具美は、梁の太祖に識られて吳越王に封せられたが、宋が天下を一統してから後、其子孫は宋に歸順した。其忠節を表彰する爲め此の「表忠觀」を建立し、東坡が此碑文を書いたのである。

熙寧十年十月戊子。資政殿大學士。右諫議大夫。知杭州軍事。臣抃言。故吳越國王錢氏墳廟。及其父祖妃夫人子孫之墳。在錢塘者二十有六。在臨安者十有一。皆蕪穢不治。父老過之。有流涕者。

【字義】 ○蕪穢 土地が荒れ、雜草が茂つて居ること。○臣抃 趙抃字は閱道、衢州西安の人。

【釋義】 熙寧十年十月戊子の日、資政殿大學士、右諫議大夫で、杭州の知軍事の臣抃が申上げます。故の吳越國王錢氏の墓や廟や、又は其の父祖、妃、夫人、子孫等の墓で、錢塘に在る者が二十六、臨安に在る者が十一でございますが、皆雜草生ひ茂つて、誰も手をつける者もなく、荒涼な有様で、土地の老人どもで、此地を通行する者は、昔時錢氏が隆盛を極めて居た時の事などを考へて、落涙する者があるといふ次第でございます。

謹按 故武肅王鏐始以鄉兵破走黃巢。名聞江淮。復以八都兵討劉漢宏。并越州。以奉董昌。

而自居於杭及昌以越叛則誅昌而並越盡有浙東西之地傳其子文穆王元瓘至其孫忠獻王仁佐遂破李景兵取福州而仁佐之弟忠毅王俶又大出兵攻景以迎周世宗之師其後卒以國入覲

【字義】○武肅 錢鏐の諡。○黃巢 唐の懿宗皇帝の咸通の末年、大飢饉があつた時、黃巢は亂を作し、僖宗皇帝の時に至つて、大齊皇帝と僭號した。○八都兵 八軍團のこと、杭州刺史董昌が、諸縣の兵を分けて八都とした。

【釋義】 臣拊が謹んで歴史を調査致しますと、故の武肅王錢鏐は、最初、土地の兵を率ゐて黃巢の賊を擊破つて、武名が江淮地方に高くなり、更に復、八都の兵を率ゐて劉漢宏を征討して越州を併合し、杭州の刺史董昌を擁立して自分は杭州に居りましたが、昌が越の地方を以て叛いてから、昌を誅殺して越をも自分の領地に併合し、そして盡く浙州の東西地方を併有して、其子文穆王元瓘に傳へ、孫の忠獻王仁佐の代になつて、南唐の主李景の兵を破つて、福州を取り、そして仁佐の弟の忠毅王俶が、又非常に兵士を繰出して李景を攻め、周の世宗の軍隊を迎へましたが、其後、宋が天下を一統されてから、領地領分一切を差出して歸順致しました。

三世四王與五代相終始天下大亂豪傑蜂起方是時以數州之地盜名字者不可勝數既覆其族延及于無辜之民罔有子遺

【字義】 ○三世四王 武肅王鏐、文穆王元瓘、忠獻王仁佐、忠懿王俶の四王、世數でいふと、忠懿王俶は忠獻王仁佐の弟であるから 世數に入れない。○無辜之民 罪もない民。○子遺 子は單獨の義、即ち一人位だけのこること。

【釋義】 此の三代の四王は實に五代の争亂と終始したのでござりますが、(五代の始から終までの時に當つてゐる) 唐末から五代になるまでは、天下の騷亂は極點に達し、豪傑は各地に蜂が騒ぎたつ様に起りましたが是の時に數州の地を占領して、名號を盗んで(人臣でありながら尊號を稱すること)王と稱したりして居た者は、計算の出来ない程の多數で、自分の一族を滅亡させ、其上罪のない人民に迄も禍を惹き及ぼし、殆ど一人だけでも生き残る者はないといふ次第でござりました。

而吳越地方千里帶甲十萬鑄山煮海象犀珠玉之富甲於天下然終不失臣節貢獻相望於道是以其民至於老死不識兵革四時嬉遊歌舞之聲相聞至于今不廢其有德於斯民甚厚

【字義】 ○地方千里 土地を正方形にし、直径千里あること。○鑄山煮海 山で錢を鑄造し、海から鹽をとる。○珠玉 水産のたまを珠といひ、陸産のたまを玉といふ。○兵革 兵は刃物きれ物、革はよろひ。【釋義】 斯様な時代であつたのに拘はらず、錢氏の態度は實に立派な者でござりました。一體、吳越の地は方千里もあるやうな廣大な土地で、兵士は十萬を備へて居り、領地内の鑛山で錢を鑄、海の鹽を採り之を煮て銅鹽の利があり。象牙、犀角、珠玉などの物資は如何にも豊富で、殆ど天下に並ぶ者もない程の土地柄

でございますのに、最後迄人臣の盡すべき道を失はず、貢物獻納品は、道路にひききりない位でございます。こんな譯で、此土地の人民は、一生の間戦争などは見た者もないといふ有様で、春夏秋冬の四時を通じて樂しげに遊び暮し、歌舞音曲の聲は今日まで絶えないのでございます。是て觀ても錢氏が人民に對しての恩徳が深いのが、十分了解されます。

皇宋受命四方、僭亂以次削平。西蜀江南負其險遠、兵至城下、力屈勢窮、然後束手。而河東劉氏百戰守死、以抗王師、積骸爲城、醜血爲池、竭天下之力、僅乃克之。獨吳越不待告命、封府庫、籍郡縣、請吏于朝、視去其國、如去傳舍、其有功於朝廷甚大。

【字義】 ○西蜀 後蜀の孟昶。○江南 南唐の李煜。○河東劉氏 劉晏。○告命 上からの申渡し。○籍 帳簿に記載すること。○傳舍 宿場の旅舎。

【釋義】 處が、我が宋朝が天命を受けて、天下に君臨しましてから以來、四方に於ける僭稱者、(尊號を稱する者) 又は叛亂者は、次第次第に土地を削り取られて平定されることとなりましたが、其中で、西蜀を據有して居た孟昶、(丑兩切) 江南の李煜などは、土地が險阻であり、距離の遠隔を恃んで仲仲屈服致しませんでした。そこで天兵が城下迄推寄せた爲め、力屈し勢窮して、始て降參致しました。殊に河東の劉晏などは、百戦して命がけで守り、そして官軍に反抗し、官軍は死骸を積み重ねて城とし、血を流しこんで池とするといふ様な難戦苦闘を致しまして、僅に打勝つことが出来たといふ有様でございましたのに、唯獨吳王の錢氏だけ

は、別にからの御沙汰があつたのでもなく、自發して器物財産の倉庫に封印を施し、郡縣の人口其他を帳簿に記載し、引續の官吏の派遣を朝廷に願出て、永の領地を引拂ふが、旅館を引拂ふと同様でございます。錢氏が朝廷に對しまつりての功績は、實に莫大と申して差支へません。

昔寶融以河西歸漢。光武詔右扶風修其父祖墳塋。祠以太牢。今錢氏功德過於融而未及百年。墳廟不治。行道傷嗟甚非所以勸獎忠臣慰答民心之義也。

【字義】 ○寶融 後漢の光武皇帝の時、融は五郡の太守を率ゐて入朝した。そこで帝は融を冀州の牧にした。○右扶風 寶融の父祖の墳地所在地。○太牢 牛羊豚を用ゐる料理。

【釋義】 昔、後漢の寶融は、自分の領有して居た河西の土地を差出して漢に歸順致した所、光武帝は右扶風に詔を下して、融の父祖の墳墓を修繕し、太牢の料理を饗して之を祭せられたといふ實例がございます。今、錢氏の功績恩徳は寶融に優つて居りますのに、まだ百年をも経過致さないのに、墳墓祀廟も荒果た儘、修繕も致さず、通行の人人は其全盛の時を追憶して、傷心嗟歎するといふ様では、決して忠臣を勸め獎め、民心を慰める所の方法ではござりません。

臣願以龍山廢佛祠、曰妙因院者爲觀。使錢氏之孫爲道士、曰自然者居之。凡墳廟之在錢塘一者、以付自然。其在臨安者、以付其縣之淨土寺。僧曰道微、歲各度其徒一人。使世掌之。籍其地

之所入。以時修其祠宇。封植其草木。有不治者。縣令丞察之。甚者易其人。庶幾永終不墮。以稱朝廷待錢氏之意。臣抃昧死以聞。制曰。可。其妙因院改賜名表忠觀。銘曰。

【字義】 ○道士 道教の僧侶。 ○度 僧となる。 ○味死 死罪を冒すこと。 ○制 詔のこと。

【釋義】 臣がお願い致します、どうか龍山に任る無住の寺院の妙因院と申す者を道觀(道教の寺)と致し、錢氏の子孫で自然と名乗つて居る道士(道教の僧)を其處に住職とさせ、凡そ錢氏の墳墓祀廟で、錢塘地方に在る者は、之を自然に交付して管理させ、臨安方面に在る者は、其縣の淨土寺の僧侶で道觀と申す者に交付し、其金子で祠堂を修繕し、樹木等を植ふつけさせ、倘しも之をなげやりにする者がある時は、其縣の令又は丞が之を取調べて、極端な者がある時は、其住職を取易へたいと存じます。斯様に致しますと、どうか永久に回向も廢されず、そして朝廷が此錢氏を御待遇になる厚い思召に稱うだらうと存じます。臣は敢て死罪を冒して上聞に達する次第でございますと、そこで詔で「其通りにするが好い」とのお仰せがあつた。そして妙因院は、新規に表忠觀と名を賜はつた。銘は

天目之山。蒼水出焉。龍飛鳳舞。萃于臨安。篤生異人。絶類離羣。奮挺大呼。從者如雲。

【字義】 ○龍飛鳳舞 山勢は龍が飛び鳳凰の舞ふ様だ。 ○奮挺 奮つて挺てる。

【釋義】 吉州の天目山は、蒼水の水源地である。此天目の山勢は丁度龍が飛び鳳凰が舞ふ様で、うねうねとして直ちに臨安地方に集つて來て居る。由來、山水秀麗の地には偉人が出るといふことであるが、正しく其通りであつて、此處に異人があらはれた。其人は世にも稀なる俊豪で、遙に人類を超越し、羣生を藻拔けて居り陣頭に立つて身を挺んで一呼すると、集り従ふ者は雲の簇る様であつた。

仰天誓江。月星晦蒙。强弩射潮。江海爲東。殺宏誅昌。奄有吳越。金券玉册。虎符龍節。

【字義】 ○仰天誓江 錢鏐が劉漢宏の將辛約と戦つた時、揚子江を渡らうとしたが、餘りの月明で、夜襲に不便であつた。其時錢は天を仰いで「自分は義兵を以て賊を討つのである。天若し自分を助けるなら、夜どうり雲が出て月を蔽つて戴き度い」といつたら、俄に雲霧が起つて、四方が眞暗くなつた。○殺宏誅昌 劉漢宏、董昌のこと。○奄有 残らず取る。○金券玉册 鐵で作つた札。功勞を賞するもの、立派な材料に書いてある書き物。○虎符龍節 天子から將軍に下付されるわりふ。兵を徵す時に使用する。

【釋義】 劉漢宏を討たうと揚子江の頭まで往つた時、折しも月夜で、皎皎たる月光は四邊を照して、敵前渡河するに不便であつた。そこで天を仰いで江に誓ひ雲が月を蔽ふ様に祈つたら、忽ち雲が出て月光を蔽ひ晦冥なつた。遂に河を渡つて賊を破つた。又、或る時は、潮が堤防に衝激つて破壊の虞があつたから、強い石弓で、打寄せて來る潮を射たら、是から潮流は東の方に廻る様になつた。斯様にさまざまの苦心をして、とうとう劉漢宏や董昌を誅殺して、吳越地方を領有し、後唐の莊宗から金券玉册を賜ひ、功勞を表彰され、虎

符龍節を下付されて、忠節を旌表された。

大城^ニ其^ノ居^ヲ包^シ絡^シ山川^ヲ。左^ニ江^ヲ右^ニ湖^ヲ控^シ引^キ島^ヲ巒^ヲ。歲^ニ時^ニ歸^シ休^シ以^テ燕^ス父^ヲ老^ヲ。曄^ク如^ク神^人。玉^ノ帶^ヲ毬^ノ馬^ヲ。

【字義】 ○包絡 つつみ纏ふこと。○燕 讌に同じ、饗應すること。○曄 かがやくこと。○毬馬 打毬に使用する馬。

【釋義】 いよく吳越の王ともなつたから、そこで立派に居城を造營したが、其地勢は山や川を包みまとい左に揚子江あり、右には洞庭湖を控へ、諸島の巒夷を服従させた。そして時時休養の爲め故郷へ歸り、老人共を集めて酒宴を開いたが、其風采の立派なこと、殆ど神のようで、玉帯を纏ひ毬馬に騎つた様子は、譬へ様もない程である。

四十一年寅畏小心。厥篚相望。大貝南金。五朝昏亂。罔堪託國。三王相承。以待有德。

【字義】 ○寅畏 つつしみおそれる。○篚 竹製のかご。○大貝 車渠、眞珠の類。○南金 南は荊州揚州地方をいふ。南方に産出する貴金屬。○五朝 五代をいふ。○大貝 車渠、眞珠の類。○南金 南は荊州揚州

【釋義】 四十一年間、小心翼翼として、篚に入れた貢物を、宋朝に進獻して絶えたことがなかつた、さて其貢物はどんなものかといふと、眞珠車渠の類や、南地の貴金屬や、いづれも立派なもの許りであつた。一體五代五十餘年間といふものは、どの君主も皆昏亂暴亂な者許りで、到底、吳越を託することは出来なかつた

から、三代が承繼いて、有徳の天子の出現を待つて居た。

既獲所歸。弗謀弗咨。先王之志。我維行之。天^ヲ昨^シ忠^ニ孝^ヲ。世^ニ有^リ爵^ノ邑^ヲ。允^ク文^ヲ允^ク武^ヲ。子^ノ孫^ノ千^億。

【釋義】 宋が天下を一統することになつて、始て歸順する所が出来、直様斷行して、誰れに謀ることも許ふこともしなかつた。それは外でもない、先王の志を自分が實現するまでであるからだ。天は其忠孝にむくい

て、代代爵位領土を與へたが、文武兩道兼ね備へて、子孫繁榮した。帝謂守臣。治其祠墳。母俾樵牧。愧其後昆。龍山之陽。歸焉斯宮。匪私于錢。惟以勸忠。非忠無君。非孝無親。凡百有位。視此刻文。

【字義】 ○後昆 後世子孫といふほどのこと。○歸焉 高大堅固の貌。

【釋義】 其後、神宗皇帝の御世となつて、帝は其地の知事趙并に命ぜられて「錢氏代代の祠堂墳墓を修繕し樵夫牧豎などに亂暴させて、錢氏の子孫を愧かしめない様にせよ」とのことであつた。龍山の南方に高大な此の建造物は、決して錢一家に私する譯ではない、全く其忠節を表彰して、天下に忠義を勧めらるる思召に外ならない。さてさて忠がなければ君をないものとし、孝がなければ親をないものとする。此忠孝があつてこそ國家は平穩なのである。凡そ有位の君子、此碑文を見て忠孝を獎勵する所あれ。

送孟東野序

韓文公

孟東野、名は郊、東野は其字。少き時から嵩山に隱居して居た。韓文公一見として忘形の交を結び、之と詩文を唱和した。年五十で始て漂陽の尉と爲つたが、毎日詩ばかり作つて、公務は殆ど投擲であつたといふ。卒して貞曜先生と諡した。

大凡物不得其平則鳴。草木無聲。風撓之鳴。水之無聲。風蕩之鳴。其躍也。或激之。其趨也。或梗之。其沸也。或灸之。金石之無聲。或擊之。鳴人之於言也亦然。有不得已而後言。其詞也有思。其哭也有懷。凡出乎口而爲聲者。其皆有弗平者乎。

【釋義】凡そ宇宙間の萬物、一たび其平靜を失うと鳴るものである。草木の如きものは、本來音も聲もないものであるが、風が吹いて之を撓すと鳴る。木も同様、本來聲はないが、風が吹いて之を蕩すと鳴るのである。そして水の鳴るにも鳴り方が種種あつて、躍り上つて鳴るのは、水勢を激するからであり、奔流千里といふ様に滔滔として鳴るのは、限域を塞ぐからであり、水が沸騰するのは、之を炙るからである。又、金屬や石などの聲のないものでも、之を撃つと鳴るのである。人間が言語に於けるも矢張り同様である。何か平靜を缺くことがあつて、そこで言ふのである。口に出して歌ふのは、心に何か思つて居るからで、聲をあげて泣くのは、胸に懷つて居るからである。凡て口から出て聲と爲るには、皆平靜を缺くからであらう。

樂也者鬱於中而泄於外者也。擇其善鳴者而假之鳴。金石絲竹匏土草木八者物之善鳴者。也。維天之於時也亦然。擇其善鳴者而假之鳴。是故以鳥鳴春。以雷鳴夏。以蟲鳴秋。以風鳴冬。四時之相推奪。其必有不得其平者乎。

【字義】○金 鐘の類。○石 磬。○匏 笙。○土 土を焼いて作つた樂器。○革 鼓の類。○木 木で作つた樂器。○祝 祝。○推 推。○順 順する。○擗 擗する。○土 土を焼いて作つた樂器。○革 鼓の類。○木 木料を擇んで、それによつて鳴るのである。鐘や磬や琴、笛、笙、其他壘、鼓、祝敵などの八種類の物は鳴物の中でも特別に善く鳴るものである。獨、音樂許りでなく、天の四季に於ても亦同一である。皆善く鳴るものを選択して、それによつて鳴るのである。それであるから、鳥は春に鳴り、雷は夏に鳴り、蟲は秋に鳴り、風は冬に鳴るのである。斯様に夏は春を推しのけ奪ひ、冬は秋を同じく奪つて、自分の世界とするのは、必ず何か平靜を得ない者があるであらう。

其於人也亦然。人聲之精者爲言。文辭之於言。又其精者也。尤擇其善鳴者而假之鳴。其在唐虞。咎陶禹其善鳴者也。而假之以鳴。夔弗能以文辭鳴。又自假於韶以鳴。夏之時。五子以其歌鳴。伊尹鳴。殷周公鳴。凡載於詩書六藝。皆鳴之善者也。

【字義】○咎陶 舜に事へた皐陶のこと。○夔 舜の時の音樂家。○韶 舜の樂。○五子 夏の君太康が洛

水附近に吹して百日程も反らなかつた。其時有窮國の君羿が之を黄河で遮つて位を退けた。それを太康の五人の弟が歌を作つて之を悲んた。

【釋義】人間でも同様である。人間の聲の精良な者は言語である。そして文章は言語の中で更に精良な者である。故に人はその尤も善く鳴る文章を假つて鳴るのである。之を歴史に徴すると、唐虞時代には、皋陶や禹は善く鳴つた者であるが、皆文章を假つて鳴つた。『書經』に「大禹謨」、「皋陶謨」などの諸篇が載つて居る。夔は舜の樂官で、文章を假つて鳴ることが出来なかつた代りに、韶といふ樂を假つて鳴つた。夏の時代には、五子が「五子之歌」を作つて鳴つた。伊尹は殷の湯王に事へて鳴り、周公は周の成王に事へて鳴つた。すべて『詩經』、『書經』などの六經に載つて居る文章は、鳴り方の尤も善いもの許りである。

周之衰孔子之徒鳴之其聲大而遠。傳曰天將以夫子爲木鐸其弗信乎其末也。莊周以其荒唐之辭鳴於楚。楚大國也其亡也以屈原鳴。臧孫辰孟軻荀卿以道鳴者也。楊朱墨翟管夷吾晏嬰老聃申不害韓非慎到田駢鄒衍尸佼孫武張儀蘇秦之屬皆以其術鳴。

【字義】○傳『論語』八佾篇中の語。○木鐸 金屬に木の舌のついて居る鈴の様な物。古代では官吏が人民に命令法律などを示す時に鳴らしたもの。轉じて學者などが世をみちびき教をしく者にたとへて用ゐる。○莊周 莊子をいふ。○荒唐 廣大でとりとめのない言葉。○屈原 楚の臣。『離騷』を著はす。○臧孫辰 魯の大夫臧文仲。○晏嬰 齊の景公の相、晏子。○申不害 韓の昭侯の相。○慎到 韓の大夫。○韓非 韓の公子。○田駢 齊の人。史記孟子荀卿列傳の索隱に、駢音歩堅反(へん)又步經反(へい)の二音がある。○鄒衍 燕の人。○尸佼 魯の人。○孫武 齊の兵法家。○張儀 魏の人。○蘇秦 洛陽の人。

【釋義】周が衰微してからは、孔子の仲間が鳴らしたが、其聲は高大で、其上遠く後世迄も傳はつて、『論語』にも「天は先生(孔子)を世の警醒者としやうとして居るのであらう」と出て居るが、なんと眞實ではなからうか。さて周の末となつては、莊子は廣大でとりとめのない言論で、楚國に鳴つた。一體、楚は大國であるが、其滅亡の間際には、屈原が鳴つた。此他、魯の臧孫辰、孟子、荀子などは皆道を説いて大に鳴つたが、更に楊子は利己主義、墨子は兼愛主義、管仲は「管子」、晏子は「晏子春秋」、老聃は「老子」、申不害は「申子」、韓非は「韓非子」、などを著はし、慎子の法術、田駢の談天、鄒衍の陰陽の理、尸子の言論、孫武の兵法、張儀蘇秦の連衡合従などと、各、自分の術で世に鳴つた。

秦之興李斯鳴之漢之時司馬遷相如揚雄最其善鳴者也其下魏晉氏鳴者不及於古。然未嘗絶也。就其善鳴者其聲清以浮其節數以急其辭淫以哀其志弛以肆其爲言也亂雜而無章將天醜其德莫之顧耶何爲乎其不鳴其善鳴者也。

【字義】○李斯 秦の始皇の相。○司馬遷 『史記』を著はす。○司馬相如 賦を作るに巧な人。○揚雄 『揚子法言』を著はす。○數 調子のせせつこましいこと。

【釋義】秦が興起してからは、李斯が大に鳴つた。降つて漢の時代となつては、司馬遷、司馬相如、揚雄な

どは、或は歴史又は詞賦著作等で非常に鳴つた者である。其以後で、魏、晉からは、鳴りは鳴つたが、鳴り方は到底古に及ばないが、併し、鳴るのが絶えた譯ではない。とはいふ者の、其中で善く鳴つた者でも、其聲は清く澄んで居るが、落著いた所がなく、節廻はせはしくて、ゆつたりとせず、其文句は淫がましくて哀氣を含み、其思想はだらけてしまりがなく、言ふ所は不規律であやがないのである。是はなんと魏は漢の天下を奪ひ、晉は魏の天下を奪つて帝位に即いたのだから、天が其徳の下劣を悪んで、之をふりかへて見ない爲であらうか。どうして善く鳴るべき文才の優れた人を假つて、鳴らさなかつたであらうか。

唐之有天下。陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李觀、皆以其所能鳴。其存而在下者。孟郊、東野、始以其詩鳴。其高出魏晉、不懈而及於古。其他浸淫乎漢氏矣。

【字義】 ○陳子昂 字は白玉、則天武后の時、靈臺正字と爲つた。○蘇源明 京兆武功の人、祕書少監となる。○元結 字は次山。灤州の人。○李白 字は太白。蜀の人。○杜甫 字は子美。襄陽の人。○李觀 字は元賓。○浸淫 水がしみこむこと。

【釋義】 唐が天下を一統してから、陳子昂、蘇源明、元結、李白、杜甫、李觀等は、皆自分の特長で鳴つた。今日まで存在して、しかも下位に居る者では孟郊字は東野が、最初から詩で鳴つて居る。其調子の高いことは、魏晉時代の作者より遙に超越して居るのだ。今後、益々奮勵努力したなら、古人と肩を比べる様になれるであらう、よしそれまで往かなくとも、漢代の作者位には、追追進んで往けるだらう。

從吾遊者。李翱、張籍、其尤也。三子者之鳴。信善鳴矣。抑不知天將和其聲。而使鳴國家之盛耶。抑將窮其身。思愁其心腸。而使自鳴其不幸耶。三子者之命。則懸於天矣。其在上也。奚以喜。其在下也。奚以悲。東野之役於江南也。有若不能釋然者。故吾道其命於天者。以解之。

【字義】 ○釋然 うちとけること。

【釋義】 自分に從つて學んで居る者の中では、李翱と張籍が特別に優秀な者である。即ち孟東野及び翱籍の三人が鳴るは、實際に善く鳴る者である。或は三人の聲を和らげさせて、國家今日の太平を鳴らさせやうとするのであらうか。但しは其身體を困窮飢餓に陥れ、其心や腸に心配させて、自分で境遇の不幸を鳴らさせやうとするのであらうか。三人の命運は天にあることであるから、縱令、上の位地に在つたとて、別に喜ぶ必要もなく、下位に居たとて悲むことも何もないのである。東野が江南の溧陽尉と爲つて赴任するに方つて官位が卑い爲め、心にうちとけない様子が見える。それ故に自分は何事も皆天命であることを言立てて、之を慰藉するのである。

前赤壁賦

蘇東坡

宋の神宗皇帝の元豐年間、東坡は王安石と議論が合はなかつた爲め、黃州に左遷され、家を東坡に建築して自ら東坡居士と號した。此五年の七月に赤壁に遊び、又十月にも遊んで、前後俱に賦が出来たが、前の字を

つけたのは、後赤壁に對してである。

赤壁は揚子江岸に在る地名で、湖北省武昌府嘉魚縣の西に赤壁山があり、其北岸に烏林といふ地があるが、此處が即ち周瑜が曹操を破つた處であつて、東坡の遊んだ處は、黃州の赤鼻山を認めて其古戰場としたもので、全く東坡の誤解であつたのだ。

賦とは古詩の一體で、韵語を使用して其事を敘べるもので、漢魏六朝時代は、非常に盛んであつたが、唐以後は、詩の方が盛んになつて、賦は餘り顧みられなかつたものである。

壬戌之秋。七月既望。蘇子與客泛舟遊於赤壁之下。清風徐來。水波不興。舉酒屬客。誦明月之詩。歌窈窕之章。

【字義】 ○壬戌 元豐五年。○既望 望は陰曆の十五日、既望は十六日。○明月之詩 『詩經』陳風月出篇を指す。此詩は在位者が徳を好まず唯、酒色を悦ぶのを刺つた者で、東坡も在位者を諷した者であらう。○窈窕之章 『詩經』周南關雎篇の「窈窕淑女。君子好逑」を指すといふ説と、明月篇の中の窈窕を指すとの二説があつて一定しないが、姑く後者に從つて置かう。

【釋義】 元豐五年七月十六日、自分は一客と小舟を泛べて、有名な古戦場の赤壁山の下に遊んだ。涼しい風がそよそよと吹き渡つて、それが波を立てない程度で吹いて來るのであつた。そこで用意の酒を注いで客にすしめ、明月の詩を暗誦し、窈窕の一章を節をつけて歌つて、爽快此上がなかつた。

欠

欠

知つて居られるであらう。水は混混として流れて已まないのは彼の通りであるが、見方によつては相變らず舊のまま流れて居るものといへる。月の満ち虧けるのは彼の通りであるが、其本體は決して消えたり大きくなつたりはしない。故に相對的方面から、物は變化する者だといつて觀察すると、天地は悠久だと認めて居るが、實は一とまたたきする程も保たない短い生命であり、一方、絶對的方面から、變化しない者だといつて觀察すると、天地萬物はいふに及ばず、我我に至る迄、其生命は無窮であるのだ。それを何もそんなに水や月を羨んだりすることがありません。

且夫天地之間物各有主苟非吾之所有雖一毫而莫取惟江上之清風與山間之明月耳得之而爲聲目遇之而成色取之無禁用之不竭是造物者之無盡藏也而吾與子之所共適

【字義】 ○造物者 天地創造の神。○無盡藏 何程取出して使つても盡きない藏。○適 氣に向くこと。

【釋義】 且、天地間の所有物には、皆それ／＼持主があるのだから、苟も自分の所有でなければ、縱令一本の毛ほどの微細たるものでも、勝手に之を取ることには出来ない。惟、揚子江上を吹く清風と、山間に輝いてゐる明月とは、耳には之を聞いて涼しい聲として樂み、目には之を見て美しい色として眺められるが、さて之を取つても誰も禁止する者はなく、之を用ゐても更に盡きるのではない。是こそ天地創造の神が、我々に附與された無盡藏といつて差支へない。そして自分と貴君とが、共に氣に入つて樂む所の者であります。

客喜而笑洗盞更酌肴核既盡杯盤狼藉相與枕藉乎舟中不知東方之既白

【字義】 ○蓋 杯のこと。○肴核 肴は魚肉の類、核は果實の類。○狼藉 とりみだすこと。○枕藉 縦横に相枕し、重り合つて臥ること。

【釋義】 自分の此慰藉の言葉によつて、今迄洗んで居た客も喜んで笑ひ出した。そこで杯を洗つて改めて飲んだ。肴類は最早喰荒し、杯や盤(皿)にとりみだされた。酩酊の擧句、一同舟の中に重り合つて臥り、東の方が白んだのも知らなかつた。

後赤壁賦

蘇東坡

是歲十月之望。步自雪堂。將歸于臨臯。二客從予。過黃泥之坂。霜露既降。木葉盡脫。人影在地。仰見明月。顧而樂之。行歌相答。

【字義】 ○雪堂 東坡の別莊。大雪の降つて居る最中に落成したので、此名をつけた。○臨臯 東坡の本宅。【釋義】 是の歳十月十五日。自分の別莊の雪堂から歩行して、本宅の臨臯亭に歸らうとした。是時、二人の客が自分について来て、三人で黄泥坂を通つた。すでに季節は初冬であつて、霜も露も降り、四邊の木葉は、残らず落ち盡し、人影が地上にありありと映つたから、ふと空を仰ぐと、皎皎たる明月が出て居た。景色を眺めて樂み、歩行しながら歌を歌ひ合つて家路に赴いた。

已而歎曰。有客無酒。有酒無肴。月白風清。如此良夜。何客曰。今者薄暮。舉網得魚。巨口細鱗。狀似松江之鱸。願安所得酒乎。

【字義】 ○松江之鱸 松江は今の江蘇省江寧府華亭縣に在る。此地産する所の鱸魚は、他處のものとはちがつて、特別に美味とのことである。

【釋義】 そうして居る中に歎じていふに、「折角の珍客があるのに、饜應するに酒がなく、縱令酒があつても肴がない。月は斯様に明に、風は此通り清い。それであるのに此良夜を徒らに過すとは、實に残念である」と。そして客が、「今日の夕方、自分は網を擧げたら魚がかかつて居た。其魚は口が大きく鱗が細く、其狀は松江でとれる鱸に似て居た。こんな魚があるから、肴には心配ないが、なんと酒を得る方法はないものでせうか」といつた。

歸而謀諸婦。婦曰。我有斗酒。藏之久矣。以待子不時之需。於是携酒與魚。復遊於赤壁之下。江流有聲。斷岸千尺。山高月小。水落石出。曾日月之幾何。而江山不可復識矣。

【釋義】 そして臨臯の自宅に歸つてから、此事を自分の妻に相談したら、妻が「實は私は一斗許りの酒を貯藏して居るのが久しい閒であります。それは貴君が臨時の御用の用意でありました」といつて出して呉れた。いよく酒も魚も調つたから、之を携へて、ふたたび赤壁の下に遊んだ。江流は音を立てて居り、削つた様

な岸に千尺もあらうかと思はれる許り、山は高く聳え月は非常に小さく見え、水嵩は減つて、石は水中から頭を出して居るといふ光景であつた。前遊から今日まで、一體、日月は何の位を経過したのだらう、僅に九十日餘りのものであるのに、變れば變るものである、江や山は、前遊の眼では、認め識られない程の大變化であつた。

予乃攝衣而上履巖披蒙茸踞虎豹登虬龍攀栖鶻之危巢俯馮夷之幽宮蓋二客不能從焉劃然長嘯草木震動山鳴谷應風起水涌予亦悄然而悲肅然而恐凜乎其不可留也反而登舟放乎中流聽其所止而休焉

【字義】 ○巖 けはしいい。○蒙茸 草木の生ひ茂つて居ること。○虎豹 虎や豹に似た岩。○虬龍 龍の形をした木の「ぼく」。○栖鶻 鶻は鷹の屬、「はやぶさ」、高い處に巢くふもの。○馮夷 水神。○劃然 物を刀で切る時の聲。○悄然 憂ひ悲しむさま。○肅然 畏れるさま。○凜乎 ぞつとするさま。

【釋義】 自分はそこで此絶壁を登つて見やうと思立ち、衣物の褌をつまどり、けはしい巖を履み越え、草木の茂みをかき分け、或る時は虎豹に似た石に腰を掛け、或る時は虬龍に似た古木ののぼり、鶻が栖んで高い處に巢をかけて居るあたりを攀ちのぼり、水の神の隠れて居る奥深い宮殿を見下したりしたが、同行の二人は附隨て來られなかつた。いよいよ頂上に達してフーツと口から息を出すと、あたりの草木は震動し、山は鳴り出し谷は反響し、風さへ起つて水は涌きかへり、凄惨な光景と變つた。自分も之を觀ると、悄然として悲

しい心が起り、肅然として恐ろしくなり、ぞつととても長く留つて居られなかつたから、早速下りて舟に乗り、川の中流に流して、舟の往くに任せて暫時休んだ。

時夜將半四顧寂寥適有孤鶴橫江東來翅如車輪玄裳縞衣晏然長鳴掠予舟而西也須臾客去予亦就睡夢一道士羽衣蹁躚過臨臯之下揖予而言曰赤壁之遊樂乎問其姓名僂而不答嗚呼噫嘻我知之矣疇昔之夜飛鳴而過我者非子耶道士顧笑予亦驚悟開戶視之不見其處

【字義】 ○玄裳縞衣 黒いもすそに、白い上衣。○晏然 金石のうち合ふ聲の形容。○蹁躚 ちらちらとめぐりあるく貌。○疇昔 昨夜。

【釋義】 丁度、是時はすでに夜中頃で、四方を見廻して見るに、如何にもさびしかった。折しも一羽の仲間はずれの鶴があつて、揚子江を横ぎつて東の方から飛んで來た。翼の大きいことは車輪ほどあつて、黒いもすそに白い上衣で、クワク、クワクと鳴聲を長く引いて、自分の舟をすれすれに通つて西へ往つた。須臾して二客は去つて自分も家に歸つて寢たら、夢に一人の道士が、羽衣の衣を身に纏つて、ひらくめぐりあるきながら、臨臯亭の下に來て、自分に挨拶していふに「赤壁の舟遊は、愉快でしたか」と。不思議に思つて其姓名を問うたが、うつむいたままで、何の返答もない。「さてさて自分は知つて居る。昨日の夜、鳴きながら

飛んで往つた鶴は、お前でなかつたか」といつたら、道士はふりかへつて笑つた。自分も其聲に驚いて目を覺まし、戸を開けて見廻はしたが、誰も其近邊に居なかつた。

阿房宮賦

杜牧之

秦の始皇三十五年、咸陽の都は人が多勢住んで居るのに拘はらず、先王の宮殿は餘り小さいといふので、そこで朝宮を渭水の南、上林苑中に造營し、先づ前殿を阿房に作つた。東西は五百步、南北は五十丈で、殿下から直横南山に往ける様にし、南山の巔には闕門を爲り又、上下二重の道を爲つて君臣の往來を別別にし阿房から渭水を渡つて咸陽宮に續けた。此宮殿は工事完成しない中に、秦は滅亡したから、人人唯、阿房宮と呼んだ。阿房とは其宮の四阿の旁廣なる形をいふのである。

作者の杜牧之は名は牧、牧之は其字である。官は僅に刺史に爲つたに過ぎなかつた。自分が死ぬる前に、平生爲つた文章一切を焚棄て、自身で墓誌を爲つた。牧之の詩は豪邁の氣に富んで居た、人呼んで小杜といひ、彼の杜甫字は子美と區別した。

六王畢四海一、蜀山兀、阿房出、覆壓三百餘里、隔離天日、驪山北構、而西折、直走咸陽、二川溶溶、流入宮牆。

【字義】 ○六王 韓、魏、趙、燕、齊、楚。○覆壓 おほひかぶさること。○二川 渭水と涇水と。○溶溶

水の盛んなること。

【釋義】 秦王は僅僅數年間に、韓、魏、趙、燕、齊、楚の六國を滅ぼし畢つて、天下を一統し、皇帝の位に即いた。そこで大一統の皇帝の帝都を飾るべく、土木の大工事が興され、蜀地の大森林を伐採し、すつかり之を禿山にして、ここに阿房宮は落成した。宮殿の廣大なことを、三百餘里の面積の上をおほひかぶせ、巖然として高く聳えて太陽を遮斷して居る。其位置は驪山の北から建てて西の方に折れ曲り、驪地に咸陽の首都に續き、渭水涇水はどんどんと扉の中へ流れ込んで居る。

五步一樓、十步一閣、廊腰縵回、簷牙高啄、各抱地势、鉤心鬪角、盤盤焉、囷囷焉、蜂房水渦、蟲不訢、其幾千萬、落長橋、臥波、未雲何龍、復道行空、不霽何虹、高低冥迷、不知西東、歌臺煖響、春光融融、舞殿冷袖、風雨凄凄、一日之內、一宮之間、而氣候不齊。

【字義】 ○簷牙 簷の先が曲つて獸の牙のやう。○鉤心 廻廊のうねつて居るは鉤の手のやう。○鬪角 簷の角と角が湊つて獸類が鬪ひ合つて居るやう。○盤盤焉 めぐる貌。○囷囷焉 曲りくねる貌。○蜂房 雨垂が落ちる處に瓦を敷詰つて、蜂の巢のやう。○蟲 眞直で長いこと。○複道 上下二重の道。上は天子の通路、下は臣下の通路と別たれて居るもの。○冥迷 長短ふそろひで、入りまじること。○融融 和き樂む貌。○凄凄 さむいこと。

【釋義】 五步に一樓、十步に一閣(たかの)あり、廻廊はゆるく之をとりまき、簷は牙の如く突出て、高く

空中に聳えて、鳥が物を啄む^{つつかむ}恰好である。此幾多の樓閣は、各地勢の高下によつて建築されて居り、廻廊は鉤の手に、簷端は角を闢はせ、或は曲りくねつて居る。雨垂れ落ちの樋は瓦が一杯敷き詰めてあつて、蜂の巢のやうであり、落ちる雨垂れは、渦をまきながら真直に落ちて来るのが幾千萬條に分らない。渭水溼水に架渡した長い橋は、雲もないのに龍があらはれたのだらうか、二重の道が空中高く架けられて居るのは、雨上りでもないのに、虹が出たやうに見當がつかない。此大建築物中で、音曲臺で音曲を奏すると、其暖い響は春の日の和む心地になり、舞殿の舞の袖のひらめくは秋の清氣を聞けば春、舞を見れば秋の清氣

妃嬪媵嬙王子皇孫辭樓下殿整
梳曉鬢也渭流漲膩棄脂水也煙
知其所之也一肌一容盡態極妍

歌夜絃爲秦宮人明星熒熒開粧鏡也綠雲擾擾
椒蘭也雷霆乍驚官車過也輾轉遠聽杳不
而望幸焉有不得見者三十六年

【字義】 ○妃嬪媵嬙 俱に女官を指す。媵、みまひ。嬙、みまひ。○脂水 水。○椒蘭 胡椒、蘭麝の薫い高いたき物。○杳 杳はる。○擾擾 みたれるさま。○輾轉 みたれるさま。○望幸 幸望。○有不得見者 見れぬ者。○三十六年 乗つて秦へ来て、朝夜絃歌して秦の宮中の人と爲つてしまつた。さて宮中の模様はと見ると、星がきらきら

光ると思つたら、女官が化粧の鏡を開けたのであり、緑の雲が亂れ鑲くと見たら 明方の髪を梳くのであつた。宮苑に流込んで居る渭水にあぶら／＼溢れて居るのは、おしろいの水を棄てたのであり、一抹の煙や霧が、或は斜は或は横はつて居ない宮車が通過したので、ごろ／＼か分らなくなつた。又、宮中に在らりと立ち遠くを眺めて、君王のつた者もあつた。

燕趙之收藏韓魏之經營齊楚之
鼎鑪玉石金塊珠璣棄擲邇遊

幾年取掠其人倚疊如山一旦有不能輸來其間
不遺惜

【字義】 ○收藏 倉庫にしまつてある。○經營 苦心していとむ。○精美 すぐれたもの。一説に收藏、經營、精英を美人とす。○倚疊 重ねたこと。○鎔鑪 鍋。○邇遊 狼藉のこと。【釋義】 燕趙の收藏物、韓魏の苦心の結晶、齊楚の珍奇の寶物などで、幾世幾年かかつて蒐集したか分らない貴重品をば、六國の人から掠奪し、積み重ねて山のやうで、仲仲、一朝一夕では秦へ運搬することが出来ない程で、之れを寶鼎は鍋、寶玉は石ころ、金は土の塊、珠は小石位に心得て、打棄て取亂して 秦人は別に惜いとも思はなかつた。

嗟夫一人之心千萬人之心也秦愛紛奢人亦念其家奈何取之盡鑄鉄川之如泥沙使負棟之柱多於南畝之農夫架梁之椽多於機上之工女釘頭磷磷多於在庾之粟粒瓦縫參差多於周身之帛縷直欄橫檻多於九土之城郭管絃嘯嘯多於市人之言語使天下之人不敢言而敢怒獨夫之心日益驕固戍卒叫函谷舉楚人一炬可憐焦土

【字義】○紛奢 はでやかなおこり。○鑄鉄 僅小なこと。六兩の重さを鑄といひ、一兩の二十四分を鉄といふ。○南畝 南向きの田畠。即ち耕作に最も適當した土地。○磷磷 光り耀く貌。○庾 米倉。○參差 長短齊しくない貌。○九土 支那の九州のこと。古代は支那を九分して居た。故は九土又は九州といへば、支那全土といふこと。○嘯嘯 やましましいさま。○獨夫 『書經』泰誓篇に「獨夫受」といふことが出て居る。暴虐無道で、誰も助ける者がいない人といふ義。ここでは二世皇帝を指す。○楚人 楚の項羽をいふ。

【釋義】 さてさて君主一人の心は、千萬人の心である。始皇がかうはでやかなおこりを好めば、庶民も亦自分の家を大切にしたいと思ふやうになるは、是は當然の理である。それに、どうして掠奪する時は、些細な物も見逃がさずに取上げ、さて之を用ゐる時は、泥の沙の様に惜氣なくしたのであらう。其上、棟を負つて居る柱は、耕地に出て居る農夫の數より多く、梁に架けた椽は、機の上の女工より多く、釘の頭の光つて居るのは、米倉の中の米粒より多く、瓦の葺合の喰ひ合つてゐるは、身に纏つた絲すぢより多く、縦横の欄檻は、九州の城郭より多く、笛琴などのやましましいのは、市中の人人の言語より多からしめたであらうか。こ

んな奢侈を極めたから、天下の人に、口では不平を述べられないが、心中で怒らせたのである。孤立の二世皇帝は、誰も攻撃する者がいないから、日に日に其心は驕り高ぶり、旁若無人の振舞を重れた。其結果、一守備兵の陳勝が、劈頭第一に革命を叫んだら、要害堅固とたのんで居た函谷關は、瞬間に陥落し、楚人項羽の松明で、氣の毒であるが、さしもの大建造物の阿房宮以下は、残らず焼焦げの土となつてしまつた。

嗚呼滅六國者六國也非秦也族秦者秦也非天下也嗟夫使六國各愛其人則足以拒秦秦復愛六國之人則遞三世可至萬世而爲君誰得而族滅也秦人不暇自哀而後人哀之後人哀之而不鑑之亦使後人復哀後人也

【釋義】 さてさて、六國を滅亡させた者は、六國自己であつて、決して秦が滅亡させたのではない。秦を族滅させた者は秦自己であつて、天下が滅したのではない。さて六國に銘銘自國の民を愛させて居たら、秦の攻撃を防禦するに十分であり、秦に於ても、六國滅亡後、其人民を愛してやつたら、三世からたがひく、に萬世迄も帝位を繼承して往けたのは相違なかつた。誰が仁政を施す君主に對して打滅するものがあらうか。併し、こんなことをいつても、最早や後の祭りであつて、秦人は自ら滅亡を哀むひまもなく、後世の人が之を哀むが、後世の人でも、單に秦の滅亡を哀んだ許りで、之を鑑みて驕奢を戒めなければ、矢張り、後世の人にまた後世の人(上の後世の人で秦の滅亡を哀んで之を鑑みざる人を指す)を哀しませることとなるであらう。

送李愿歸盤谷序

韓文公

李愿の事跡は詳でない。或は西平忠武王晟の子であるといふが、此人は奢侈を極めた事實があつて、隠居して道を樂むなどといふ人物でなかつた。察する所、同姓名の賢人であらう。

太行之陽有盤谷。盤谷之間泉甘而土肥。草木叢茂。居民鮮少。或曰謂其環兩山之間。故曰盤。或曰是谷也。宅幽而勢阻。隱者之所盤旋。友人李愿居之。

【字義】 ○太行 懷州に在る山の名。○盤谷 孟州濟源縣に在る地名。○叢茂 しげること。○宅幽 場處が幽靜である。○盤旋 遊びめぐる。特に隱者に用ひる語なり。

【釋義】 太行山の南に盤谷といふ土地がある。この盤谷は、源泉は甘く土地肥え、草木は繁茂して居るが、其割合に住民は案外少い。此盤谷といふ地名に就いて、或る人は「兩山の間」に圍まれて「插鉢狀をなして」居るから盤(たらひ)とつけたのだ」といひ、又、或る人は「是谷は、場處が幽靜で地勢は險阻で、隱者の遊びめぐる所だから、この名をつけた」といふが、自分の友人の李愿が此處に隱遁して居る。

愿之言曰。人之稱大丈夫者。我知之矣。利澤施于人。名聲昭于時。坐于廟堂。進退百官。而佐天子。出令其在。外則樹旌旄。羅弓矢。武夫前呵。從者塞途。供給之人。各執其物。夾道而疾馳。

【字義】 ○利澤 利益恩澤。○供給之人 用向を足す人。

【釋義】 この李愿の言に「人が大丈夫といつて、ほめられて居る所の者は、自分はよく之を知つて居る。利益恩澤を人に施し、名聞聲譽が時に高く、政事堂に坐り込んで、百官を進め退け、そして天子を輔佐して號令を出し、外出する時は、旗を樹て弓矢を持った人人に護衛され、武士は先拂をし、從者は道路にみち塞り用向を足す人共は、銘銘受持の品物を持つて、道の兩側を駆けあぐる。

喜有賞。怒有刑。才俊滿前。道古今而譽盛德。入耳而不煩。曲眉豐頰。清聲而便體。秀外而惠中。飄飄輕裾。翳長袖。粉白黛綠者。列屋而閑居。始寵而負恃。爭妍而取憐。大丈夫之遇。知於天子。用力於當世者之所爲也。吾非惡此而逃之。是有命焉。不可幸而致也。

【字義】 ○曲眉 三日月形のまゆ。○豐頰 ふつくりした頬。○便體 なよ／＼したからだ。○秀外而惠中 外部はうつくしく、心中は柔順。○黛綠 眉墨を綠色につける。○列屋 部屋をならべる。○負恃 容貌の美しいのを、たのみほこる。

【釋義】 喜ぶと賞譽が受けられ、怒ると刑罰を被るから、誰も畏れ敬はぬ者はなく、政務閑暇の折には、才俊の人人が前に列んで、古今の人を引證して、主人の盛徳を譽立てるが、それが如何にも言葉巧みに和らかく述立てるから、聽いて居る主人はうるさいとも思はない。又、三日月形の眉、ふつくりした頬の美人、聲は清らかに體はしなやかに、容貌は美しく心は柔順で、軽い裾をひら／＼させ、長い袖をふり翳し、面は白粉に眉は黛をつけた者が、銘銘、各自の部屋を並べて、唯、ぶら／＼と遊び暮し、人が寵愛されるのを妬んで

己れの容色を自慢し、美しいのを競つて主人から寵愛を受けやうとして居る。是などは大丈夫が、天子から知遇を受け、權力を當世に用ゐる者のする所である。自分はこゝにいふことを嫌つて、わざ／＼逃げ避るのではない。こんなことは皆天命があつて、決して僥倖に得られるものでないのである。

窮居而野處。升高而望遠。坐茂樹以終日。濯清泉以自潔。探於山。美可茹。釣於水。鮮可食。起居無時。惟適之安。與其有譽於前。孰若無毀於其後。與其有樂於身。孰若無憂於其心。車服不維。刀鋸不加。理亂不知。黜陟不聞。大丈夫之不遇於時者之所爲也。我則行之。

【字義】 ○車服不維 車や禮服に束縛されない。○理亂 治亂に同じ。

【釋義】 其反對に、貧困に生活して山野に隱居し、或る時は小山に登つて遠方を眺望し、或る時は茂つた樹に坐り込んで日を暮らし、清き泉に身を清めて心思を潔くし、山で採つた美味な厥類を食ひ、水で釣つた新鮮な魚類を食ひ、起るも坐るも氣が向いたまま。生前は美名を得るのは、身後に批難を受けないのと、どちらが好いか、一身に樂みあるのは、心神に憂のないと、どちらが好いか。車馬や禮服に束縛されず、刀や鋸の重刑を受けることもなく、世を捨てた身では、國家の治亂がどうであるか些しも之を知らず、官吏の進退などは勿論耳に入らず、唯、心任せに其日其日を送つて往く、是は大丈夫の世に不遇な者の爲す所であつて、自分は之を實行しやうと思ふのである。

伺候於公卿之門。奔走在於形勢之途。足將進而趨。口將言而囁。處汚穢而不羞。觸刑辟而

欠

欠

の皇帝から徴されたが、應せずして死んだ。靖節は其諡である。

歸去來兮。田園將蕪。胡不歸。既自以心爲形役。奚惆悵而獨悲。悟已往之不諫。知來者之可追。實迷塗其未遠。覺今是而昨非。舟搖搖以輕颺。風飄飄而吹衣。問征夫以前路。恨晨光之熹微。

【字義】 ○蕪 雜草が茂ること。 ○惆悵 うらみ悲しむさま。 ○搖搖 ゆらりゆらりとする。 ○征夫 通行人。 ○晨光 日影。 ○熹微 太陽の影のひすかなこと。

【釋義】 歸らうかナア、故郷の田園は、今や雜草が茂つて荒れかかつて居る、何をくづして歸らないのか。今迄は心が肉體に使役されて、官途に就いたりして居たが、考へると洵に恥しいことである。併し之をどうしてうらみ悲しむことがあらう。過去は悔んでも及ばないのを悟るとともに、未來はどうと改善が出来ることを知つた。思へば従前は行路を踏み迷つて居たが、それは餘り久しい間ではなかつた。今になつてこそ、自分の處置が善良で、昨日までの仕方は間違つて居たのに氣がついた。官を辭して家に歸るが、最良の方法だといふことを述べた。いよく歸路に就いて舟に乗つたが、舟はゆらゆらと軽く揚り、風はひらりと衣を吹き、氣分は一時に晴晴とした。急ぐ心は、道行く人に歸り路を尋ね、早くも太陽が落ちかかつて、光がかすかになるが恨めしい。(歸路の模様を寫す)

乃瞻衡宇。載欣載奔。僮僕歡迎。稚子候門。三逕就荒。松菊猶存。携幼入室。有酒盈樽。引壺觴以自酌。眄庭柯以怡顏。倚南窗以寄傲。審容膝之易安。

【字義】 ○衡宇 かわき門と家。 ○三逕 三すぢの小路。 ○庭柯 庭前の木の枝。 ○寄傲 世に傲るの情を寄せる。

【釋義】 いよいよ郷里に辿りついて、やれ嬉しやと思つて、自宅の門や家を見ると、欣びの餘り思はず識らず走り出した。しもべは懼んで出迎へ、子供は門で候つて居た。先づ庭園を見渡すと、三すぢ四すぢの小路は、荒れたとはいへ、松も菊も以前通り残つて居た。子供の手をひいて室内へ這入ると、待受けの酒が樽に一杯になつて居る。そこで酒壺や酒杯を引寄せて獨酌し、庭の木の枝ぶりを見て、自然に笑顔になる。南窓に凭りかかつて世に傲る心を寄せ、つくづくと膝を容れるだけの狭い家でも、身に屈託がなければ、心神は安樂であることが始つて分つた。(家に歸つてからの心持ちと、其模様を述べた)

園日涉以成趣。門雖設而常關。策扶老以流憩。時矯首以遷觀。雲無心而出岫。鳥倦飛而知還。景翳翳以將入。撫孤松而盤桓。

【字義】 ○流憩 あるきまはつて休息する。 ○遷觀 はるかに見渡す。 ○岫 山のほらあな。 ○翳翳 光が薄らぐさま。 ○盤桓 「たちもとほる」 進まうとして進まぬこと。

【釋義】 さて隠居してから、庭園は毎日あるいて手入れをするから、其趣きは増す許り、門はあつても交際をしないから何日でも閉めたきり、杖は老軀を扶けて園中を歩行かせて呉れるが、廻り歩いて疲れると休息もする。時折りは首をあげて四方を見廻はすと、雲は無心で山の穴から出て来る。鳥は飛ぶことに厭いて時々に還るを知つて居る。月影はだんだん薄くなつて山の端に落ちかかり、室内に這入らうとして、ふと一本の松を撫でますつて見て、霜雪にも屈しない節操が慕はしく、足は進まうとしても進まない。(園中の情景を述べ立てた)だが、自分の心を雲に喩へて、寸毫の束縛を受けないことをいひ、鳥は故林に歸るを、自分も機會を見て郷里に隱棲するに喩へた)

歸去來兮。請息交以絕遊。世與我以相遺。復得計焉。求悅親戚之情話。樂琴書以消憂。農人告余以春及。將有事於西疇。或命巾車。或棹孤舟。既窈窕以尋壑。亦崎嶇而經丘。木欣欣以向榮。泉涓涓而始流。善萬物之得時。感吾生之行休。

【字義】 ○西疇 西のはたけ。 ○巾車 布帛の類でおほひ飾つた車。 ○窈窕 山水の奥深いさま。 ○崎嶇 山坂のでこぼこしていること。 ○涓涓 水が細く流れるさま。

【釋義】 ア、歸つて来て好いことをした。どうか今後は一切交際をやめ、世間は自分を忘れ、自分は世間を忘れたい。此上どうして車に乗つて諸方を奔走して官位などを求めたりしやうか。唯、親戚の情の籠つた話が嬉しく、琴や書籍を楽しんで、心のもやもやを掻き消す許りだ。農夫は自分に「もう春の耕作の時期が来た」

と告げたり、さあ是からは自分も農事に忙しくなつて来る。或る時は覆のかかつた車にのり、或る時は小舟に棹し、山の奥深くに谷の景色を尋ね、亦は険しい路を辿つて丘に来て見ると、樹木はいそ／＼として繁茂しかつて居り、泉はもよ／＼と流れ出て居る。萬物は春になつて、是から益々繁茂するのを見ると如何にも喜ばしいが、同時に、自分は段段老齡に向かつて、最後は死ぬるのだと感ずる。(退隱以後、交際を謝絶し、農業に従事したり、遊覽を縦にしたりして居る中に、ふと物に感じたことを説いた)

已矣乎。寓形宇内復幾時。曷不委心任去留。胡爲乎遑遑欲何之。富貴非吾願。帝鄉不可期。懷良辰以孤往。或植杖而耘耔。登東臯以舒嘯。臨清流而賦詩。聊乘化以歸盡。樂夫天命復奚疑。

【字義】○遑遑 おちつかないさま。○帝郷 仙郷をいふ。○良辰 天氣の晴朗な日。○耘耔 草きり上かふ。○東臯 つづらをりに曲つて居る澤を臯といふのが、此處では澤邊の上の丘くらゐに見るが好からう。

○乘化 造物者の爲すがまゝに任せる。

【釋義】 さてもさても、この形骸が天地間に存在するは、一體、どの位の長さであらう。洵にはかないものではないか。それは何故心まかせにして、生命の死生のまゝにならぬのか。どうしてまご／＼して何をしやうとするのだ。富貴になるは自分の志願でなく、それかといつて、仙郷に往くなどは豫期されるものでない。此上は天氣晴朗の日を喜び單身であちこちを遊び廻はり、又、或る時は杖を地に立てて置いて、草取り丑ひひ東の澤邊の丘に登つて靜に氣を吹き出し、又は清い流に向つて詩を作つたりして、造物者の仕業に任

せて壽命の盡きるを待ち、天命を樂む外、何の疑ひ感ふことがあらうか。

文章軌範新釋終

文章軌範(白文)

卷一 侯字集

放膽文

凡學文初要膽大終要心小由蠶入細由俗入雅由繁入簡由豪蕩入純粹

此集皆蠶枝大葉之文本於禮義老於世事合於人情初學熟之開廣其胸襟發舒其志氣但見文之易不見文之難必能放言高論筆端不容束矣

與于襄陽書

韓文公

七月三日將仕郎守國子四門博士韓愈謹奉書尚書閣下士之能享大名顯當世者莫不有先達之士負天下之望者為之前焉士之能垂休光照後世者亦莫不有後進之士負天下之望者為之後焉莫為之前雖美而不彰莫為之後雖盛而不傳是二人者未始不相須也

然而千百載乃一相遇焉豈上之人無可援下之人無可推歟何其相須之殷相遇之疎也其故在下之人負其能不

肯詔其上。上之人負其位不肯顧其下。故高材多戚戚之窮。盛位無赫赫之光。是二人者之所爲皆過也。未嘗干之不可謂上無其人。未嘗求之不可謂下無其人。

愈之誦此言久矣。未嘗敢以聞於人。側聞閣下抱不世出之才。特立而獨行道。方而事實。卷舒不隨乎時。文武惟其所用。豈愈所謂其人哉。抑未聞後進之士有遇知於左右。獲禮於門下者。豈求之而未得邪。將志存乎立功。而事專乎報主。雖遇其人。未暇禮邪。何其宜聞而久不聞也。愈雖不才。其自處不敢後於恆人。閣下將求之而未得。歟。古人有言。請自隗始。

愈今惟朝夕芻米僕賃之資。是急不過廢閣下一朝之享而足也。如曰吾志存乎立功。而事專乎報主。雖遇其人。未暇禮焉。則非愈之所敢知也。世之覲覲者。既不足以語之。磊落奇偉之人。又不能聽焉。則信乎命之窮也。謹獻舊所爲文一十八首。如賜覽觀。亦足以知其志之所存。愈恐懼再拜。

後念九日復上宰相書

韓文公

三月十六日前。鄉貢進士韓愈謹再拜言。相公閣下。愈聞周公之爲輔相。其急於見賢也。方一食三吐。其哺方一沐三握。其髮當是時。天下之賢材皆已舉用。姦邪讒佞。欺負之徒。皆已除去。四海皆已無虞。九夷八蠻。之在荒服之外者。皆已賓貢。天災時變。昆蟲草木之妖。皆已銷息。天下之所謂禮樂刑政教化之具。皆已脩理。風俗皆已敦厚。動植之物。風雨霜露之所沾被者。皆已得宜。休徵嘉瑞。麟鳳龜龍之屬。皆已備至。

而周公以聖人之才。憑叔父之親。其所輔理承化之功。又盡。章章如是。其所求進見之士。豈復有賢於周公者哉。不惟不賢於周公而已。豈復有賢於時百執事者哉。豈復有所計議能補於周公之化者哉。

然而周公求之如此。其急惟恐耳目有所不聞見。思慮有所未及。以負成王託周公之意。不得於天下之心。如周公之心。設使其時輔理承化之功。未盡。章章如是。而非聖人之才。而無叔父之親。則將不暇食。與沐豈特吐哺握髮之勤而止哉。惟其如是。故于今頌成王之德。而稱周公之功不衰。

今閣下爲輔相。亦近耳。天下之賢才。豈盡舉用。姦邪讒佞。欺負之徒。豈盡除去。四海豈盡無虞。九夷八蠻。之在荒服之外者。豈盡賓貢。天災時變。昆蟲草木之妖。豈盡銷息。天下之所謂禮樂刑政教化之具。豈盡脩理。風俗豈盡敦厚。動植之物。風雨霜露之所沾被。豈盡得宜。休徵嘉瑞。麟鳳龜龍之屬。豈盡備至。

其所求進見之士。雖不足以希望盛德。至比於百執事。豈盡出其下哉。其所稱說。豈盡無所補哉。今雖不能如周公之吐哺握髮。亦宜引而進之。察其所以而進退之。不宜默默已也。愈之待命四十餘日矣。書再上而志不得通。足三及門而闈人辭焉。惟其昏愚不知逃遁。故復有周公之說焉。閣下其亦察之。

古之人三月不仕。則弔。故出彊必載質。然所以重於自進者。以其於周不可則去之。魯於魯不可則去之。齊於齊不可

則去之宋之鄭之秦之楚也

今天下一君四海一國舍乎此則夷狄矣去父母之邦矣故士之行道者不得於朝則山林而已矣山林者士之所獨善自養而不憂天下者之所能安也如有憂天下之心則不能矣故愈每自進而不知愧焉書屢上足數及門而不知止焉寧獨如此而已惴惴焉惟不得出大賢之門下是懼亦惟少垂察焉瀆冒威尊惶懼無已愈再拜

○代張籍與李浙東書

韓文公

月日前某官某謹東向再拜寓書浙東觀察使中丞李公閣下籍聞議論者皆云方今居古方伯連帥之職坐一方得專制於其境內者惟閣下心事筆墨與俗輩不同籍固以藏之胸中矣

近者閣下從事李協律翱到京師籍與李君友也不見六七年聞其至馳往省之間無恙外不暇出一言且先賀其得賢主人李君日子豈盡知之乎吾將盡言之數日籍益聞所不聞籍私獨喜常以爲自今以後不復有如古人者於今忽有之

退自悲不幸兩目不見物無用於天下胸中雖有知識家無錢財寸步不能自致今去李中丞五千里何由致其身於其人之側開口一吐其胸中之奇乎因飲泣不能語既數日復自奮曰無所能人乃宜以盲廢有所能人雖盲當廢於俗輩不當廢於行古人之道者

浙水東七州戶不下數十萬不盲者何限李中丞取人固當問其賢不賢不當計其盲與不盲也當今盲於心者皆是若籍自謂獨盲於目爾其心則能別是非若賜之坐而問之其口固能言也幸未死實欲一吐出心中平生所知見閣下能信而致之於門耶

籍又善於古詩使其心不以憂衣食亂閣下無事時一致之座側使跪進其所有閣下憑几而聽之未必不如聽吹竹彈絲敲金擊石也夫盲者業專於藝必精故樂工皆盲籍倘可與此輩比並乎

使籍誠不以畜妻子憂饑寒亂心有錢以濟醫藥其盲未甚庶幾復見天地日月因得不廢則自今至死之年皆閣下之賜閣下濟之以已絕之年賜之以既盲之視其恩輕重大小籍宜如何報也閣下裁之度之籍慙覲再拜

上張僕射書

韓文公

九月一日愈再拜受牒之明日在使院中有小吏持院中故事節目十餘事來示愈其中不可者有自九月至明年二月之終皆晨入夜歸非有疾病事故輒不許出當時以初受命不敢言

古人有言曰人各有能有不能若此者非愈之所能也抑而行之必發狂疾上無以承事於公忘其將所以報德者下無以自立喪失其所以爲心夫是則安得而不言

凡執事之擇於愈者非謂其能晨入夜歸也必將有以取之苟有以取之雖不晨入夜歸其所取者猶在也下之事上

不一其事上之使下不一其事量力而任之度才而處之其所不能不彊使爲是故爲下者不獲罪於上爲上者不得怨於下矣

孟子有云今之諸侯無大相過者以其皆好臣其所教而不好臣其所受教今之時與孟子之時又加遠矣皆好其聞命而奔走者不好其直己而行道者聞命奔走者好利者也直己而行道者好義者也未有好利而愛其君者未有好義而忘其君者今之王公大人惟執事可以聞此言惟愈於執事也可以此言進

愈蒙幸於執事其所從舊矣若寬假之使不失其性加持之使足以爲名實而入盡辰而退申而入終酉而退率以爲常亦不廢事天下之人聞執事之於愈如是也必皆曰執事之好士也如此執事之待士以禮如此執事之使人不枉其性而能有容如此執事之欲成人之名如此執事之厚於故舊如此又將曰韓愈之識其所依歸也如此韓愈之不諂屈於富貴之人如此韓愈之賢能使其主待之以禮如此則死於執事之門無悔也

若使隨行而入逐隊而趨言不敢盡其誠道有所屈於己天下之人聞執事之於愈如此皆曰執事之用韓愈哀其窮收之而已耳韓愈之事執事不以道利之而已耳苟如是雖日受千金之賜一歲九遷其官感恩則有之矣將以稱於天下曰知己則未也伏惟哀其所不足矜其愚不錄其罪察其詞而垂仁採納焉愈恐懼再拜

與陳給事書

韓文公

愈再拜愈之獲見於閣下有年矣始者亦嘗辱一言之譽貧賤也衣食於奔走不得朝夕繼見其後閣下位尊伺候於門墻者日益進夫位益尊則賤者日隔伺候於門墻者日益進則愛博而情不專愈也道不加脩而文日益有名夫道不加脩則賢者不與文日益有名則同進者忌始之以日隔之疎加之不以不專之望以不與者之心而聽忌者之說由是閣下之庭無愈之跡矣

去年春亦嘗一進謁於左右矣溫乎其容若加其新也屬乎其言若闕其窮也退而喜也以告于人其後如東京取妻予又不得朝夕繼見及其還也亦嘗一進謁於左右矣邈乎其容若不察其愚也悄乎其言若不接其情也退而懼也不敢復進今則釋然悟翻然悔曰其邈也乃所以怒其來之不繼也其悄也乃所以示其意也

不敏之誅無所逃避不敢遂進輒自疏其所以并獻近所爲復志賦已下十首爲一卷卷有標軸送孟郊序一首生紙寫不加裝飾皆有楷字注字處急於自解而謝不能俟更寫閣下取其意而略其禮可也愈恐懼再拜

○後十九日復上宰相書

韓文公

二月十六日前鄉貢進士韓愈謹再拜言相公閣下向上書及所著文後待命凡十有九日不得命恐懼不敢逃遁不知所爲乃復敢自納於不測之誅以求畢其說而請命於左右

愈聞之蹈水火者之求免于人不惟其父兄弟之慈愛然後呼而望之也將有介於其側者雖其所憎怨苟不至

乎欲其死者則將大其聲疾呼而望其仁之也彼介于其側者聞其聲而見其事不惟其父兄弟之慈愛然後往而全之也雖有所憎怨苟不至於欲其死者則將狂奔盡氣濡手足焦毛髮救之而不辭也若是者何也其勢誠急而其情誠可悲也

愈之彊學立行有年矣愚不惟道之險夷行且不息以陷於窮餓之火水其既危且亟矣大其聲而疾呼矣閣下其亦聞而見之矣其將往而全之歟抑將安而不救歟有來言於閣下者曰有觀溺於水而燕於火者有可救之道而終莫之救也閣下且以爲仁人乎哉不然若愈者亦君子之所宜動心者也

或謂愈子言則然矣宰相則知子矣如時不可何愈竊謂之不知言者誠其材能不足以當吾賢相之舉耳若所謂時者固在上位者之爲爾非天之所爲也前五六年時宰相薦聞尙有自布衣蒙抽擢者與今豈異時哉且今節度觀察使及防禦營田諸小使等尙得自舉判官無間於已仕未仕者況在宰相吾君所尊敬者而曰不可乎

古之進人者或取於盜或舉于管庫今布衣雖賤猶足以方於此情隘辭蹙不知所裁亦惟少垂憐焉愈再拜

應科目時與人書

韓文公

月日愈再拜天池之濱大江之濱曰有怪物焉蓋非常鱗凡介之品彙匹儔也其得水變化風雨上下於天不難也其不得水蓋尋常尺寸之間耳無高山大陵曠塗絕險爲之間隔也然其窮涸不能自致乎水爲獮獵之笑者蓋十八九

矣如有力者哀其窮而運轉之蓋一舉手一投足之勞也

然是物也負其異於衆也且曰爛死於沙泥吾寧樂之若俛首帖耳搖尾而乞憐者非吾之志也是以有力者遇之熟視之若無覩也其死其生固不可知也

今又有有力者當其前矣聊試仰首一鳴號焉庸詎知有力者不哀其窮而忘一舉手一投足之勞而轉之清波乎其哀之命也不哀之命也知其命而且鳴號之亦命也愈今者實有類於是是以忘其疎愚之罪而有是說焉閣下其亦憐察之

答陳商書

韓文公

愈白辱惠書語高而旨深三四讀尙不能通曉茫然增愧赧又不以其淺弊無過人智識且諭以所守幸甚愈敢不吐露情實然自識其不足補吾子之所須也

齊王好竽有求仕於齊者操瑟而往立王之門三年不得入叱曰吾瑟鼓之能使鬼神上下吾鼓瑟合軒轅氏之律呂客罵之曰王好竽而子鼓瑟雖工如王之不好何是所謂工於瑟而不工於求齊也

今舉進士於此世求祿利行道於此世而爲文必使一人不好得無與操瑟立齊門者比歟文誠工不利於求求不得則怒且怨不知君子必爾爲不也故區區之心每有來訪者皆有意於不肖者也略不辭讓遂盡言惟吾子諒察愈

白

送石處士序

韓文公

河陽軍節度御史大夫烏公爲節度之三月求士於從事之賢者有薦石先生者公曰先生何如曰先生居嵩邙澗穀之間冬一裘夏一葛食朝夕飯一孟蔬一盤人與之錢則辭請與出遊未嘗以事免勸之仕則不應坐一室左右圖書與之語道理辨古今事當否論人高下事後當成敗若河決下流而東注若駟馬駕輕車就熟路而王良造父爲之先後也若燭照數計而龜卜也

大夫曰先生有以自老無求於人其肯爲某來耶從事曰大夫文武忠孝求士爲國不私於家方今寇聚於恆師環其疆農不耕收財粟殫亡吾所慮地歸輸之塗治法征謀宜有所出先生仁且勇若以義請而強委重焉其何說之辭於是撰書詞具馬幣卜日以授使者求先生之廬而請焉先生不告於妻子不謀於朋友冠帶出見客拜受書禮於門內宵則沐浴戒行李載書冊問道所由告行於常所來往晨則畢至張上東門外

酒三行且起有執爵而言者曰大夫真能以義取人先生真能以道自任決去就爲先生別又酌而祝曰凡去就出處何常惟義之歸遂以爲先生壽又酌而祝曰使大夫恆無變其初無務富其家而飢其師無甘受佞人而外敬正士無味於詔言惟先生是聽以能有成功保天子之寵命又祝曰使先生無圖利於大夫而私使其身圖

先生起拜祝辭曰敢不蚤夜以求從祝規於是東都之士咸知大夫與先生果能相與以有成也遂各爲歌詩六韻退愈爲之序云

送溫處士赴河陽軍序

韓文公

伯樂一過冀北之野而馬羣遂空夫冀北馬多於天下伯樂雖善知馬安能空其羣耶解之者曰吾所謂空非無馬也無良馬也伯樂知馬遇其良輒取之羣無留良焉苟無良雖謂無馬不爲虛語矣

東都固士大夫之冀北也恃才能深藏而不市者洛之北涯曰石生其南涯曰溫生大夫烏公以鉞鎮河陽之三月以石生爲才以禮爲羅羅而致之幕下未數月也以溫生爲才於是以石生爲媒以禮爲羅又羅而致之幕下東都雖信多才士朝取一人焉拔其尤暮取一人焉拔其尤自居守河南尹以及百司之執事與吾輩二縣之大夫政有所不通事有所可疑奚所諮而處焉士大夫之去位而巷處者誰與嬉遊小子後生於何考德而問業焉搢紳之東西行過是都者無所禮於其廬若是而稱曰大夫烏公一鎮河陽而東都處士之廬無人焉豈不可也

夫南面而聽天下其所託重而恃力者惟相與將耳相爲天子得人於朝廷將爲天子得文武士於幕下求內外無治不可得愈糜於茲不能自引去資二生以待老今皆爲有力者奪之其何能無介然於懷耶生既至拜公於軍門其爲吾以前所稱爲天下賀以後所稱爲吾致私怨於盡取也畱守相公首爲四韻詩歌其事愈因推其意而序之

送楊少尹序

韓文公

昔疏廣受二子以年老一朝辭位而去于時公卿設供張祖道都門外車數百兩道路觀者多歡息泣下共言其賢漢史既傳其事而後世工畫者又圖其迹至今照人耳目赫赫若前日事國子司業楊君巨源方以能詩訓後進一旦以年滿七十亦白丞相去歸其鄉世常說古今人不相及今楊與二疏其意豈異也

予忝在公卿後遇病不能出不知楊侯去時城門外送者幾人車幾兩馬幾匹道路觀者亦有歎息知其為賢與否而太史氏又能張大其事為傳繼二疏踪跡否不落莫否見今世無工畫者而畫與不畫固不論也

然吾聞楊侯之去丞相有愛而惜之者白以為其都少尹不絕其祿又為歌詩以勸之京師之長於詩者亦屬而和之又不知當時二疏之去有是事否古今人同不同未可知也

中世士大夫以官為家罷則無所歸楊侯始冠舉於其鄉歌鹿鳴而來也今之歸指其樹曰某樹吾先人之所種也某水某丘吾童子時所釣遊也鄉人莫不加敬誠子孫以楊侯不去其鄉為法古之所謂鄉先生沒而可祭於社者其在斯人歟其在斯人歟

送高閑上人序

韓文公

苟可以寓其巧智使機應於心不挫於氣則神完而守固雖外物至不膠於心堯舜禹湯治天下養叔治射庖丁治牛師曠治音聲扁鵲治病僚之於丸秋之於弈伯倫之於酒樂之終身不厭奚暇外慕夫外慕徒樂者皆不造其堂不嚼其藏者也

往時張旭善草書不治他技喜怒窘窮憂悲愉佚怨恨思慕酣醉無聊不平有動於心必於草書焉發之觀於物見山水崖谷鳥獸蟲魚草木之花實日月列星風雨水火雷霆霹靂歌舞戰鬥天地事物之變可喜可愕一寓於書故旭之書變動猶鬼神不可端倪以此終其身而名後世今閑之於草書有旭之心哉不得其心而逐其跡未見其能旭也為旭有道利害必明無遺錙銖情炎於中利欲鬪進有得有喪勃然不釋然後一決於書而後旭可幾也今閑師浮屠氏一死生解外膠是其為心必泊然無所起其於世必澹然無所嗜泊與淡相遭頽墮委靡潰敗不可收拾則其於書得無象之然乎

然吾聞浮屠人善幻多技能閑如通其術則吾不能知矣

送殷員外使回鶻序

韓文公

唐受天命為天子凡四方萬國不問海內外無大小咸臣順於朝時節貢水土百物大者特來小者附集元和睿聖文武皇帝既嗣位悉治方內就法度十二年詔曰四方萬國惟回鶻於唐最親奉職尤謹丞相其選宗室四品一人持節

往賜君長告之朕意又選舉有經法通知時事者一人與之爲貳

由是殷侯侑自太常博士遷尙書虞部員外郎兼侍御史朱衣象笏承命以行朝之大夫莫不出餞酒半右庶子韓愈執蓋言曰殷大夫今人適數百里出門惘惘有離別可憐之色持被入直三省丁寧顧婢子語刺刺不能休今子使萬里外國獨無幾微出於言面豈不真知輕重大丈夫哉丞相以子應詔真誠知人矣士不通經果不足用於是相屬爲詩以道其行云

原 毀

韓 文 公

古之君子其責己也重以周其待人也輕以約重以周故不怠輕以約故人樂爲善聞古之人有舜者其爲人也仁義人也其求所以爲舜者責於己曰彼人也予人也彼能是而我乃不能是蚤夜以思去其不如舜者就其如舜者聞古之人有周公者其爲人也多材與藝人也求其所以爲周公者責於己曰彼人也予人也彼能是而我乃不能是蚤夜以思去其不如周公者就其如周公者舜大聖人也後世無及焉周公大聖人也後世無及焉是人也乃曰不如舜不如周公吾之病也是不亦責於身者重以周乎

其於人也曰彼人也能有是是足爲良士矣能善是是足爲藝人矣取其一不責其二卽其新不究其舊恐恐然惟懼

其人之不得爲善之利一善易脩也一藝易能也其於人也乃曰能有是是亦足矣曰能善是是亦足矣是不亦待於人者輕以約乎

今之君子則不然其責人也詳其待己也廉詳故人難於爲善廉故自取也少己未有善曰我善是是亦足矣己未有能曰我能是是亦足矣外以欺於人內以欺於心未少有得而止矣是不亦待其身者已廉乎其於人也曰彼雖能是其人不足稱也彼雖善是其用不足稱也舉其一不計其十究其舊不圖其新恐恐惟懼其人之有聞也是不亦責於人者已詳乎夫是之謂不以衆人待其身而以聖人望於人吾未見其尊己也

雖然爲是者有本有原意與忌之謂也怠者不能修而忌者畏人修吾嘗試之矣嘗試語於衆曰某良士某良士其應者必其人之與也不然則其所疎遠不與同其利者也不然則其畏也不若是強者必怒於言懦者必怒於色矣又嘗語於衆曰某非良士某非良士其不應者必其人之與也不然則其所疎遠不與同其利者也不然則其畏也不若是強者必說於言懦者必說於色矣

是故事脩而謗興德高而毀來嗚呼士之處此世而望名譽之光道德之行難矣將有作於上者得吾說而存之其國家可幾而理矣

卷二 王字集

放體文

辯難攻擊之文雖厲聲色雖露鋒鏃然氣力雄健光燄長遠讀之令人意強而神爽初學熟此必雄於文千萬人場屋中有司亦當刮目

○評 臣論

韓 文 公

或問諫議大夫陽城於愈可以爲有道之士乎哉學廣而聞多不求聞於人也行古人之道居於晉之鄙晉之鄙人薰其德而善良者幾千人大臣聞而薦之天子以爲諫議大夫人皆以爲華陽子不色喜居於位五年矣視其德如在草野彼豈以富貴移易其心哉
愈應之曰是易所謂恆其德貞而夫子凶者也惡得爲有道之士乎哉在易蠱之上九云不事王侯高尚其事蹇之六二則曰王臣蹇蹇匪躬之故夫不以所居之時不一而所蹈之德不同也若蠱之上九居無用之地而致匪躬之節以蹇之六二在王臣之位而高不事之心則冒進之患生曠官之刺興志不可則而尤不終無也
今陽子在位不爲不久矣聞天下之得失不爲不熟矣天子待之不爲不加矣而未嘗一言及於政視政之得失若越

人視秦人之肥瘠忽焉不加喜戚於其心問其官則曰諫議也問其祿則曰下大夫之秩也問其政則曰我不知也有道之士固如是乎哉

且吾聞之有官守者不得其職則去有言責者不得其言則去今陽子以爲得其言乎哉得其言而不言與不得其言而不去無一可者也

陽子將爲祿仕乎古之人有云仕不爲貧而有時乎爲貧謂祿仕者也宜乎辭尊而居卑辭富而居貧若抱關擊柝者可也蓋孔子嘗爲委吏矣嘗爲乘田矣亦不敢曠其職必曰會計當而已矣必曰牛羊遂而已矣若陽子之秩祿不爲卑且貧章章明矣而如此其可乎哉

或曰否非若此也夫陽子惡訕上者惡爲人臣招其君之過而以爲名者故雖諫且議使人不得而知焉書曰爾有嘉謀嘉猷則入告爾后于內爾乃順之於外曰斯謀斯猷惟我后之德夫陽子之用心亦若此者

愈應之曰若陽子之用心如此茲所謂惑者矣入則諫其君出則不使人知者大臣宰相之事非陽子之所宜行也夫陽子本以布衣隱於蓬蒿之下主上嘉其行誼擢在此位官以諫爲名誠宜有以奉其職使四方後代知朝廷有直言骨鯁之臣天子有不僭賞從諫如流之美庶巖穴之士聞而慕之束帶結髮願進於闕下而伸其辭說致吾君於堯舜熙鴻號於無窮也如書所謂則大臣宰相之事非陽子之所宜行也且陽子之心將使君人者惡聞其過乎是啓之

也

或曰陽子不求聞而人聞之不求用而君用之不得已而仕守其道而不變何子過之深也愈曰自古聖人賢士皆非有心求於聞用也闔其時之不平人之不义得其道不敢獨善其身而必以兼濟天下也孜孜矻矻死而後已故禹過家門不入孔席不暇暖而墨突不得黔彼二聖一賢者豈不知自安佚之爲樂哉誠畏天命而悲人窮也

夫天授人以賢聖才能豈使自有餘已誠欲以補其不足者也耳目之於身也耳司聞而目司見聽其是非視其險易然後身得安焉聖賢時人之耳目時人聖賢之身也且陽子之不賢則將役于賢以奉其上矣若果賢則固畏天命而闔人窮也惡得以自暇逸乎哉

或曰吾聞君子不欲加諸人而惡訐以爲直者若吾子之論直則直矣無乃傷于德而費于辭乎好盡言以招人過國武子之所以見殺於齊也吾子其亦聞乎

愈曰君子居其位則思死其官未得位則思脩其辭以明其道我將以明道也非以爲直而加人也且國武子不能得善人而好盡言於亂國是以見殺傳曰惟善人能受盡言謂其聞而能改之也子告我曰陽子可以爲有道之士也今雖不能及已陽子將不得爲善人乎

○諱辯

韓文公

愈與李賀書勸賀舉進士賀舉進士有名與賀爭名者毀之曰賀父名晉肅賀不舉進士爲是勸之舉者爲非聽者不察和而倡之同然一辭皇甫湜曰子與賀且得罪

愈曰然律曰二名不偏諱釋之者曰謂若言徵不稱在言在不稱徵是也律曰不諱嫌名釋之者曰謂若禹與雨丘與蓋之類是也今賀父名晉肅賀舉進士爲犯二名律乎爲犯嫌名律乎父名晉肅子不得舉進士若父名仁子不得爲人乎

夫諱始於何時作法制以教天下者非周公孔子歟周公作詩不諱孔子不偏諱二名春秋不譏不諱嫌名康王釗之孫實爲昭王曾參之父名皙曾子不諱晉周之時有騏期漢之時有杜度此其子宜如何諱將諱其嫌遂諱其姓乎將不諱其嫌者乎

漢諱武帝名徹爲通不聞又諱車轍之轍爲某字也諱呂后名雉爲野雞不聞又諱治天下之治爲某字也今上章及詔不聞諱滸勢秉機也惟宦官宮妾乃不敢言諱及機以爲觸犯

士君子立言行事宜何所法守也今考之於經質之於律稽之以國家典賀舉進士爲可邪爲不可邪

凡事父母得如曾參可以無譏矣作人得如周公孔子亦可以止矣今世之士不務行曾參周公孔子之行而諱親之名則務勝於曾參周公孔子亦見其惑也夫周公孔子曾參卒不可勝勝周公孔子曾參乃比於宦官宮妾則是宦官